m 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 16 m 50 1 2 3 4

26.10. 3

46
1766
505-65

集全曲戯クルベドンリトス

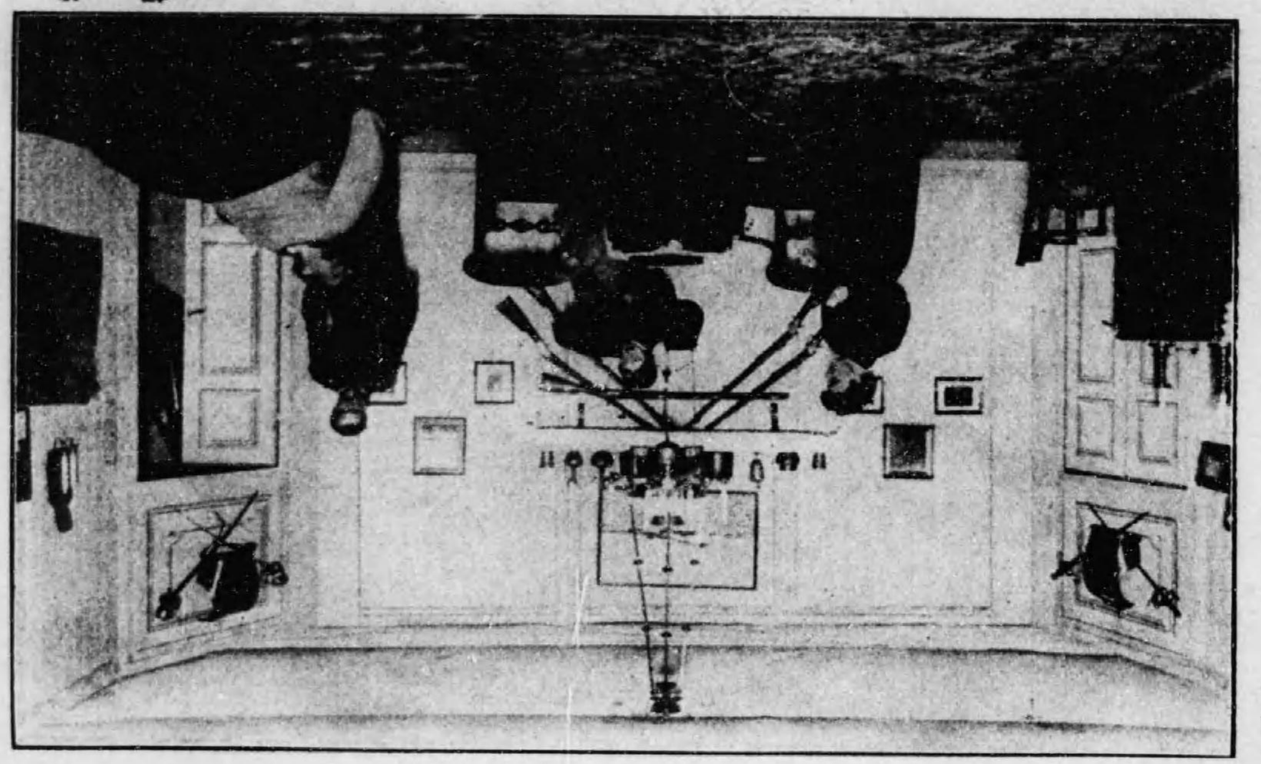
—2—

自然主義戯曲二部作と
幕物一の一十

楠山正雄譯

大正
13. 1. 31
内交

1924
新潮社刊行



熱風

ら づ た い 火

序説

『自然主義戯曲二部作と十一の一幕物』は、一八八七年、戯曲家ストリントベルクが三十九歳から、一八九七年同四十九歳にいたる前後十年間の劳作の殆ど全部であつて、いはゆる「四十代のストリントベルク」の戯曲方面に於けるほゞ完い面容であり、またいはゆる「極端自然主義者としてのストリントベルク」の全作篇を網羅したものともいへる。

こゝちみに、各作篇の目次と年代をあげて見ると

一八八七年	(三十九歳)	父親
同		なかま同士
一八八八年	(四十歳)	ジュリー嬢
一八八九年	(四十一歳)	ヘムゼーの人々
同		債鬼
同		賤民(パリア)
一八九〇年	(四十二歳)	熱風(サムウム)
同		より強いもの

一八九二年（四十四歳）　天國の鍵
一八九三年（四十五歳）　借と貸
同　母の愛
同　死の前に
同　最初の警告
一八九七年（四十九歳）　火いたづら
同　きづな

これで見ても、たゞ二つ、民衆劇『ヘムゼーの人々』と童話劇『天國の鍵』の風變りなのをのぞいて、この集の内容をなす十三篇の戯曲が、通じてほゞ同一の自然主義的基調をもつてゐることが知れよう。

『父親』については、既にあまりに有名でことさら註脚を加へる必要がない程である。日本に於けるストリントベルクの恐らく最も早い飜譯は、十八九年前に出た上田敏氏の『父親』であつたらう。この作の主題である「父親たる權利」に對する疑ひが今日學問上どこまで根據のあるものかしらないが、イプセンの『幽靈』などと同じく十九世紀末に於ける科學萬能思潮が、藝術的天才をまで支配した一つの現象と見ても興味がある。しかしそれよりもやはり、作者自らドイツ語全集の譯者に語

つた「學理に依つて書かない、體驗に依つて書いた」といふこの作の動機に、いひしれないいたましさとなつかしさをわたしは感ずるものである。

悲劇と喜劇と、形式の上の變化はあつても、題材にも意想にも意識的聯絡があつて、『父親』と二部作乃至姉妹作の關係をもつてゐるものは喜劇『なかま同士』である。エミール・シェリンクに從へば、『なかま同士』はもと『父親』を書く前年『奪掠者』といふ五幕物に書いたものの中、前曲めいた第一幕をのぞいて、全體を今の形に書き直したものだといふ。たゞ『奪掠者』の方の結末が『なかま同士』のそれとは反對に、夫が家を棄てゝ妻があとにのこることになつてゐるだけで、登場人物も場面の配置もほゞ同じやうである。しかし『奪掠者』の方は見本を十部ばかり刷つて當時の主な批評家や劇場支配人に贈つただけで、稿本はそのまゝ出版者が握りつぶしてしまつた。（ドイツ語全集の中にはいつてゐる。）

さて『父親』との關係は、『父親』で、母のラウラから繪畫の天才があると信じられてゐる少女のベルタが、『なかま同士』の女主人公の女流畫家ベルタの前身であるほかに、醫師のエステルマルクが妻とわかれた獨身の中年男として兩方に出てくる。作者は『父親』を第一部に、『奪掠者』（『なかま同士』）を第二部に、追々結婚生活の三部作を完成する積であつたといふ。

夫と妻が爭ふ時、夫が全敗すれば『父親』の悲劇になり、夫が全勝すれば『なかま同士』の喜劇にな

る。別々に獨立の生活を持つた男女が「なかま」になつて營む、近代社會の新現象たるいはゆる「共同生活」の批評として、作者は『なかま同士』に於て、家庭と夫の爲事を中心にしないで、却つて夫と同じ水平に立たうとする女の不自然な獨立生活が多くの場合みじめな劣敗に終ることを指摘してゐる。『十一の一幕物』のはじめにある『ジュリー孃』はもと三幕に書いたものを一幕物に書き縮めたもので、作者自らもこの作を近代劇に於ける一幕物の模範作とする意氣込であつた。『父親』は作柄からいへば、最も多くイプセンの『幽靈』に類似をもつてゐるが、作の世間的位置からいへば、『父親』に對するものは、『人形の家』であり、『幽靈』に對するものは却つて『ジュリー孃』である。この二つの作は作の位置が似てゐるだけでない、主題の深刻、構造の緊密、手法の單純、そして意識して自然主義を舞臺に徹底させて立派に成功した劃期的名作といふ點で比較の興味がある上に、『幽靈』に、三幕物で一幕物のやうな直截があれば、『ジュリー孃』には一幕物で三幕物のやうな含蓄のあるのも見のがしがたい特徴であらう。また兩作とも兩性問題遺傳問題を中心とする、近代的な性の悲劇であると共に、道德的乃至肉體的墮落による階級崩潰の事實と、これにとつて代らうとする粗野な、しかし健康な新興勢力の對立を暗示して、いはゆる問題劇の模範作となつてゐることも注意されなければならない。(序でながら付け加へて置く。ジュリー孃の呼名は、これまではわたしも、呼びなれたままドイツ風のユリエ、またはユリーと訓んでおいたが、これも下男のジャンの名のフランス風と共に、

スウェーデンの貴族社會に行はれてゐる十八世紀風の名殘だといふエドウィン・ビョルクマンの說に從つて、こんどはこれをもフランス風に訓むことにしたのである。またこの作には、作者みづから作の動機と意想を詳說し、あはせて舞臺上の自然主義のために萬丈の氣焰をあげた有名な序文があるが、これはあまりに紙幅がかさむので、ここには省いた。そして別に主としてフランス自由劇場運動の事業と精神を奬說した論文『一幕物』と一しよに、他日ストリントベルクの戲曲論集を編む機會に讓ることにした。

『ジュリー孃』に次いで『債鬼』は『十一の一幕物』中の白眉であり、『父』と併せて自然主義戲曲の頂點を代表する三傑作といふことができよう。一人の女と二人の男の三角關係をこれほど裏面から鋭く、皮肉に、理智的に扱つた作は三角關係のあまりに多く扱はれた近代劇中にも絕無だといつていい。感情にも理性にも低級な女性が、動物的本能といふたゞ一つの武器によつて男性を征服し、その肉體を荒掠し、その靈魂に寄生して吸血鬼的に彼等の靈能を搾取する、しかも彼女の相手になつた男は――前の夫も今のも、――彼女の靈魂に對していつでも債權を主張することができるといふモチーフを一向きに單純に押しすゝめて行く所に、恐らくストリントベルクの全作のどれも及ばない力がある。

『賤民』と『熱風』とは、『債鬼』とほゞ同時の作で、通じてアメリカのアラン・ポーの科學的乃至心理

的な探偵小説の影響の下に書かれたといはれてゐる。『賤民』の原題『パリア』は印度四姓の最下級に屬する首陀羅又は旃陀羅である。勿論兩主人公の中の一人たる犯罪者が社會的且道德的の賤民である意味であらう。この臆病と狡猾に對して、もう一人の主人公は高邁な叡智によつて、世間の善惡以上に立つ、ニイチェのいはゆる超人らしく見える。なほ『パリア』といふ題名は、同國の小說家オーラ・ハンスソンが同題の小說から借用したもので、內容もこの小說に本づいて脚色したものであると作者はことわつてゐる。しかしハンスソンの小說といふのは、夢遊狀態で手形僞造の罪を犯し、且これを自白した男の話を書いたもので、これを世間智と超世間智の鋭い對比として描き出したのはストリントベルクの工夫である。

『熱風』は情念の白熱的且戲曲的瞬間の舞臺的効果を豫想して書いたやうな作であるが、ここにも恐怖すべき女性の動物的本能が變つた形であらはれてゐる。

『より强いもの』はストリントベルク全作中の最も短い小品劇で、前の『熱風』がスケッチであるよりも一層氣の利いたスケッチである。夫のある女優とその夫の前の情婦がクリスマスの晩にカフェーで十二三分に足りない對話といふよりも前に聽手をおいた獨白をやる。相手は身振と表情とでこれに答へるだけである。「より强い」と誇る女が、敗者と信じられてゐる夫の前の情婦の「好み」をまねることによつて夫の歡心を買ふといふところに、男のばかりでなく、男の妻の心にまでも深く喰

ひこんで行く吸血鬼的な女性の片鱗があらはれてゐる。

以上『十一の一幕物』の第一集を形づくる五種の戲曲がより多く概念的ではあるが、隙間のない自然主義的技巧の冴えを見せてゐるに對して、第二集に於ける『きづな』以下六種の戲曲にはより圓熟した人情味の加はつた代りに、題材も手法も、寫實世相劇の常套に墮ちてゐる所がないでもない。これらは他の『ヘムゼーの人々』や『天國の鍵』と同じ群に加へて、自然主義から、次の『ダマスクスへ』へ至る間のいはゆる『地獄』時代の過渡期に屬せしむべきものである。中に『死の前に』と『母の愛』とでは、父親の子に對する犧牲的ないたましい愛情と、母親の子に對する利己的な吸血鬼的の愛情を對比して書いてゐる。これも『父親』の主題をもう一度變つた調子で奏でたものと見られる。『借と貸』はこの作者らしい澁苦い喜劇で、主人公の探檢家には『賤民』の片主人公などと同じくニイチェの影響があるといはれてゐる。『最初の警告』は作者自らが最初の妻との間に經驗したそのまゝを脚色したのださうである。作者の妻が初めて前齒を失つて、わづかに老の至つたのを感じたといふ事實によつて作つたので、作の題ももと『最初の齒』と呼ばれたのを、後に本にする時今のやうに改めたのだといふ。ドイツで一時、『秋の微』といふ題で行はれたのも、この作の內容を語るものである。

最後に、『きづな』と『火いたづら』とは、やはり作者の體驗を離れない深刻な離婚の悲劇喜劇であるが、中んづく『きづな』はこれも『父親』の主題を變つた形式で取り扱つたとも見られる、一幕物中

の名作である。愛情の結合から離れ、更に法律上の關係から離れても、夫婦はやはり子供といふ「きづな」に依ってつながれてゐる。夫婦がいかに憎み合つても、憎みのどん底までつき詰めて行くと、そこに愛の天使が惡鬼のやうな父母に笑ひかける。けれども人情を超越した裁判の結果、子供は相爭ふ二人から取り上げられて、十二人の陪審官の中の最も愚昧な二人に預けられる。絶望した男女は法廷の夕闇の中に恐しい空虛を見つめながら、むだな夫婦の爭ひの跡を悲しく回顧する。

『火いたづら』はいふまでもなく底にこの作者らしい苦澁味はたゝへながら、舞臺面は明るい外光の中に、輕い機智と甘いセンチメンタリズムの跳躍する愉快な喜劇である。

なほこの集に收められた殆ど全部の結婚生活の戯曲に對する何よりも精しい註解は、同じ作者の短篇集『結婚』と、長篇自傳小說『痴人の告白』に見出される。

一九二四年一月

譯者

內容總目

序說

自然主義戯曲二部作

父（DER VATER）……一

なかま同士（KAMERADEN）……一〇九

十一の一幕物——第一集

ジュリー嬢（FRÄULEIN JULIE）……二三一

債鬼（GLÄUBIGER）……二〇三

賤民（パリア）（PARIA）……二九三

熱風（サムウム）（SAMUM）……四二三

より强いもの（DIE STÄRKERE）……四四一

十一の一幕物——第二集

きづな（DAS BAND）……四四七

火いたづら(MIT DEM FEUER SPIELEN)……五一頁
死の前に(VORM TODE)……五七頁
最初の警告(ERSTE WARNUNG)……六〇頁
借と貸(DEBET UND CREDIT)……六五七
母の愛(MUTTERLIEBE)……六七七

父親

三幕悲劇（一八八七年）

役割

騎兵大尉
ラウラ　その妻
ベルタ　その娘
醫師エステルマルク
牧師
乳母
ネイド
従卒

事件はストックホルムに近い田舎で行はれる。現代のこと。

全三幕の舞臺

騎兵大尉の居間。後景右寄りに扉。部屋のまんなかに大きな圓卓、新聞雜誌を載せてある。右手に革のソファーと卓。右手隅にタペストリー張りの扉。左手に置時計を載せた箪笥と居間へ通ずる扉。方方の壁に武具。獵銃と獵囊など。扉のそばに衣服掛、制服の外套が掛けてある。大きい圓卓の上にはランプがついてゐる。

第一幕

第一景

騎兵大尉と牧師、革のソファーに腰を掛けてゐる。騎兵大尉は軍服に、拍車の附いた乘馬靴。牧師は黑の着附け。白のネクタイ。ベッフヘン（新教牧師が襟にかけるニ の衣巾）はしてゐない。パイプをくゆらす。

騎兵大尉　（呼鈴を鳴らす）

從卒　大尉殿、御用は。

騎兵大尉　ネイドは出てゐるか。

從卒　ネイドは臺所でお召を待つてをります。

騎兵大尉　また臺所か。すぐにここへ來いと言へ。

從卒　かしこまりました。（出て行く）

牧師　何か事件があるのかね。

騎兵大尉　なあにさ、ネイドの奴、また女中相手に何かごそ〳〵やつてゐるのだ。いやはや、しやうのない馬鹿さ。

牧師　ネイドがねえ。たしか去年もそんなことがあつたぢやないか。

騎兵大尉　あゝよくおぼえてゐるね。ところでどうだね。君から何とか言ひ聞かせてもらへないかな。どうもその方が利目がありさうだよ。そりやあ隨分どなりつけても見たし、ひつぱたいても見たのだがね、てんで答へがないのだからな。

牧師　なるほど。ではわたしが一つ聖書の本文を讀んで聞かしてやらう。但し神様のお言葉が、兵隊さんに利くものと君は思ふかい。

騎兵大尉　さあさういふことになると、元來僕は神様のお言葉なんといふものに一向用のない男なんでね、そりや御承知の次第だらうが——

牧師　無論、それは知つてゐるがね。

騎兵大尉　……だがあいつは別だ。とにかくやつて見てくれ給へ。

第二景

前景の人々。ネイド。

騎兵大尉　ネイド、貴様また何をしでかしたのだ。

ネイド　旦那様、どうも何ですが、牧師様のおいでになるところでは申し上げにくうございます。

牧師　お前さん、そんな遠慮はいらないよ。

騎兵大尉　言へ。言はんと、貴様どうするか。

ネイド　へい、まあ、その、かういふわけでございます。わたくしどもはガブリエルのところの舞踏會に參つたのですが、さうしますとあの、さうしますとルードウィッヒが申しますには……。

騎兵大尉　この話にルードウィッヒがなんの關係があるといふのだ。ほんたうのことを言へ。

ネイド　へい、そこでエンマが一緒に納屋へ行かうと申しましたので。

騎兵大尉　なるほど、するとエンマがお前をさそつたといふわけだな。

ネイド　へい、まあそんなもので。でとにかく娘の方からしかけて來ない以上、かういふ事はついに起らなかつたとも申せませう。

騎兵大尉　手ツ取早く言ふと、貴様は子供の父親なのか、さうではないのか。

ネイド　さういふことがどうしてわかるものではございませんか。

騎兵大尉　なんだと。それが貴様にはわからないのか。

ネイド　へい。まあ、あなた、さういふことはけしてわかるものではございません。

騎兵大尉　ぢやあ相手は貴様一人ではなかつたのか。

ネイド　その時は一人でした。でもそれだからかならず相手が一人だといふことはまづいへたものではございません。

騎兵大尉　貴様、ルードウィッヒも怪しいといふのか。それが貴様の腹なのだな。

ネイド　どうもだれが怪しいなんてことは言へるものではございません。

騎兵大尉　うん、だが貴様はエンマに一緒になりたいと言つたのだらう。

ネイド　へい、それはあなた、いつも言ふ口上で……。

騎兵大尉　〔牧師に〕どうもひどいことだな。

牧師　珍らしいことでもないさ。だがなあネイド、お前位な男であつてみれば、自分が父親であるかないか位わかりさうなものぢやないか。

ネイド　へい、無論そんなことも考へないでもありませんが、牧師さんの前ですが、それだからといつて、なにも後始末まで引受けるにもあたりませんからね。

牧師　まあ聞きなさい、これはお前の話だぞ。で、お前はまさか子供をつけたまゝ娘をはふり出す積りはあるまい。なんでも女と一緒になれと無理じひすることも出來ないが、子供だけは引き取つてやらなければなるまい。お前これは爲方がないぞ。

ネイド　へい、さうしますと、ルードウィッヒも同様なわけで。

騎兵大尉　かうなつては、法廷に持ち出さなくてはをさまりがつくまい。わたしにはこの裁判はとても出來ない。また實際有難くもない問題だ。ぢやあよし。行け。

牧師　ネイド。もう一言。ふん。全體お前は子供を娘につけて、今日路頭に迷はせるといふことは

不名譽千萬とは思はないか。えゝ。お前はそんな爲打をしておいて何とも――ふん、ふん……。

ネイド　へい、それはあなた、わたくしがたしかに子供の父親であるといふことがわかつてゐればとにかく、さういふことは到底わかりつこはないのでございますからね。さうしますと一生他人の產ませた子供を足手まとひにするといふことは、ほめた話でもございますまい。これは牧師様にも旦那様にも御承知願はなくてはなりません。

騎兵大尉　行け。

ネイド　御免下さいまし。〔出て行く〕

騎兵大尉　だが貴様、臺所へは行くなよ。

第三景

騎兵大尉と牧師。

騎兵大尉　どうして君はあいつをびし〳〵やつつけてくれなかつたのだ。

牧師　えゝ。わたしがびし〳〵やらなかつたといふのかい。

騎兵大尉　はて、君は只そこに坐り込んで、口のうちでぶつ〳〵言つてゐたのだ。

牧師　ほんたうのことをいふと、なにを言つていゝか、わたしにはわからなかつたのさ。なるほど娘は氣の毒なものさ。だが男の方だつて氣の毒だよ。なにしろあの男がはたして父親であるかな

いかと言ふのだからね。娘の方は養育院で四月子供に乳をやれば、あとは一生子供の面倒は見て貰へるのだ。ところが男には乳はやれないからな。娘はそのあとでおんばさんにでもなれば、けつこう上等な奉公口もあらうといふものだ。ところが男の方は、これで聯隊から放逐されてでも見たまへ、それなり將來をめちや〳〵にされてしまふのだ。

騎兵大尉　なるほど、僕も裁判官のまね事をしてこの事件の判決を下して見たいやうだ。あの從卒は勿論罪がないとは言へまい、しかしそれはほんたうにはわからないことだ。ところが一つわかつてゐることがある。それは假に誰かに罪があるとすれば、娘に罪があるといふことだ。

牧師　さうだよ、さうだよ。まあわたしは何人をも裁かうとは思はない。ところでこのろくでもない事件が間に飛び込んだが、その前は一體何の話をしてゐたのだつけ。ベルタのことや、あの子の堅信式の話だつたね。

騎兵大尉　無論堅信式と限つたわけではなかつた、むしろあれの大體の教育を論じてゐたのだつたらう。何しろこの家は女島だ、そのまた多勢の女どもがてんでん子供を教育したがつて騒ぐのだ。姑はあれに接神術をやらせようといふ。ラウラは美術家にしようといふ。家庭教師はメソヂストにしようといふ。するとばあやは浸禮教がいゝといふ。女中共は女中共で、救世軍におはいりになればいゝなどといふ。勿論一つの靈魂を、こんな風に、いろ〳〵とつづくり合されるものではない。しかもあれの素質を教導する上に、第一の權利を持つてゐる筈の僕のせつかくの苦心が、始終反對を受けてゐるのだからたまらない。だからどうしてもあれはこの家から遠ざけなければならないのだ。

牧師　この家ではあんまり大勢の女が出しやばり過ぎるのだ。

騎兵大尉　さうさ、それなんだ。なんのことはない、檻の中に虎を飼つて置くやうなものさ、赤く燒けた鐵を彼等の鼻先へさしつけ損ねたが最後、早速僕は引き裂かれてしまふ。おや君は笑つてゐるな、惡い男だ。君の現在の妹を細君にさせただけでは足りなくつて、その上君は年を取つた繼おつかさんまで僕におしつけてしまつたのだ。

牧師　繼母なんてものは内へ置くものではないよ。

騎兵大尉　うん、だが姑なら内に置く方が都合がいゝと云ふのだらう、もつとも他人の家にね。

牧師　うん、うん、誰だつてこの世にゐる間は自分の十字架を負はなくつてはならないさ。

騎兵大尉　あゝ、だが僕のは格別に重過ぎるよ。僕はおまけにばあやまでしよひ込んでゐるのだ、僕に對して、まだよだれかけを掛けてゐる赤ん坊でもあるやうな取扱をするばあやをね。あれは隨分いゝ女ではあるが、この仲間にまではいつて貰ひたくないのだ。

牧師　とにかく君は、女どもの手綱をうんと引きしめなくてはならないよ。あんまり出しやばらせ

過ぎてゐる。

騎兵大尉　おい君、どうすれば女の手綱を引きしめられるね、教へてくれ給へ。

牧師　眞面目に言つて來ると、第一ラウラなどはわたしの現在の妹ではあるが、どうも昔から少し強情ッ張りな奴でね。

騎兵大尉　なるほどラウラにはさういふところがあるが、まああれを相手ではさう面倒なこともないのだ。

牧師　おい、遠慮なくいひ給へ。知つてゐるよ。

騎兵大尉　どうもあれは空想的な教育を受けて來たせゐで、何かにつけて自分を滿足させるといふことがむづかしいらしい。だがとにかくあれは僕の妻で……。

牧師　そしてあれが君の妻であるから一番それがいゝと言ふのだね。いや、どうして、あれは君を一番苦しめてゐるのだ。

騎兵大尉　とにかく今日では、內中がひつくり返つてゐる。ラウラはベルタを手元から放すまいとする。ところで僕はこんな氣違病院に娘を置くなんてことは我慢が出來ないのだ。

牧師　でラウラは承知しないのだね。なるほど――それではきつと君が難局に立つことになりはしないかね。あれは子供の時分、自分の思ふ事を通さうとしてはよく死んだ振りをしたものだ。で、思つた物が手に這入ると、それが品物であればきつとそれを突ッ返して、品物がほしかつたのではない、自分の思ふことが通したかつたのだといつたものだ。

騎兵大尉　ぢやあその時分からすでにさうだつたのだね。ふん。いや實際時々あれはさういふ發作を起してね、僕は心配になつて、これは病氣なのかと思つた位だよ。

牧師　ところでしかし君の娘さんに對するもくろみといふのはどういふものなんだね。ラウラがどうしても承知しないといふのは。一體そこに妥協の餘地はないのかね。

騎兵大尉　君、僕はあれを神童にしたり、自分のひな形にこしらへやうなんといふ考だと思つてくれてはこまる。僕は娘の媒介人にならうといふのではない、是非結婚を目的に教育しようと言ふのではない。もつともあれがいつ迄も未婚のまゝでゐるとなれば、それは隨分苦しい日を送ることになるだらう。しかし一方からいへば、あれが男性的の行程を取つて、そのため長い教育を必要としたりすることは望まない。それで、揚句に結婚するとなれば、それだけの長い豫備教育が全然無駄になるのだからね。

牧師　ではどうしようと言ふのだ。

騎兵大尉　僕はあれに女教師になつてもらひたいのだ。するともし未婚のまゝでゐても、自分だけの始末はつく。しかも貧乏な男の教師がその收入を家族に分けてやらなければならないのとは違

つて、苦しいことはない。また結婚すればするで、その知識を子供の教育に振り向けることも出來る、これはもつともな考ではないか。

牧師　なるほどもつともな考だ。しかし、一方から考へると、あの子は繪畫にあれだけの天分を見せてゐるのだから、それを抑へつけるのは、せつかくの自然の力を無にするといふものではなからうか。

騎兵大尉　なあに、そんなことはない。わたしはあれの試作を或立派な畫かきに見せたのだ。するとその人のいふには、まあこの位なものなら學校で習へる程度ですよといふのだ。ところが去年の夏ひよつこり生若いハイカラがやつて來て、この問題をよく知つてゐて、どうしてこの嬢さんは偉大な天分を持つてゐるなんかといつたものだから、これがすつかりラウラの御機嫌にかなつてしまつたといふわけさ。

牧師　その男はあの子を何とか思つてゐたのかい。

騎兵大尉　どうもさうらしい。

牧師　やれ〳〵、そいつはこまるな。それぢやあとても助からない。厄介な話だ。そこへ持つて來て、無論ラウラには内のうちに味方があるといふわけだ。

騎兵大尉　あゝ全くその通りさ。内中が既に炎々たる焔の中に包まれてゐる。ここだけの話だが、

なにしろ戰爭は味方から起される程火の手は強いものだからね。

牧師　〔立ち上がる〕その位僕だつて知らなくつてさ。

騎兵大尉　君でも。

牧師　君でもとは。

騎兵大尉　だが一番困ることは、どうもベルタの將來が家の内で僕に對する面當半分できめられるのではないかと思はれるのだ。あれはよくこんなことを口に出していふ、女はこれもやれる、あれもやれるといふことを男に見せてやらなくてはならないといふのだ。それで夫と妻は面と向ひながらまる一日口も利かずにゐることがある。——君もう歸るのかい。まあ夕飯を食べて行き給へ。別段御馳走もあるまいけれど、御承知の通り珍客のお醫者さんが來る筈だから。君は會つたことがあるかね。

牧師　ほんの通りすがりにちらりと顏を見ただけさ。正直な、氣の置けない人らしいね。

騎兵大尉　さうかな。それはいゝな。でどうだね、あの先生は僕の相棒になれさうに思ふかい。

牧師　さあね。それはあの人が婦人に對してどの位經驗をつんでゐるか、それ次第できまることだね。

騎兵大尉　しかし君は歸る積りかい。

牧師　いや有難う、けふは夕飯に歸る約束をして來たから、歸らないとばあさんが面倒なことになるからね。

騎兵大尉　面倒な。おこると言ひたいところだらう。ちやあいゝやうにし給へ。外套を掛けてあげよう。

牧師　全くけふは隨分寒いね。やあ有難う。アドルフ君、もうすこし養生をしなくてはいけないぞ。ひどく神經衰弱らしく見えるよ。

騎兵大尉　神經衰弱に見えると。

牧師　あゝ、どうも健康らしくはないな。

騎兵大尉　ラウラが君にそんなことをいつたかい。もう二十年來あれはわたしを今にも死ぬ病人扱ひにして來たのだ。

牧師　ラウラが。どうも君が心配になるよ、養生し給へ。僕の忠告はそれさ。ちやあさやうなら。年を取つたぼツちやん。だが堅信式の話はいゝのかい。

騎兵大尉　構はない。君、かういふことはやはり世間並にやつて行くのがいゝのだよ、わたしは何も豫言者でもなければ、殉教者でもないのだから、まあ普通の人情に從つて置くほかはないさ。この話はこれだけにしよう。さやうなら。お内へよろしく。

牧師　やあ、さやうなら。ラウラによろしく。

第四景

騎兵大尉。後からラウラ。

騎兵大尉　〔箪笥を開け、彈れ戸の前に腰をかけ、計算にかゝる〕三十四——三十九、四十三——四十七、四十八、五十六。

ラウラ　〔居間から〕もしあなた、すみませんが……。

騎兵大尉　すぐだよ。——六十六、七十一、八十四、八十九、九十二、百と。何だい。

ラウラ　お邪魔でせうね。

騎兵大尉　いゝや、かまはないよ。諸拂の金だらう。

ラウラ　えゝ、そのお金です。

騎兵大尉　帳面を出してお置きなさい。目をとほしておくから。

ラウラ　帳面ですつて。

騎兵大尉　うん。

ラウラ　いつから、その帳面を出すことになるのです。

騎兵大尉　けふからだよ。この家の地位はぐらついてゐる。で、若しこの家が債權者と和談といふ

やうなことでもなつた場合、帳面がちやんとしてゐなければ、怠慢な債務者としてこちらが罰せられても爲方がないことになるのだ。

ラウラ　この家の地位がまづくなつたつて、わたしのせゐではありませんよ。

騎兵大尉　それだから、帳面を見せなければならないといふのだ。

ラウラ　小作人が納めないからつて、わたしのせゐではありません。

騎兵大尉　あの小作人の尻押を一番熱心にしたのは誰だ。お前だぞ。どうしてお前はあんな――いはゞ――のらくら者の尻押をしたのだ。

ラウラ　そのまたのらくら者をあなたはどうして雇つたの。

騎兵大尉　だつて、お前達はなんでもあの男をこちらへよこしてしまはない内は、おれにおちついて飯も食はせなかつたからだ、おちついて眠らせもしなかつたからだ。おちついて爲事もさせなかつたからだ。お前があの男を置きたがるのは、お前のにいさんが斷りたがつたからだ。お前のおつかさんがあの男を置かうといふのは、わたしが置きたがらなかつたからだ。家庭教師はあの男が敬神家だといふので、それからばあやは子供の時分あの男のおばあさんと知合だつたといふので、やはりあの男のひいきをする、そんなこんなであの男は雇はれることになつたのだ。それをもしわたしが承知しなかつたものなら、きつと今頃わたしは氣違病院にゐるか、先祖代々の墓

の中にはいるかしてゐよう。――さあでは雜川のお金とお前のお小遣だ。帳面はあとで持つて來ればいいよ。

ラウラ　〔膝をかゞめ〕どうも有難う。あなたは家計以外の出費でも、帳面につけるおつもり。

騎兵大尉　そりやあお前に關係ないことだ。

ラウラ　えゝ、えゝ、さうでせうつて、それはわたしの子供の教育がわたしに一向關係ないやうなものね。で、紳士方は夕方の會議でいよ〳〵決定になりましたか。

騎兵大尉　わたしだけの決定はとうからしてあつたのだ。で、たゞあのわたしの唯一の友人一家共有の友人にそれを知らせるだけだつたのだ。ベルタは町の下宿へ遣ることにして、二週間内に立たせるのだ。

ラウラ　ちよつとうかゞひますが、あの子は誰の處に下宿させるおつもりなの。

騎兵大尉　軍法會議員のゼーフベルクの處にね。

ラウラ　あの無神家のところに。

騎兵大尉　子供はその父の信條に依つて教育せらるべきものだと、法律には書いてある。

ラウラ　すると母はこの問題では、一切決定する權利がないのですね。

騎兵大尉　全然ない。母は法律上嫡子權を賣つたことになる。母はその權利を讓渡した代り、夫か

ら自分とその子を扶養させる義務をえたわけなのだ。

ラウラ　では自分の子供に對して何の權利もないのですね。

騎兵大尉　ないとも、全くないのだとも。一旦品物を賣つた者が、品物は取り返さう、そのくせ金はあくまで持つてゐようといふわけには行かない。

ラウラ　しかし父親と母親とが協議の上決定したとしますと――。

騎兵大尉　そんなうまいわけに行くものかい。わたしはあの子を町へ遣つておきたいのだ。お前は手もとに置きたいのだ。その等比中數はあの子が町と親の家の中間の停車場に止まつてゐるといふことになるだらう。この結び瘤は解けまいよ、さうぢやないか。

ラウラ　ぢやあ切つてしまふのですね。――ネイドはここへ何しに呼ばれたのです。

騎兵大尉　それはわたしの職務上の祕密だよ。

ラウラ　臺所ではみんな知つてゐます。

騎兵大尉　ふん、ぢやあお前だつて知つてゐる筈ぢやないか。

ラウラ　それはわたしも知つてゐます。

騎兵大尉　で、お前だけの判決はもうきまつてゐるのかい。

ラウラ　それはちやんと法律に書いてありますわ。

騎兵大尉　子供の父親は誰かなんといふことは法律には書いてないよ。

ラウラ　えゝ、だつて、そんな事普通誰にでもわかることですわ。

騎兵大尉　ところがさういふことはけしてわかるものでないと、賢い人達が說いてゐるのだよ。

ラウラ　それは妙ですね。子供の父親が誰かわかるものでないのですつて。

騎兵大尉　いや、といふ說なのだよ。

ラウラ　それは妙ですね。それないにどうして父親は母親の子に對して、そんな權利が持てるのでせう。

騎兵大尉　父親はたゞ自分が責任を引き受けるか、又は自分に責任を負はせられるかした場合に限つてさういふ權利を持つのだ。で、夫婦の間では、むろん父親たる資格に對して一切の疑惑が消滅するのだ。

ラウラ　夫婦の間では、疑惑は消滅するのですつて。

騎兵大尉　さういふものだらうね。

ラウラ　で、もし細君が不しだらをした場合には。

騎兵大尉　そんな場合なぞは、ここには用のないことだ。まだ何かたづねる事があるのかい。

ラウラ　いゝえ。

騎兵大尉　ちやあ部屋へ行くよ。ドクトルが來たら、取り次がせておくれ、頼むぜ。〔筆箱の戸を閉めて立ち上がる〕

ラウラ　承知ですわ。

騎兵大尉　〔右手のタペストリー張りの扉から出る〕來たらすぐにね、お客に失禮はしたくないからね。いゝかい。〔出て行く〕

ラウラ　わかつてゐます。

第五景

ラウラ一人。手に持つた領收證をながめてゐる。

姑の聲　〔中から〕ラウラや。

ラウラ　はい。

姑の聲　お茶ははいつたかい。

ラウラ　〔居間の入口で〕唯今すぐ持つてまゐります。

ラウラ　〔後景の出口の方へ行きかけた時、從卒その扉を開けて、エステルマルク先生でございますと取次ぐ〕

醫師　やあ、奥さん。

ラウラ　〔醫師を出迎へて、手を差し出す〕いらつしやいまし先生。まあよくおいで下さいました。主人はちよつと出てをりますが、すぐ戻つて參ります。

醫師　どうも遲く上がりまして申譯がありません。その代りもう病家は濟ませてまゐりました。

ラウラ　どうぞお掛け下さいまし。どうぞ。

醫師　はあ、有難う、奥さん。

ラウラ　ほんたうにどうも近頃この邊も、だいぶ病氣がはやるやうでございますが、まああなたはいつもお元氣で何よりでございますわ。こんな田舍に寂しく暮して居りますと、患者の面倒をよく見て下さるお醫者様のおいで下さいますことが何よりの心だのみでございますわ。先生のことはかねて御評判を伺つて居りますので、どうかこれを御緣にお心安く願ひたいと存じて居るのでございます。

醫師　いや、どうも。まあ醫者なぞがしげ〳〵伺ふ必要のない方がお宅のためには何よりです。こちらでは大體みなさん御丈夫でゐられるし、それに——。

ラウラ　はあ、お蔭さまと急性の病氣はございませんが、しかしどうもぜひさうばかりも行かないものでございましてね。

醫師　さう行かないとは。

ラウラ　どうも思ふやうにばかり參らないので困つてをります。

醫師　はてね。それはまた意外ですね。

ラウラ　これで一家の内には、名譽や良心の手前、ぜひ世間に知られたくないといふやうな事情があるものでございまして……。

醫師　たゞ醫者にだけはな……。

ラウラ　はあ、ですからいきなりお目にかゝる最初からあなたに殘らず實際をうち明けてお話するのがわたくしの苦しい義務なのでございます。

醫師　そのお話はとにかく御主人に御紹介を頂いたあとに願へませんか。

ラウラ　いゝえ。宅にお會ひになる前ぜひわたくしからお聞置きが願ひたいのです。

醫師　では御主人に關した事なので。

ラウラ　はあ、主人のことで、氣の毒なあの人のことで。

醫師　それは奥さん、御心配なことですね。あなたの御不幸に御同情申します、わたしをお信じ下さい。

ラウラ　〔ハンケチを取り出す〕夫は精神病なのでございます。それだけ申せば、あとは御判斷がつきませう。

醫師　なんとおつしやる。わたしは鑛物學に關する大尉の立派な研究論文を、敬服して讀んだものです。そしてこれはじつにはつきりしたいゝ頭腦だといつも思つてゐたものです。

ラウラ　まあ。若しわたくし共身内の者一同の思ひ違ひでしたら、こんな結構なことはございませんゝ。

醫師　しかしあの方の精神が他の方面で亂れてゐるといふことも有りうることです。どうかお話し下さい。

ラウラ　それをわたし共も心配しますのですよ。まああなた、主人は時折調子外れな考をするのですよ。尤も學者としてなら、それもふしぎはないかもしれませんが、どうもそれがために内中が途方にくれることがあるのです。例へばあの人には、なんでも手あたり次第物を買ひ込む癖があります。

ラウラ　そりや御心配ですな。ですが、どんな物をお買ひになるのです。

ラウラ　讀みもしない本を本箱にはいりきらない程買ひ込むのです。

醫師　學者が本を買ひ込むのは、それほど心配なことではありません。

ラウラ　あなたはわたくしのいふことを信じて下さらないのですね。

醫師　ですが奥さん、あなたが御自分で信じてゐる通りをお話しになるとは思つて居ります。

ラウラ　でもかういふことは馬鹿げた事ではございますまいか、ほかの星の世界ではどんなことが

あるのか、それを人間は顯微鏡で見ることが出來るなどと申すことはね。

醫師　さういふことが出來ると、大尉はいはれるのですか。

ラウラ　えゝ、できると申すのですよ。

醫師　顯微鏡でな。

ラウラ　顯微鏡でね。えゝ。

醫師　もしさうならば、心配ですな。

ラウラ　もしさうならばですつて。では先生、あなたはまだわたしの申すことに信用をお措きにならないのですね。わたしはこのとほりかうやつて家内の祕密を打ち明けてお話してゐるのですのに——。

醫師　どうも奥さん、さゝ御信頼下すつては恐縮しますが、しかしわたしも醫者として、一應調査もし、實驗もして見なければ判斷は下せません。氣が變り易いとか、考がぐらぐらするとかいふ徵候はお見えになりませんでしたか。

ラウラ　無いどころですか。もう結婚して二十年にもなりますけれど、それは一度だつて、決心をしたすぐあとからそれが變らなかつたためしはございません。

醫師　頑固な方ですか。

ラウラ　それはきまつて自分の我はおし通します、でもそれを通してしまへば、あとは一切忘れたやうで、ひとに頼んで極めてもらふ始末です。

醫師　どうもそれは困る、十分研究の必要がありますな、何しろ奥さん、意志は精神の脊骨ですからね。それがいためば、精神はぐづ〳〵に崩れてしまふのですよ。

ラウラ　ですからまあこの長い試みの年月の間、あの人のわがまゝを通させるためにわたしはどの位修業を積まなければならなかつたことでせう。それはまつたくお話しにもなりませんわ、あの人の相手になつてわたしはどんな思ひをして來たことでせう。ほんたうにお話しにもなりませんわ。

醫師　奥さん、あなたの御不幸はつく〴〵お氣の毒に存じます。どうかわたしも及ぶだけは盡すことをお約束致しませう。わたしはしん底から御同情申し上げます。どうぞあくまでわたしをお信頼下さるやうに。たゞし只今伺つたやうですと、一つあなたにお願ひして置きたい事がございます。どうか御病人に強い印象を與へさうな考を、けしてお起させにならないやうに氣をおつけ下さい。何分薄弱な頭にさういふ印象をうけると、見る〳〵擴大して、たやすく偏執狂とか固定妄想とかに成り易いものですからな、どうぞそのおつもりで。

ラウラ　ではあの、病人の疑惑をさけるやうに致すのでございますね。

醫師　さうですよ。何事によらず病人は物に感じ易いものですから、どんなことでもその頭に吹ツ込めるものですからね。

ラウラ　なるほど。それでよくわかりました。はい——。

奥で呼鈴が鳴る。

ラウラ　御免下さいまし、母が何か用事のやうですから。ちょつと失禮いたします——あゝちやうど主人が參りました——。

第六景

醫師。騎兵大尉、タペストリー張りの扉からはいつて來る。

騎兵大尉　やあ先生、おでかけでしたか。よくいらしつた。

醫師　やあ大尉。あなたのやうな名高い學者の方と御懇意に願ふのは、わたしにとつてこの上もない愉快です。

騎兵大尉　いや、どういたしまして。勤務に追はれて一向深い研究を、したくもできない有様ですが、まあどうやら、發見の緒には取りついたらしいのです。

醫師　なるほど。

騎兵大尉　わたしはやつと隕石のスペクトル分析をやり上げましたし、石炭に有機生活の痕跡を發

見しました。あなたそれをどうお考へです。

醫師　それが顯微鏡で御覽になれるのですか。

騎兵大尉　あゝいや、馬鹿な、分光器でですよ。

醫師　分光器で。これはどうも。するとやがて木星に今どんな事があるなんといふ話をして頂けるわけですね。

騎兵大尉　いや、今どんなことがあるかわかりませんが、あつたことならわかります。それにはただ、あのいま〳〵しいパリーの本屋めが、本を送つてよこしさへすればいゝのですが、どうもわたしは世界中の本屋が同盟して、わたしに反對してゐるとしか思へません。だつてあなた、この二箇月といふもの、註文を出しても、手紙をやつても、おこつた電報を打つても、まるで返事一本來やしません。わたしはそのため氣が違ひさうになります。一體どうしたのか　てんでわけがわからないのです。

醫師　やあ、それはきつとよくある奴で、ずぼらをきめ込んでゐるのですよ。まあさう性急に物を考へられないがいゝでせう。

騎兵大尉　だがどうも業腹な話で、その本が來ないと、わたしは論文が間に合はないことになるのです。それにベルリンで同じ題目を研究してゐる人のあることも、分かつてゐるものですからね。

しかしまあこの話はこれだけにしておいて、あなたのことを話しませう。あなたはこの邊にお住ひのお考がありますか、それだとこの棟つゞきにちよつとした家がありますが、それともやはり古い官宅にお引ツ越しになるお積りですか。

醫師　それは何れでもあなたの宜しいやうに。

騎兵大尉　いや、あなたの宜しいやうに、おつしやつて下さい。

醫師　大尉、それはあなたにきめて頂かなくてはなりますまい。

騎兵大尉　いゝや、わたしは何にもきめられません。あなたはどちらにしてもさういつて下さらなければいけない。わたしには考は無いのです。全く無いのです。

醫師　はあ、しかしどうもわたしにはきめられませんが……。

騎兵大尉　ほんたうです、あなたのいゝやうにおつしやつて頂きたい。わたしはこの場合一向自分には意志も意見も希望もないのです。あなたは御自分のしたいと思ふことがわからないほどの臆病な方なのですか。さあ返事をして下さい、でないとわたしはおこりますよ。

醫師　なるほど、わたし次第といふことでしたら、わたしはこちらに住ひませう。

騎兵大尉　よろしい。有難う。やあ——失禮しましたね。どうもわたしのくせで、人からまあどちらでもといふやうなことをいはれるのが、まことにいやでしてね。〔呼鈴を鳴らす〕

乳母　〔出て來る〕

騎兵大尉　あゝ、マルグレット、お前かい。お前、先生にお貸しする家の支度が出來てゐるかどうか知つてゐるかい。

乳母　はい、旦那様、お支度は出來て居ります。

騎兵大尉　さうか。では先生、この上お引き留めしますまい。さぞお疲れでせう。では御機嫌よう、いづれ明日お目にかゝります。

醫師　では大尉、お休みなさい。

騎兵大尉　妻から何かの様子をお話したことでせうから、あなたもこの邊がどんな所かほゞおわかりのことゝ思ひますが。

醫師　さあ、奥さんからいろ〳〵と、勝手の知れない者にさしあたり必要な御忠告は頂きました。ではいづれまた。

第七景

大尉。乳母。

騎兵大尉　何か用か。どうかしたのか。

乳母　まあ、アドルフ様、旦那様、聞いて下さいよ。

騎兵大尉　うん、ばあや、何だい、いつて御覽。お前の話だけは、癇癪をおこさずに聞けるのだ。

乳母　そこでアドルフ様、御相談ですがね、どうですえ、あなた様も半分だけまけて、こんどのお子様のお話では何とか奥様と折り合ふ道はないものでございませうかね。まあ考へてもごらんなさいまし、母親は……。

騎兵大尉　考へても御覽は父親さ、なあマルグレット。

乳母　いゝえ、父親は子供の外にまだいろ〳〵と澤山持つてゐます、けれど、母親はその子供だけが自分のものなのです。

騎兵大尉　それだよ、ばあや。母親の重荷は一つしかない、ところがわたしは三つもしよつてゐる。しかもその母親のお荷物までもしよつてゐるのだ。わたしがもしあれとあの子供をしよひ込んでゐなかつたら、世間へ出ても、老いぼれ軍人よりもう少しちがつた地位にありつけるかもしれないとはお前思はないかい。

乳母　そんなことをわたし思つたことはございません。

騎兵大尉　うん、さうだらうとも。何でもお前はわたしに間違つたことをさせるやうに育てたのだからな。

乳母　まあ、アドルフ様、わたしが何事もあなたのおためとばかり考へてゐることがおわかりになりませんか。

騎兵大尉　いや、ばあや、それはわたしにも分かつてゐるよ。だがなばあや、お前は何がわたしのためだかわからないのだ。いゝかい、ばあや、わたしは子供に生命をくれてやつただけでは足りないのだ、わたしの魂まで分けてやりたいのだ。

乳母　まあ、何ですか、さういふことはわたしにはよくわかりません。でもどうか皆さんお互様に折り合つて行く工夫はないものかと思ひますので。

騎兵大尉　マルグレット、お前はわたしの味方ぢやないな。

乳母　まあわたしが味方でない。やれ〳〵アドルフ様はなんといふことをおつしやるのか。あなたがごくお小さい頃は、ほんのばあやの子供でおありのことをどうして忘れませう。

騎兵大尉　それをわたしも忘れるものかい。お前はわたしには母親同樣だつた。わたしがみんなから背中を向けられても、お前だけはずつとわたしの味方になつてゐてくれた。ところが今といふ今になつて、お前はわたしを棄てゝ、そして敵方につくのだ。

乳母　敵方へ。

騎兵大尉　さうだ、敵方へさ。だつてお前はこの家の中がどんな風になつてゐるか知つてゐよう。だつてお前は何事も初めからしまひまでずつと見て來てゐるのだからな。

乳母　それは殘らず見て來てをります。でもまあ全體二人の人間が死ぬ程苦しみ合はなくてはならないのでございませうか。それもこんなことさへなければじつに善い方で、どなたにもほかへは御親切なお二人がね。決して奥様はわたしや外の者に向つては、けしてこんなことはございませんでしたが……。

騎兵大尉　そりやわたしに向つてだけさ。それはわかつてゐるよ。だがな、ここでわたしはお前についつて置くがなあ、マルグレット今、お前がわたしをふり棄てるのは罪惡だぞ。なぜといつて、この頃この内ではわたしに對して陰謀がたくまれてゐるのだ、そしてあのお醫者までがわたしの味方ではないのだからな。

乳母　やれまあ、アドルフさま、あなたは誰彼の見さかひなく惡人にしておしまひなさるが、でも旦那様、それはあなたにほんたうの信仰のあらつしやらないせゐでございますよ。えゝ、それはもうさうでございますとも、さうでございますとも。

騎兵大尉　ところがお前と浸禮教のお仲間と、それだけがたゞ一つの正しい信仰を見つけたといふわけだ。まあお前は爲合せだよ、うん。

乳母　えゝ、それはアドルフさま、わたしはあなたのやうに不爲合せではございません。神さまの前にへり下つてごらんなさるがよい、やがて隣人の愛といふことで、神様はあなたをきつと爲合せにして下さることがお分かりでございませう。

騎兵大尉　妙だな、神や愛のことを話し出すと、きつとお前の聲はいかつくなるし、目付きは憎みをもつて來るぞ。どうもマルグレット、お前にはきつとほんたうの信仰がないのだな。

乳母　えゝ、あなた様はたゞもう御自分の智慧に慢じてばかりいらつしやる。さういふものはいざといふ時一向お役に立ちは致しませんよ。

騎兵大尉　いつもは引けてばかりゐる奴が、どうも恐しく思ひ上がつたことを言ふぞ、それはむろんお前達風情のけだものには、どんな智慧だつて役に立つ筈のないのは知れたことだ。

乳母　まあ口ぎたなくよくもそんなことを。でも何でも、このマルグレットばあやは、やはりばあやの大きな大きなお坊さまを、あくまでおいとしく思つて居りますぞ。そしてこのお坊さまも今に嵐が起りますと、きつといゝ子になつてばあやの所へ歸つておいでになることでせう。

騎兵大尉　マルグレット。勘忍してくれ、だが信じてくれ。わたしはこの家の中に、お前をおいて誰一人わたしのためを思つてくれる者はないのだ。わたしを助けてくれ、どうも何事か起りさうな氣がしてしやうがないのだ。どんな事だといふことはわからない、だが今起りかけてゐるのはりつぱな事ではない。

居間の中から呼び聲。

騎兵大尉　何だ。誰が聲を立てたのだ。

第八景

前景の人々。ベルタ、居間から出て來る。

ベルタ　パパ、パパ。助けてよ。あたしを助けてよ。

騎兵大尉　どうしたのだ、お前。お言ひ。

ベルタ　助けて頂戴ね。あたし、ひどい目に遭はされさうなんです。

騎兵大尉　誰がひどい目に遭はせるといふのだ。お言ひ。お言ひ。

ベルタ　おばあさまが。でもわたしが悪かつたのよ、だつてあたし、おばあさまをだまかしたのだから。

騎兵大尉　お話し。

ベルタ　えゝ、でも何にも言つちやいやですよ。ねえよくつて、おとうさま、後生だから。

騎兵大尉　だがまあ何だか、言ひなさい。

乳母出て行く。

ベルタ　はい。おばあさまはね、きつと毎晩ランプの心を細くして、それからあたしを卓の前に坐らせて、ペンを手に持たせて、一枚の紙に向はせるのよ。そしておばあさまはおつしやるの、いまに靈魂が何か書くのだからつて。

騎兵大尉　何だと。そんなことをされながらお前はわたしに話さなかつたのか。

ベルタ　御免なさい、でもあたし、それを話しえなかつたのですわ、だつておばあさまはそれを話すと、靈魂が仇をするつておつしやるのでせう。それからペンが字を書きます、けれど書いてゐるのがあたしなのかどうなのかわからないのよ。時々はうまく書ける時もあるけれど、どうかするとまるつきり駄目な時もあるわ。それでくたびれて來ると、書けなくなるのですけれど、でもやはり書かなくてはならないの、ところで今夜はあたし、自分ではうまく書けたと思つてゐたのだけれど、おばあさまは、これはスタグネリウスの文句で、わたしがおばあさまをだまかしたのだつておつしやるのよ。それからおばあさま、それは大へんおおこりになるのですもの。

騎兵大尉　お前は靈魂といふものがあると思ふかい。

ベルタ　あたし知りませんわ。

騎兵大尉　だがわたしには、そんなもののないことは分かつてゐる。

ベルタ　でもおばあさまは、パパにはわからないのだつていつていらしつてよ。そしてパパはたくさんもつと悪い事をしていらつしやる、それはよその星の世界まで探るつもりでゐるのだつて。

騎兵大尉　そんな事をいふのか。そんな事をいふのか。まだ何かいつてゐるか。

ペルタ　おとうさまに魔法なんか使へないつてね。

騎兵大尉　そんなことをおとうさまも出來るとはいやしない。お前知つてゐるだらう。隕石といふものがあるね、あゝ外の天體から落ちて來る石さ。それをわたしはしらべて、その石がこの地球と同じ成分を含んでゐるかゐないかそれをいふ事は出來る。わたしにわかるのはそれだけのことなのだ。

ペルタ　でもおばあさまには見えても、おとうさまには見えないものがあるのだつて、おばあさまは言つていらしつたわ。

騎兵大尉　おい〳〵、それはおばあさまの嘘さ。

ペルタ　おばあさまは嘘はおつきにならないわ。

騎兵大尉　なぜつかない。

ペルタ　さうするとおかあさまだつて嘘つきになるわ。

騎兵大尉　ふん。

ペルタ　おかあさまが嘘つきだなんておつしやるなら、あたしもうけしておとうさまを信じないわ。

騎兵大尉　おとうさまはけしてそんなことは言はないからな、お前はおとうさまを信ずるのだ、そこで言ふがね、お前はぜひとも自分の幸福のため、將來のため、この家をはなれなければならないのだよ。どうだね。町へ行つて何か有益な事を敎はりたいと思ふかい。

ペルタ　えゝ、えゝ、それはあたしどんなに町へ行きたいか知れないわ、ここをはなれてどこだつてかまはない行くわ。あたしたゞ時々、いゝえ、ちよい〳〵おとうさまにお目にかゝれさへすればね。あゝもう、ここの内のなかは始終うつたうしくつて、薄ら寂しくつて、まるで冬の夜みたいですわ。でもねえおとうさま、おとうさまがいらつしやると、もうそれは春の朝二重窓をとり拂つたやうな心持になるのよ。

騎兵大尉　こいつ、こいつ、可愛いことをいふな。

ペルタ　でもねえ、パパ。パパはおかあさまに、やさしくしてあげなくつてはいけないわ。よくつて。おかあさまはそれはよく泣いていらしつてよ。

騎兵大尉　ふん。ぢやあお前は町へ行くな。

ペルタ　えゝ。えゝ。

騎兵大尉　だが、ママがいけないといつたらどうする。

ペルタ　だつてきつといゝつておつしやるに違ひないわ。

騎兵大尉　だがもしいけないといつたら。

ペルタ　さうね。さうしたらあたし、どうしたらいゝかわからないわ。でもきつといゝつておつし

やるに違ひないわ、違ひないわ。

騎兵大尉　お前からママに頼む積りかい。

ベルタ　それはおとうさまからうまあくいつて頼んで下さらなくてはいけないわ。だつておかあさまはわたしのいふことなんぞ振りむいて見ても下さらないから。

騎兵大尉　ふん。――お前もいゝし、わたしもいゝが、ところでママがいけないといふことになるとすると、わたし達はその時どうしたらいゝだらう。

ベルタ　あゝ〳〵、するとまた喧嘩だわ。どうしておとうまさとおかあさまは、しつくり行かないのでせう……。

第九景

前景の人々。ラウラ。

ラウラ　まあ、ベルタ、ここにおいでなの。するとちやうどこの子の考も聞けようといふものね、何しろこれで一生の運命がきまらうといふのだから。

騎兵大尉　若い娘の生涯をどういふ風に導いて行くか、それについて根深い考を立てるなんといふことは子供にはむづかしからう、これに反してわたし達は多數の若い娘の生涯の伸びて行く路筋を見て知つてゐることだから、ほゞその見當もつかうといふものだ。

ラウラ　でもわたし達はお互に意見がちがふのですから、ベルタが決定したら宜しいでせう。

騎兵大尉　わたしは誰にも自分の權利は奪はせない。奪はせないのだ。ベルタ、お前あつちへ行つておいで。

ベルタ　〔もじ〳〵する〕

ラウラ　ベルタ、ちよつとの間ここにいらつしやい。

ベルタ　〔よけいもじ〳〵する〕

騎兵大尉　おいで、ベルタ。

ラウラ　〔迷つて立ち止まつてゐるベルタをじつと見る〕さあそれで、お前は内を出たいと思ふかい。やはり内にゐたいと思ふかい。

ベルタ　あたしわかりませんわ――。

ラウラ　いゝかい、ベルタ、何もお前の希望次第でどうなるといふのではないのだよ。でもとにかく、これをよく聞いておきたいのだからね。

ベルタ　ほんたうのことをいひますとね――。

騎兵大尉　〔ベルタの腕を取つて、彼女を物やはらかに左手の扉口へ連れて行く〕

ラウラ　あなたはこの子の宣告を恐れていらつしやるのね、わたしの註文通りになると思ふからで

せう。

騎兵大尉　ベルタがこの家を出たがつてゐることはわたしには分かつてゐる。だがお前がこの子の意志を都合よく變へる力を持つてゐることもわたしには分かつてゐる。

ラウラ　あら、わたしにそんな力があるでせうか。

騎兵大尉　「うん、お前は自分の意志を押し通す段になると、惡魔のやうな力を持つてゐる、だがそれは目的にはどんな手段でもえらばない奴がいつも出す奥の手さ。例へばお前はドクトル・ノルリンクをどういふ風にして追ひ拂つて、新規の醫者を入れたらう。

ラウラ　さうね、どういふ風にやつたのでしたかね。

騎兵大尉　お前はあの人にずゐぶん酷い事をいつた、それで行つてしまつたのだ。それからこんどの人をにいさんに運動して貰つたのだ。

ラウラ　だつてその位ごく何でもない、あくまでも法にかなつたことですわ。ぢやあベルタはぜひこの家を出ることになるのですか。

騎兵大尉　さうだ、二週間内に行かなければならない。

ラウラ　それはあなたの御決定なのですね。

騎兵大尉　うん。

ラウラ　あなたはそれについてベルタとお話をなすつたのですか。

騎兵大尉　うん。

ラウラ　ぢやわたしはわたしでそれを喰ひ止めて見せますが、いゝでせうね。

騎兵大尉　そんな事が出來るものか。

ラウラ　出來ないつて。あなたは母親として、態々自分の子を惡い人間の中へはふり出して、おかげでせつかく自分が娘にをしへ込んだ事が、何がなしに馬鹿げた事にされてしまふのを、おいそれとゆるしておくと思ひますか。そんなことをしたら、母親は一生涯自分の娘から輕蔑され通しになるのですよ。

騎兵大尉　ぢやあお前は父親として、その娘が無智な無教育な細君から、おやぢは山師だなんと言ひきかされてゐるのを構はず見てゐると思ふかい。

ラウラ　なあに父親の方は母親ほどのことはないでせうよ。

騎兵大尉　なぜ。

ラウラ　なぜといつて、母親は子供によけい近いものになつてゐますからね、何しろ誰が子供の父親か誰にもわかるものでないといふ事が、發見されてからといふものはね。

騎兵大尉　それがこの場合にどうあてはまるといふのだ。

ラウラ　あなたがベルタの父親であるかないか、あなたは御存じないのですよ。

騎兵大尉　わたしがそれを知らないと。

ラウラ　えゝ、まあ誰にもわからない事は、あなたにだつてわからないでせうよ。

騎兵大尉　貴様、冗談を言ふのか。

ラウラ　いゝえ、わたしはたゞあなたの論法を利用したまでですわ。それに全體わたしがあなたに不しだらをはたらいてゐなかつたといふ事が、あなたはどうして分かります。

騎兵大尉　わたしも大抵のことはお前を信用してゐるが、さういふことになると別だ。またもしほんたうにそんなことがあつたとして、お前がそれをうちあけていふだらうとも思はれない。

ラウラ　假りに、もしわたしがたゞ自分の子供をおさへてはなすまい、あくまで思ふ儘にしたい、その代りどんな目にあつてもいゝ、追ひ出されてもいゝ、侮蔑をうけてもいゝとなつたらどう。そしてかうなればわたしが、ベルタはわたしの子ではあつても、あなたの子ではないといひ切るのが却つて正しい事だとしたらどう。假りに――。

騎兵大尉　もう止せ。

ラウラ　まあ假りにですよ、さうなればさすがのあなたの權力も寂滅でせうよ。

騎兵大尉　わたしが父親でないといふ事をお前が證明した曉にはな。

ラウラ　それは大してむづかしい事でもないでせう。それをして見ろとおつしやるのですか。

騎兵大尉　もう止せ。

ラウラ　勿論わたしはたゞ實の父親の名前を擧げて、場所と時日をはつきりきめていへばいゝのです――例へば、いつベルタは生れたか――それは結婚後三年めで……。

騎兵大尉　もうよせ。よさないと……。

ラウラ　よさないとどうなの。それはよしてもいゝわ。でもあなた、ゆつくりと御自分のなさる事やおきめになる事を考へて見て下さい。そしてとりわけ世間の笑ひ物にならないやうにして下さい。

騎兵大尉　これはみんなじつに悲しむべきことだ。

ラウラ　だからよけいあなたが笑ひ物になるのですよ。

騎兵大尉　ところでお前はならないのだね。

ラウラ　えゝ、さうならないだけに利口なやり方を、わたし達はしてゐるのですよ。

騎兵大尉　だから、誰だつてお前達と喧嘩は出來ない。

ラウラ　それを何だつてあなたはそのうは手な敵と喧嘩をなさらうとするのです。

騎兵大尉　うは手だと。

ラウラ　さうですとも。妙な言草のやうですが、わたしはこれまで一度だつて男を相手にして、自分の方がうは手だと感じなかつたためしはないのですよ。

騎兵大尉　よし、そんなら今に貴様、不足のない相手をしへてやるが、けして忘れやうのないりつぱな相手をな。

ラウラ　さぞ面白いことでせうね。

乳母　〔出て來て〕お食事の支度が出來ました。どうぞ皆さん、いらしつて、召し上がつて下さいまし。

ラウラ　あゝ、行くわ。

騎兵大尉　〔もじ〳〵してゐる。ソファーに付いた卓わきの椅子に腰をおろす〕

ラウラ　あなた、お夕飯を召し上がりにいらつしやいませんか。

騎兵大尉　いや、どうも、わたしは何にも食ひたくない。

ラウラ　どうして。おこつていらつしやるの。

騎兵大尉　いゝや、でも腹がへらないから。

ラウラ　いらつしやい、でないといろんなことを聞かれますからね――よけいなことをね。――素直にしてね、――お厭なら、そこにいらつしやい。〔出て行く〕

乳母　アドルフ様、一體どうしたといふのでございます。

騎兵大尉　わたしにもわからない。どうしてお前達は一人前の年とつた男子をさう子供を扱ふやうに出來るものなのか、お前そのわけがいへるかい。

乳母　さあ、それはばあやにもわかりませんけれど、多分かういふことではございませんか、あなた方殿方は、えらい人もつまらない者もおしなべて、女の生んだ子供だといふ所からくるのではございませんか……。

騎兵大尉　そして女は一人だつて男の生んだものではない。だがやはりわたしはベルタの父親だ。どうだ、マルグレット、お前はそれを信じないか。えゝ、信じないか。

乳母　やれ〳〵、この方はどうしてかう子供らしいのでせう。むろん御自分のお子さまのおとうさまでございますとも。さあもう、お食事にいらつしやいましよ。こんなところに坐り込んでぶつぶついつていらつしやらないでね、まあいらつしやいまし。

騎兵大尉　〔立ち上がる〕出て行け、女め。地獄へ行け、魔女め。〔出入の扉口で〕スウェールト。スウェールト。

従卒　〔出て來る〕大尉殿。

騎兵大尉　橇の支度をしろ、すぐと。

乳母　大尉様、まああなた……。

騎兵大尉　出て行け、女。さつさと。

乳母　神様、どうぞお守り下さいまし。この先どうなりますことやら。

騎兵大尉　〔ミュッツェ（縁無し毛無帽）を被り、外出の支度をする〕夜中までは歸らないものと思つてくれ。〔出て行く〕

乳母　エスさま、どうぞお助け下さいまし、この先どうなりますことやら。

第二幕

前幕と同じ飾付。ランプが卓の上に點つてゐる。夜のこと。

第一景

醫師。ラウラ。

醫師　大尉とお話を願つてみました所では、この問題にはまだ一向にとりとめた所がないと申す外はありません。第一あなたのお話では、御主人はほかの天體に就いてあの驚くべき成績を顯微鏡に依つて得られたといふことでしたが、それは間違ひであつたのです。今し方伺つた所ではやはり分光器だといふことですから、すると精神錯亂の疑は取消です。いや、どうして御主人は寧ろ科學のために貢献をせられたのだと信じます。

ラウラ　でもわたくし、まるでそんな事は申し上げませんでしたわ。

醫師　いや、奥さん、わたしはあの時の話を書き止めておいたのです。それにどうも聞き違ひがあるやうに思ひましたから、わざ〳〵要點を伺ひ直したことまでおぼえて居ります。かういふ事件の考査はあくまで良心を以てすべきです。何しろ成年の男子に未成年者の宣告をするかしないかといふ所なのですから。

父親

ラウラ　未成年者の宣告をするのですつて。

醫師　さうです、狂人となると、公民權をも家長權をもうしなふことは、むろんあなたも御承知でせう。

ラウラ　いゝえ、一向存じませんでした。

醫師　第二にわたしの不審に思はれる點が一つあるのです。御主人は本屋へ幾ら手紙を出してもいつまでも返事が來ないと言つて居られました。これなぞも或はあなたの思ひすごしから、その通信を遮つて居られたのではありませんか。

ラウラ　それはいたしましたわ。でも一家の利害に注意するのはわたしの義務でしたから、主人の勝手にさせて置くわけには行きませんでした、それをさせて置けば、あの人のために一家は破滅でございますとも。

醫師　失禮ですがどうもあなたは、さういふ行爲の結果がどうなるといふことを頭にお置きにならなかつたやうですね。御主人にしても御自分の行動に、あなたが秘密で干渉されてゐることを發見されたなら、それが本になつて猜疑心が雪崩のやうに大きくなります。またこれがためにあなたは御主人の意志に掛金をおかけになつたことになるし、御主人の癖癖を極度に昂らせたことにもなるでせう。自分の一生懸命な希望が途中で妨害せられたり、自分の意志が壓迫せられたりした場合、腸がにえかへるやうに思ふのは、あなただつてお覺えのあることでせう。

ラウラ　わたしにさういふ覺えがあるかとおつしやるのですね。

醫師　で、それならば御主人はどう感じられたか、あなたには御判斷がつきさうなものですね。

ラウラ　〔立ち上がる〕もう夜中ですのに、あの人は歸つて參りません。何かひよんな事でもあつたのではないでせうかねえ。

醫師　まあ奥さん、とにかくお話して頂きませう、一體今晩、わたしがおいとましたあとでどんなことがあつたのですか。一通り伺つておかなければなりません。

ラウラ　妄想につかれましてね、よほど妙な頭になつてゐるのですよ。まああなた、お考へがつきますか、主人は自分で、自分の子供の父ぢやないなどゝいふ、途方もないことを考へつくのですよ。

醫師　そりや妙ですな。一體どうしてそんなことを考へつかれたのでせうな。

ラウラ　どうもわかりません。宅は扶養料のことで、部下の一人を訊問いたしました。わたしが相手の女をかばひますと主人はむきになつて、誰が子供の父親かそれを言ひうるものはない筈だと申すのです。まあわたしもどうかして主人の氣をおちつかせようと思ひまして、どの位苦勞いたしましたことか、でもかうなりましてはどうする工夫もないと思つてゐます。〔泣く〕

醫師　いやそんなにまでなるものではないのですよ。しかし何分御主人の猜疑心をおこさないやうにして何とかいたさなければなりません。その何ですか、大尉は前にもそんな風に變になられたことがあつたのですか。

ラウラ　六年前にもやはり同じやうな事がございました。そしてその時は自分でもよく分かつてゐまして、お醫者の方に宛てた手紙にも、自分は理性をどうかしたのではないかといふやうなことを申してゐたほどでした。

醫師　はゝあ、はゝあ、さうですか、するとそれは深い根ざしのあるお話ですな。しかしどうも家庭生活の神聖等のこともあり――何でもかでも伺ふといふわけには行きませんから、たゞ自分の見てゐる事だけに止めて置かなければなりません。出來てしまつた事は殘念ながら出來ない昔にかへすわけには行きませんが、それにしても出來てしまつた事に對して治療の方法を講じる必要はあつたのでせうな――今頃どこに御主人はゐられるでせう。

ラウラ　どうも一向にその見當がつかないのでございます。とにかく只今のところ頭がめちや〳〵になつてゐるのでございますから。

醫師　いかゞでせう、わたしは、御主人の御歸宅をお待ち受けした方がいゝですか。なあにわたしの方は、あなたのおかあさまがちよつとお加減が悪くてお見舞に上がつたのだと言つて御主人の猜疑を避けておいてもよろしい。

ラウラ　えゝ〳〵、さう願へれば大變結構ですわ。先生、どうぞお歸りにならないで下さいまし。わたしもう心配でたまらないのでございます。でもあなたが主人の容態に就いてお考へのことは、かまはず主人におつしやつて下すつた方がよろしくはございませんでせうか。

醫師　いや、精神病の患者に向つては、患者自身その問題で何か言ひ出さないうちに決して言ふものではありません。それもほんのたまですね。何分、その時の風向次第です。とにかくしかしわれわれがいつまでもこゝにかうしてゐるのはいけませんな。わたしはこのお次の部屋にでも引つ込んでゐることにしますかな。さう致せばさほどわざとらしく見えますまい。

ラウラ　えゝ、それですとなほ更結構で、それならマルグレットにもこちらに來てゐてもらへます。あのばあやは主人が留守ですと、いつもずつと起きてゐるのでございますし、それに主人に對して多少ともおさへの利くのは、あの女にかぎるのでございますから。〔扉口へ行き〕マルグレットや、マルグレットや。

乳母　奥様でございますか。――旦那様はお歸りになりましたか。

ラウラ　いゝえ、ですがお前はこちらにゐて旦那様のお歸りを待つてゐて下さい。そしてお歸りになつたら、おかあさんがお加減が悪いので、先生においでを願つてあると言つておくれ。

乳母　はい、はい。氣をつけて、萬事都合よく參るやうにいたしませう。

ラウラ　〔居間の扉を開ける〕どうぞ先生、こちらへおはいり下さいまし。

醫師　はい、

第二景

乳母　〔卓の前に腰かける。讃美歌集と目がれを取り出す〕さう、さう。さう、さう。〔低い聲で讀む〕

あゝ悲しみはそらに滿つれど、
喜びは空しきわが世、それはた短き定めなるを。
死の天使は天がけりつゝ、
果より果の世界に呼ばふ——
あゝ、空しきは世、はかなきは世と。
さう、さう。さう、さう。
なべて地の上に生けるものは、
死の羽ばたきにあへなく倒る。
たゞ、悲しみのみひとり生きて、
いち早く墓石に文字をぞ刻むなる——

あゝ空しきは世、はかなきは世と。
さう　さう。

ペルタ　〔珈琲茶碗と刺繍を持ってはいって來る。小聲で話す〕ばあや、お前の所に來てゐてもよくつて。向ふはそりや氣味が惡いのよ。

乳母　やれ〳〵、まあ。ペルタさまはまだ起きていらしつたのですか。

ペルタ　わたしパパにユルクラップ（クリスマスのおくりもの）を縫つてあげなくてはならないのよ。ほらこれよ。それとわたしこの通お前にいゝ物を持つて來たのよ。

乳母　まあ、でもお嬢樣、いけませんねえ。ペルタさまは朝お早いのでせう、もう十二時過ぎてますよ。

ペルタ　だつてかまはないわ。わたし、とても只に一人ぼつちでなんかゐられやしない。だつてお化が出るやうなんだもの。

乳母　ほらね、この家は土臺が惡いのだとばあやの申し上げたとおりでせう。一體ペルタさまは何をお聞きになりましたの。

ペルタ　あゝ、わたし、屋根裏で誰か歌を唄ふ聲を聞いたの。

乳母　屋根裏で。こんな時間に。

ペルタ　えゝさうよ、それがね、ついこれまで聞いた事もないやうな、それは悲しい悲しい歌なのよ、そしてそれは屋根裏のお部屋から聞えるらしいのよ、ほら、搖籃が置いてあるわね、左の方にね。

乳母　やれまあ、やれまあ、それに今夜はまあなんてお天氣だらう。どうも煙突はやはり吹き倒されるだらう。「あゝこの地の上のいとなみこそ——嘆きと悶えと惱みなれ——せめてものよきことは——始終にたえぬ勞苦のみ」——まあね、お嬢様、神さまに樂しいクリスマスをして頂きませう。

ペルタ　ねえ、マルグレット、パパが御病氣だつていふのはほんたう。

乳母　えゝ、多分さうなのでございませう。

ペルタ　ぢやあクリスマスのお祝ひも出來ないわね。でも御病氣だといふのに、どうして起きていらつしやるのだらう。

乳母　さやうでございます、お嬢様、旦那様は御病氣でも起きていらつしやられるのでございますよ。おや、どなたかおもてに見えたやうだ。さあもう行つて、お休みなさいまし。珈琲茶碗を持つていらつしやいましよ。さうしないと旦那様に叱られますからね。

ペルタ　〔茶碗受を持つて出て行く〕お休み、ばあや。

乳母　お休みなさいまし、お嬢様、御機嫌よろしう。

第三景

乳母。騎兵大尉。

騎兵大尉　〔外套を脱ぐ〕お前まだ起きてゐたのかい。行つてお休み。

乳母　はい、ついお待ち申したので……。

騎兵大尉　〔蠟燭をつける。算筒の蓋を開ける。その前に腰をかけて、かくしから手紙や新聞を取り出す〕

乳母　アドルフさま。

騎兵大尉　何か用か。

乳母　御老母様がお加減が惡うございましてね。それで先生が來ておいでゞございますよ。

騎兵大尉　よほど惡いのかい。

乳母　いゝえ、そんなことはないやうでございます。ほんのお風氣でございます。

騎兵大尉　〔立ち上がる〕おいマルグレット、お前の子供の父親は誰だつたな。

乳母　まあ、それはもう度々お話し申し上げたでせう。ならず者のヨハンソンですつて。

騎兵大尉　お前たしかにさうだつたと思つてゐるかい。

乳母　まあ子供らしいことを。あの男一人きりなことは、むろんたしかだと思つてゐます。

騎兵大尉　さうか。だがあの男にして見れば、自分一人きりだといふことがたしかに思へるかな。

いんやどうしてあの男はさうは行くまい、お前の方はそれで行けようがね。ねえ、おい、そこがちがふ所なのだよ。

乳母　いゝえ、わたしはそんなことに何のちがつたことがあらうとは存じません。

騎兵大尉　いや、お前にはそれが見えないのだ。しかしそこにちがひはたしかにあるのだ。〔卓の上に置いてあつた寫眞帖をめくる〕ベルタはわたしに似てゐると思ふか。〔寫眞帖の中の一枚の寫眞をじつと見る〕

乳母　へえ、玉子を二つ並べたやうでございます。

騎兵大尉　ヨハンソンは自分が父親だといふ事を承知したのか。

乳母　まあむりにもさういふことにさせられたのです。

騎兵大尉　させられた。どうもひどいことだな。——先生がおいでだ。

第四景

騎兵大尉。乳母。醫師。

騎兵大尉　今晩は、先生。母はどんな樣子ですか。

醫師　別にむづかしいといふのではありません。まあ左足の輕微な脫臼ですな。

騎兵大尉　はてね、マルグレットはたしか風だといつたやうだつたが。病氣もいろ〳〵に見立てられるものと見える。さあ行つてお休み、マルグレット。

乳母出て行く。間。

騎兵大尉　さあ先生、どうぞおかけ下さい。

醫師　〔かける〕有難う。

騎兵大尉　斑駿を牝馬にかけあはすと、縞のある小馬が出來るといふのはほんたうですか。

醫師　〔妙な顏をして〕そのとほりです。

騎兵大尉　その合の子を種馬にかけると、その後の小馬もやはり縞があるといふのもほんたうですか。

醫師　さう、それもそのとほりです。

騎兵大尉　するとある場合には、普通の種馬は縞のある小馬の父親でもあり、まるで違つたものゝ父親でもあり得るわけですね。

醫師　さやう。まあ、そんなものですね。

騎兵大尉　するとかういふことになりますね、子供が父親に似てゐるといふことは何の證據にもならないといふことにね。

醫師　やあ……。

騎兵大尉　かういふことにもなりますね、父親であるといふことは證明され得ないものだといふことにね。

醫師　まあ。どうもそれは。

騎兵大尉　あなたはやもめでおいでだとすると、お子さんがあつたわけですね。

醫師　えゝね……。

騎兵大尉　あなたは時折自分ながら、父親であることが滑稽に感じられたことはありませんか。わたしは子供をつれて往來を散歩してゐる父親を見るほど滑稽なことはありません。どうも父親が、自分の子供がなぞといつて話してゐるのを聞いてはゐられない。「妻の子供が」といふべきです。あなたは御自身の位置に欺きを感じられたことはありませんか。疑惑のために不安に陷られたことはありませんか。わたしはあへて嫌疑とはいひますまい。どうも紳士としてわたしも、あなたの奥さんが一切の嫌疑以上に立つてゐられたことと思ひたいのですからね。

醫師　いゝや疑惑のために不安を感じたといふことはありません。しかし大尉、わが子は眞實と信仰を以て受取るべきものであると、ギョーテもいつてゐたやうに思ひます。

騎兵大尉　眞實と信仰をもつてですつて、問題が女に關係してゐる場合にでもですか、それは危險ですね。

醫師　まあそんなことをいつても、隨分いろ〳〵細君にも種類がありますから。

騎兵大尉　しかし最近の研究はたゞ一種しかないことを證據立てました――わたしが若い時分には強健でそして――自慢してもいゝのですが――きれいでもありましたよ、わたしはいまでも二つの瞬間の印象だけを覺えてゐますが、それが後に苦勞の種になつたのです。その一度は汽船に乘つてゐた時でした。われ〳〵といつても、わたしと二三人の友人ですが、前の方の客室にゐたのです、わたしの向側に若い料理屋の上さんがやつて來ました。その上さんは泣きながら座をしめると、それから許婚の男に別れた話をしたのです、男は難船して亡くなつたのですね。わたしたちは女に同情して、わたしはシャンパンをすゝめなぞしました。二杯めのコップを呑みほしたあとで、わたしは女の足にさはりました。四杯めのあとでは膝にさはりました。そして夜のあける前に、わたしは女を十分慰めてやつたのです。

醫師　まあそんなのはほんの冬の蠅といふものでせう。

騎兵大尉　ところがこんどは二度めで、それは夏の蠅でしたよ。わたしは西海岸の溫泉場にゐました。そこに子供をつれた、若い細君がゐましたが、亭主は都へ出てゐたのです。その女は宗教的なところがあつて非常に嚴格な信條を奉じてゐてわたしに道德を說き聞かせたり飽くまで立派な人のやうに思はれたのです。わたしは女に一冊二冊と本を貸しました。さて立つて行く時に隨分珍

しいことですが、女は本を返してよこしました。それから三月あと、わたしはその本の中に一枚の名刺が挿んであつて、隨分露骨な告白の書いてあるのを見つけました。いや無邪氣なものですよ、到つて無邪氣なものですよ。夫のある女の方から、一向歡心を求めた覺えもないよその男に對して戀の告白をなし得る位ですからね。そこで教訓が得られたのです、餘り信用しすぎるなとね。

醫師　餘りしなさすぎるなともね。

騎兵大尉　さうです、しすぎてもいけない、しなさすぎてもいけない。しかしどうですか、先生、この女はじつに無意識ながら圖々しいところがあつて、自分からわたしに夢中になつてゐることを夫に話した位でした。その女が自分で本能的な惡性を意識しないといふことが實に危險なのです。それは恐らく酌量すべき情狀とはならうが、それがために判決を取り消すことは出來ますまい。

醫師　大尉、あなたのお考は、病的な方向に向つてゐますね。御注意なさらなくてはいけますまいよ。

騎兵大尉　病的なぞといふ言葉を使ふのはよくありません。さうでせう、どんな蒸汽機關でも氣壓計が百を指せば破裂します、しかし百といふ數はどの機關にも同じには働かないのです。おわかりですか。――さてそれはさうとして、あなたはわたしを監視するためにここに來てゐられる。わたしが男でなかつたならここでわたしは訴へるか　または狡猾ないひ方をすれば泣きつくかする權利があるわけです、そして恐らくあなたに全體の兆候を申し上げるところでしたらう。さらに一そう進んで病氣の由來までも申し上げるところでしたらう。しかし不幸にもわたしは一個の男子であつて、ローマ人のやうにただ胸の上に腕を組んで死ぬまで息をころしてゐなければならないのです。お休みなさい。

醫師　あなたが御病氣ならば一切をわたしにお話し下すつてもあなたの男子たる名譽を傷つけることはありません。わたしとしては片方の言ひ分も伺つておかなければなりません。

騎兵大尉　どうもあなたは一方のいひ分だけを聞いて滿足してゐられるやうな氣がしますね。

醫師　いゝや、そんなことはありません。どうしてわたしは、アルヴィング夫人（イブセン作「幽靈」の女主人公）が亡くなつた夫の蔭言を聞いて、ひそかに思つたことですが、男の方が死んでゐるのは殘念なことでしたよ。

騎兵大尉　その男の方が生きてゐたら、話をしたらうと思はれるのですか。死んだ夫の一人が甦つて來て話したら、信じられようと思ひますか。先生、まあお休み下さい。このとほり落ち着いてゐますから。安心して、行つてお休み下さい。

醫師　では大尉、お休みなさい。わたしもこの事件にこの上にかゝりあつてはゐられません。

騎兵大尉　われ〳〵は仇同志ですか。

醫師　とんでもないことです。たゞ、お互が友達になれさうもないことは殘念です。さやうなら。

〔出て行く〕

騎兵大尉　〔醫師を後景の扉口まで送つて行く。それから左手の扉口へ行き、少〜開ける〕おはいり、話がある。お前がそこで立聞きしてゐることはわかつてゐたのだ。

第五景

ラウラ、あわてた風ではいつて來る。騎兵大尉、鞭筒の彈れ戸の前に腰を掛ける。

騎兵大尉　今夜はもうおそいが、話し合はなければならないことがあるのだ、お掛け。

間。

騎兵大尉　わたしはけふ夕方郵便局へ行つて手紙を受け取つて來た。それでお前がこれまで出す手紙も來る手紙も横取してゐたといふことがわかつた。その結果として、差當りわたしは時間の空費によつて、自分の研究の豫期した成績がめちや〳〵になつたといふわけだ。

ラウラ　わたしの思立は善かつたのですよ。なぜと言つて、あなたはほかの研究なぞのために、大事なお務をおろそかになさるやうでしたもの。

騎兵大尉　どうもお前の思立は善いやうで善くない。なぜと言つて、お前はいつかわたしが自分の勤務以外のさういふ違つた研究によつて、名譽を得るに違ひないといふ確信を持つてゐたのだから

な。だがお前は何よりも、わたしがとにかく名譽を得るといふことを好まなかつたのだ。さういふことはお前の取るに足らない愚劣さをつく〳〵思はせたと言ふだけだ。——それからわたしはお前に宛てた手紙を手に入れて來た。

ラウラ　まあ、それはおりつぱなされ方ですこと。

騎兵大尉　これ見ろ、お前はわたしをいはゞ「一枚上」に考へてゐたのだ。——この手紙でお前が久しい間一切の友達を殘らずわたしから引き上げてゐたことがわかつた、わたしの精神狀態に關して好い加減な風說を流布してね。で、お前の努力は立派に成功した。なぜと言つて今ではもう上は司令官から下は料理番の女に至るまで、誰もわたしを賢い人間だと思ふ者は一人もないのだからな。さてわたしの病氣はまあこんなところだ、理性は傷んではゐない、これは御承知の通りだ。自分の勤務をも、父親としての義務をも果すことが出來る。意志がまあちやんとしてゐる間は、感情を抑制することも出來る。しかしお前はそれにあとから〳〵爪を立てるので、ボタンがぬけて時計のゼンマイはぢり〳〵もどつてしまふのだ。わたしはお前の感情に訴へようとは思はない、お前には感情なんといふものはないし、それがお前の強みでもあるからな、で、わたしは却つてお前の利害に訴へるのだ。

ラウラ　いつて下さい。

騎兵大尉　お前の擧動によつてわたしの不審を起させるといふことは成功であつた。早速わたしの判斷力は疊つて來るし、わたしの思考力は迷路にはいることになる。これこそお前の待ちに待つて、もう今にも破裂するばかりになつてゐる精神錯亂の初めなのだ。ところでお前に質問を向けたい、一體お前はわたしが健全でゐるのと健全でなくなるとどちらによけい利益があると思ふ。わたしがつぶされてしまへば、無論わたしは職を離れるし、さうなればお前達も途方に暮れよう。わたしが死ねば、わたしの生命保險金はお前達の手に落ちる。しかしわたしが自殺すれば、お前達はなんにも得られない。だからやはりわたしが定命だけ生きることがお前の利益なのだ。

ラウラ　それがわたしになるのですね。

騎兵大尉　うん、さうだとも。それをよけて通るか、その中へ首をつツ込むか、お前次第といふわけだ。

ラウラ　あなたは自殺するとおつしやるのね。そんなことをあなたがするものですか。

騎兵大尉　きつとさうだと言ひ切れるか。全體男子たるものが何のために生きて行くあても、誰のために生きて行くあてもなくて生きて行かれると思ふか。

ラウラ　ぢやあなた降參なさる。

騎兵大尉　いや、わたしは和議を申し込むのだ。

ラウラ　その條件は。

騎兵大尉　わたしの理性を維持させて貰ふといふことだ。わたしを嫌疑から救つてくれさへすれば、わたしは戰鬪を中止する。

ラウラ　それはどんな嫌疑。

騎兵大尉　ベルタの出生に關してさ。

ラウラ　ぢやあなたはその點に嫌疑をかけてゐるのね。

騎兵大尉　さうだ、嫌疑をかけてゐる。それもお前が引き起したのだ。

ラウラ　わたしが。

騎兵大尉　うん、お前がそれを菲沃斯草の汁のやうにわたしの耳に注ぎ込んだのだ。そして周圍がそれを成長させたのだ。わたしをこの不安から救つてくれ。眞正直にやはりその通りだと言つてくれ。さうすればわたしはお前を豫め許してやる。

ラウラ　でもわたし自分に覺えもない罪を引き受けるにはあたりません。

騎兵大尉　だつてわたしがさういふことをいひふらす氣づかひのないことはわかつてゐるのだからなんでもないぢやないか。全體男がよそへ出て自分の恥を吹聽して廻ると思ふかい。

ラウラ　わたしがそんなことはありませんといへば、あなたは決して安心しないでせう。でもその

通りですとわたしがいへば、あなたは信用するのです。するとあなたは却つてさうあつてくれればいゝと望んでゐるのでせう。

騎兵大尉　成程、妙だが、しかしこれは多分第一の場合は證明されにくいために、第二の後の場合だけが目立つといふわけなのだ。

ラウラ　一體さういふあなたの嫌疑に根據があるのですか。

騎兵大尉　あるやうでもあり、ないやうでもある。

ラウラ　どうもあなたはわたしを罪のある者に思ひたいのでせう。さうしておいてわたしを免職して、その後で一人で子供を思ふ儘にしようといふのでせう。でもわたしそんなわなにはかゝりませんよ。

騎兵大尉　お前の罪を犯した確證を握つた場合、わたしが他人の子供を引き取るだらうと思ふかい。

ラウラ　いゝえ、わたしはその反對な事を考へてゐます。ですから豫めわたしを許してやらうなどといふことを伺つても、嘘をつくのだと思ひました。

騎兵大尉　〔立ち上がる〕ラウラ、わたしを救つてくれ、わたしを救つてくれ。どうもお前はわたしの言ふことがわからないのだ。子供がわたしのでないとすれば、無論わたしはそれに對して何の權利も持たないし、持ち得もしない。しかもそればかりをお前は望んでゐるのだ。さうぢ

やないか。いや、むしろそれ以上を望んでゐるのか。お前は子供に對して權力は持つてゐたい。しかしわたしを扶養者にしてはおきたいのだ。

ラウラ　權力ですと、無論この生きるか死ぬかの爭は、その權力といふ問題を別にしてどこに目的があるでせう。

騎兵大尉　未來の生活を信じないわたしとしては、子供はこの世の生活の次に營む生活であつた。子供は永遠の思想であつた、現實と一致する唯一の思想であつたかも知れない。それをお前に奪はれては、わたしの生活は眞二つに斷ち割られることになるのだ。

ラウラ　なぜわたし達はいゝかげんな時に別れなかつたのでせうね。

騎兵大尉　それは子供が二人をつないでゐたからだ。しかしその綱は鎖になつた。どうしてさうなつたか。どうしてだらう。わたしはついぞそれを考へて見たことはなかつたが、しかし今になつて追憶が、訴へるやうに、恐らくは判決を下すやうによみがへつて來る。わたしたちは結婚して二年になつても、子供がなかつた。なぜなかつたか、それはお前が一番よく知つてゐる。わたしは病附いて、床についたまゝ死を待つてゐた。ふと熱の高い瞬間に表の客間に聲が聞えた。それはお前と辯護士の聲だつた。その時お前はわたしのその時まだ持つてゐた財産の話をしてゐた。辯護士はわたし達に一人も子供がないから、奥さん、あなたは何一つ相續することが出來ないと言

ひ聞かしてゐた。で、お前が子供を持ちかけてゐるかとたづねた。お前が何と答へたかわたしは聞かなかつた。わたしは恢復した。そしてお前は子供を產んだ。誰がその父親なのだ。

ラウラ　あなたさ。

騎兵大尉　いや、わたしぢやない。そこに一つ犯罪が埋まつてゐるのだ。それがからほら世間に傳はるやうになりかけた。しかも何といふ恐しい犯罪だらう。黑ん坊の奴隷を放つのは、お前達の人情でも十分だつたらう。だが白人の奴隷は手放さない。わたしはまるで奴隷のやうにお前の子供のために、お前のおかあさんやお前の召使のために働いた。わたしはそのために自分の職務や昇進を犧牲にして來た。わたしは拷問や苛責や不眠や、お前達の生存のための不安に惱まされて來た。お蔭で髮の毛が灰色になつた。すべてお前が苦勞なしに暮して行けて、年を取ればもう一度子供によつて若返ることが出來るやうにと思つてしたことだ。一切をわたしは蟲を殺して忍んで來た。それといふのも、わたしはあの子の父親だと信じてゐたからだ。これでは最も簡單な形式のどろばうだ、最も殘酷な奴隷虐待だ。わたしは十七年間の强制勞働をやつて來た。然も罪には染まらずに來た。そのかはりにお前は何をわたしにくれるのか。

ラウラ　いよ〳〵あなたは發狂したのね。

騎兵大尉　〔腰を掛けろ〕それがお前の希望なんだな。わたしはお前が自分の罪をかくすためにどんなに働いたか見て來てゐる。わたしはお前に同情を持つてゐた、お前の苦痛の理由がわからなかつたからな。病的な考は追ひ出さなければならないと思つたから、わたしは隨分一生懸命にお前の良心の苛責の薄らぐやうに度々いたはつてもやつた。そこでわたしは思ひ出すことがある——わたしは別段聞く積りもなく、お前の寢言に言ふのを聞いた。一昨晩——それはベルタの誕生日なのだ、明け方二時と三時とのあひだであつた、わたしは腰を掛けて本を讀んでゐた。お前はまるで誰かにしめ殺されでもするやうに、來てはいけない、來てはいけないと叫ぶのだ。わたしは壁を叩いた——もうあとは聞きたくもなかつた。わたしは久しい間一つの疑ひを抱いてゐたが、それをはつきりたづねる勇氣がなかつた——これだけのことをわたしはお前のために苦しんで來た。それなのにお前はわたしに向つて何をしようとしてゐるのだ。

ラウラ　わたしに何が出來るでせう。わたしは神樣と、わたしに神聖なすべてのものにかけて、あなたがベルタの父だといふことを誓ひませう。

騎兵大尉　それが今更何だ、母親といふ者は、自分の子供のためにはどんな罪を犯しても構はないし、又犯すに違ひないとお前は言つたではないか。過去の思出のためにわたしは賴む、深手を負つた者が止めの一太刀を願ふやうに、わたしは賴む、どうかのこらず言つてくれ。お前にはわたしが子供のやうにたよりなしでゐることがわからないか。わたしが母親に訴へるやうに訴へてゐ

るのが聞えないか。お前はわたしが男だといふことを、わたしがたゞ一言で人間や動物を御しうる軍人だといふことを忘れてはくれないか。わたしは病人のやうにたゞ同情を求めてやまないのだ。わたしは自分の權力の徽章を外して、自分の生命のために慈悲を哀願する。

ラウラ　〔大尉に近づき、そしてその手を彼の額に置く〕何ですね。あなたは泣いていらつしやるの、男の癖に。

騎兵大尉　「さうだ、わたしは男のくせに泣いてゐる。だが男には目がないのか。男には手が、足が、感覺が、感情が、情熱がないのか。男も女と同じ食物を食つて生きてゐるのではないか、同じ武器に依つて傷けられるのではないか、同じ夏と冬に依つて、寒くなり暑くもなるのではないのか。お前達が刺しても、わたし達は血が出ないのか。お前達が擽つても、わたし達は笑はないのか。なぜ男が心の中を訴へてはならないのだ。なぜ軍人が泣いてはいけないのだ。男らしくないからだといふのかな。なぜそれが男らしくないのだ。

ラウラ　まあいくらでもわたしの坊やはお泣きなさい。おかあさんが傍についてゐてあげますからね。あなたはわたしがあなたの生活の中に、言はゞ第二のおかあさんとしてはいつて來たことをおぼえてゐますか。あなたのあの大きな、嚴疊な體には、いつも神經が缺けてゐたのですよ、そしてあなたはこの世へ餘り早く出て來過ぎたか、それとも多分望んでもゐなかつた——巨童といふやうなものでしたらう。

騎兵大尉　さうだ、それはそのとほりだつたのだ。父親と母親はわたしを持つ意志がなかつたのだ。そこでわたしは產む意志なしに產まされて來たのだ。だからわたしはお前と一緒になつて、何かそこへつけ加へて貰つたやうに思つた。だからお前は支配することを許されたのだ。兵營で中隊の前では命令者であつたわたしが、お前の前では服從者であつた。わたしはお前にしつかりからみついて成長した。お前を一段高い天分を持つてゐる人のやうに仰いで見た。わたしはお前の頑是ない子供であるやうに服從して來た。

ラウラ　さうです、あの時分はさうでした。だからわたしはあなたを子供のやうに可哀がつたのです、ところがそら、あなたもよく御存じでせう、あなたの感情の性質が變つて來て、あなたがわたしの戀人として現れて來た時、わたしははづかしくなつたのです。あなたの抱擁はわたしの歡びではありましたが、すぐそのあとに血がはづかしく感じでもしたやうに、良心の苛責が起つたのです。母が戀人になつたのですものね、ふん。

騎兵大尉　わたしもそれは知つてゐた、だがわからなかつた。それでお前の輕蔑から自分の男らしくなかつたことを讀みとつたと思つた時に、却つて自分が男であるといふことによつて、女としてのお前を手に入れたいと思つたのだ。

ラウラ　えゝ、でもそこに思ひ違ひがあつたのですよ。ねえ、母親はあなたのお友達でしたらう、でも妻は敵だつたのですよ。兩性の間の愛は戰なのですよ。で、わたしは負けたとは思ひません。どうして負けるどころか、わたしはほしいと思ふものを手に入れたのです、しかしあなたは優勢でした。それをわたしは感じました、またそれをあなたに感じさせたかつたのです。

騎兵大尉　お前こそいつでも優勢だつた、お前はわたしを目がさめたまゝ眠らせることが出來た、だからわたしは見ることも聞くことも出來ない、たゞ從つてゐただけだ。お前はわたしに生のじやが薯をくれて、それは桃ですよといひ伏せることも出來たのだ。お前は自分のちよつとした思ひつきを天來の奇思妙想のやうに、むりやり感服させることも出來たのだ、お前はわたしを犯罪行爲へ、いやそれはこの上なく卑しい行爲へ導くことも出來たかも知れない。それもお前に理性といふものが缺けてゐて、わたしの忠告の執行者にならうとはしずに、何でも自己流の頭でやつてのけたからだ、しかしわたしも反省の目をあいて、自分の名譽の害はれてゐるのを見た時に、わたしはそれを何か大きな事業か行動か、發見か、または名譽ある自殺のやうなことで回復したいと思つた。わたしは戰爭に行かうと思つたが行けなかつた。そこでわたしは科學に一心を打ち込んだ。ところでわたしが手を伸して收穫を受け取らうとすると、その腕をお前は絶ちきつてしまふ。今やわたしは名譽を失つた人間であつて、この先き生きては行かれない、男子たるものは

名譽なしに生きて行けるものではないのだからね。

ラウラ　でも女は。

騎兵大尉　それは行けるとも。だつて女には子供があるだらう。しかし男には、それがないのだ。——だがわれ〳〵もほかの人間も、子供のやうにわけがわからずに、妄想や理想や幻想を一ぱい抱へてずる〳〵に生活を引きずつて來たが、その中目がさめて來たのだ。何、そのまゝでゐればよかつたのだが、目がさめて見ると、枕上に足をつき出してゐた。しかもわたしたちを起してくれた當人は夢遊病者だつた。女は年をとつて女であることをやめた時、何が生えるか知りたい位だ。時を作るものはもう男は一體年をとつて男であることをやめた時、その顎には髯が生える。雄鷄ではなくなつて去勢鷄になつた。しかもその誘ひなきに若い牝鷄が答へたのだ。そこでわたしたちはもう太陽が上らうとする時分に月の光を一ぱい浴びながら、大昔の時代にでもゐるやうな廢墟に坐つてゐる自分を見た。それはほんの明方のうたゝ寢に見た恐しい夢にすぎなかつた。一向目がさめたのでも何でもなかつた。

ラウラ　あなたは詩人におなりになるとよかつたのだわねえ。

騎兵大尉　何が。

ラウラ　わたしもう眠くなりました、まだもつと空想がおありなら、あしたのにとつておいて下さ

いな。

騎兵大尉　一言まだ實際問題で聞きたいことがある。お前、わたしを憎むか。

ラウラ　えゝ時々はね。あなたが男である場合には。

騎兵大尉　それは種族憎惡のやうなものだ。わたしたちの先祖が猿から出てゐることが事實なら、それに少くとも二つの種類はあつた筈だらう。男と女とではお互種類が違ふのだね。

ラウラ　それがつまりどうだといふのです。

騎兵大尉　どうもこの戰では、お互の中どちらかが滅びなければならないやうな氣がする。

ラウラ　どちらが。

騎兵大尉　もちろん弱い方がさ。

ラウラ　強い方が正しいのですか。

騎兵大尉　それは權力を持つものはいつも正しい。

ラウラ　それではわたしは正しいのです。

騎兵大尉　それではお前は既に權力をもつてゐるといふのか。

ラウラ　さうです。しかも法律上のね。これであしたあなたを禁治産者にしてしまへば。

騎兵大尉　禁治産者に。

ラウラ　さうです。それからわたしはあなたの熱にうかされたうはごとなぞには構はずに、子供を自分で教育します。

騎兵大尉　で、わたしといふものがゐなくなつたら、一體誰が教育費を拂ふのだ。

ラウラ　あなたの恩給さ。

騎兵大尉　〔おどすやうに詰めよる〕どうしてお前は、わたしを禁治産者にすることが出來るのだ。

ラウラ　〔一通の手紙を取出す〕この手紙を證據にね、これは公證役場の謄本にあるのですよ。

騎兵大尉　どんな手紙だ。

ラウラ　〔左手の扉口へあとすざりして行く〕あなたの手紙です。あなたが發狂してゐるといふことをあなた自身醫者に告白した手紙です。

騎兵大尉　〔だまつて手紙をながめる〕

ラウラ　これであなたはもう、不幸にもなくてならない父親としての且扶養者としての本分をお果たしになつたのです。あなたはもう必要でなくなつたのだから去らなくてはならないのです。既にあなたはわたしの理性がわたしの意志と同樣强いことを見たのですから、それでもやはりぐづぐづしてそれを認めようとしないのだから、あなたは去らなくてはならないのです。

騎兵大尉　〔卓の方へ行く。灯のともつたランプをつかんでラウラに向つて投げつける、ラウラはあとじさり

しながら扉口からひつこんで行く。

第三幕

前幕と同じ飾附。たゞしランプは別。タペストリー張りの扉は椅子でおさへてある。

第一景

ラウラ。乳母。

ラウラ お前、鍵を貰つたかい。

乳母 貰つた、いゝえ、とんだことで。でもわたし旦那さまのお召物からとつて參りました、ちやうどネイドがブラシをかけるので外へ持ち出しましたものですから。

ラウラ ぢやあネイドがけふは番なのだね。

乳母 へい、ネイドなのでございます。

ラウラ わたしに鍵をおよこし。

乳母 へえ、でもほんたうにあれは立派にどろばうでございますね。まああちらのあの足音をお聞きなさいまし、奥さま。あつちへ行つたりこつちへ來たり、あつちへ行つたりこつちへ來たり。

ラウラ 戸はしつかりしめてあるだらうね。

乳母 へい〳〵、それはよくしめましたとも。

ラウラ　〔鞭笥をあけて、その彈れ戸の前に腰をかける〕ねえマルグレットや、しつかり氣をもつておくれよ。何でもお互にのがれようと思つたら、ぜひ落ち着いて貰はなくてはならないところだよ。

　扉を叩く音。

ラウラ　誰だえ。

乳母　〔表廊下の扉をあける〕ネイドでございます。

ラウラ　中へお入れ。

ネイド　〔入つて來る〕大佐殿から急報でございます。

ラウラ　お見せ。〔讀む〕よろしい。――ネイド、お前獵銃やかくしの中に入つてゐた藥莢はみんな出しておくれだらうね。

ネイド　はい、奥さま。

ラウラ　ぢやああちらで待つてゐておくれ。大佐のお手紙に返事を書いて上げるからね。

ネイド　〔出て行く〕

ラウラ　〔手紙を書く〕

乳母　あれ、奥さま。あちらでいましがた何かお始めになつたのではありませんか。

ラウラ　靜かにおし、人が書いてゐるのに。

　鐘の音が聞える。

乳母　〔小聲でひとり言〕あゝ神さまお惠みでみなのものが助かりますやうに。末はどうなることか。

ラウラ　さあ。これをネイドにわたしておくれ、それからおかあさんには一切知らせないやうにするのだよ、分かつたかい。

乳母　〔扉口へ出て行く〕

ラウラ　〔鞭笥の引出をあけて書類を出す〕

第二景

ラウラ。牧師。〔椅子を持つて鞭笥の前にラウラと並んでかける〕

牧師　やあ今晩は。お聞きだらうがわたしはまる一日外に出てゐてね。いまし方歸つて來たばかりさ。どうもこの家には厄介なことが始まつたものだな。

ラウラ　えゝ、にいさま、こんな晩にもこんな日にもわたし生れてはじめて出會ひましたわ。

牧師　しかしとにかく、お前には別段怪我はなかつたやうだね。

ラウラ　えゝまあお蔭さまで。でも一體どんなことがはじまつたと思ひます。

牧師　どうしてそんなことになつたのか、そのはじめだけ話してごらん。わたしももう隨分いろいろな取沙汰は聞いて來たが。

ラウラ　それはあの人がおれはベルタの父親ではないなんといふとんでもない想像にはじまつて、とう〳〵あの人がわたしの回を目がけて火の灯つたランプを投げつけたのがおしまひなのです。

牧師　どうも驚いたことだね。それではもう立派な氣違ぢやないか、で、いまはどういふことになつてゐるのだね。

ラウラ　何しろこの上變つた亂暴を働かないやうにおさへて置かなければならないでせう。で先生は狹窄衣を病院へ取りにおやりになつたのです。その間にわたしは大佐へ使を出して、この家の事務上のことを萬事指圖して貰ふやうにさういつてやつたところです、何しろあの人が、それはむちやなやり方でほつたらかしてあつたあとですから。

牧師　困つた話になつたものさね。だがいづれこんなことになるだらうとは始終思つてゐたのさ、火と水とでは、――いづれしまひは破裂するにきまつてゐるからな。一體その引出にあの人は何を入れておいたのだ。

ラウラ　〔鞄筒から引出を一つぬいて來て〕ほら、この通り、何でもかんでもしまひこんであるのですよ。

牧師　〔引出の中をかきまはす〕やあこれは。お前の人形までしまつてあるぞ。それからお前の洗禮帽までしまつてある。それからベルタのがら〳〵にお前の手紙に、メタル……〔目を拭ふ〕あの人はしかし隨分お前を愛してゐたに違ひないぞ、ラウラ。わたしならとてもこんなものまで取つておきはしない。

ラウラ　それは先には隨分愛してくれたと思ひます、でも長い間に、長い間に、隨分いろ〳〵變つたのですよ。

牧師　これはまた何といふ大きな紙だらう――墓地の證書だね。――うん、氣違病院よりは墓場の方がましだらうて。ラウラ。おいどうだ、お前には全く罪がないのか。

ラウラ　わたしが。だつて人間一人氣違になるについて、わたしに何の罪があるでせう。

牧師　うん〳〵。わたしは何もいふまいよ。血はとにかく水よりも濃いのだからな。

ラウラ　にいさんはどういふお考をしておいでなの。

牧師　〔じつと妹を見る〕まあお聞きよ。

ラウラ　何です。

牧師　まあお聞き。とにかくお前が自分の子供を自分の手で教育することになれたのは、お前の註文にそつくり欲つたには違ひなからう。

ラウラ　何だかわかりません。

牧師　どの位わたしはお前に敬服してゐると思ふ。

ラウラ　わたしに。ふん。

牧師　そしてわたしはこの無神家の後見人になるのだよ。まあお前の前だが、わたしは始終あの男はこちらの畑の雑草だと思つてゐたのだよ。

ラウラ　〔短い、息のつまつたやうな笑ひ方をする。とすぐ真顔になつて〕しかもそれをあなたはその人の妻たるわたしにづか〳〵いふのですね。

牧師　ラウラ、お前はどこまで強い女だらう。嘘のやうに強いぞ。それはまるで良にかゝつた狐のやうに、つかまへられる位ならいつそ自分で自分の足を嚙みきつてくれるといふたまだ――大どろぼうのやうなものだ。共犯者もなければ、つい自分の良心も持ち合せないといふところだ――鏡をのぞいてごらん。さすがに見られまい。

ラウラ　わたしはついぞ鏡なぞといふものは使つたことはありません。

牧師　いや、それをよう爲ないのだ――手を見せて貰つてもいゝ。――裏切者の血の跡もない、陰険な毒心の跡もない。ほんの小さな、罪のない人殺しで、法律もどうしようもないといふやつだ。無意識の犯罪さ、無意識かな。とんだ結構な發明だよ。

ラウラ　あなた、隨分よくしやべるのね、まるで御自分が惡い良心に取りつかれてゐるやうですわ――わたしをお訴へなさいよ。出來るものならね。

牧師　夫だつたらな、お前を絞首臺にのせてうれしくないこともなからう。きやうだいとして、牧師としては――これは御免蒙らうよ。――お聞き、あのとほりあの人はちやんと鋸の使ひ方を心得てゐる。いへば何とでもいへよう……ラウラ、まあ氣をおつけなさい、あの人が抜け出した場合には……。

ラウラ　〔不安らしく立ち上がりながら〕といふのは。

牧師　あの人はお前を二枚の板の間に挾んで、鋸でひきかねないよ。

ラウラ　〔　の方へ行きながら〕たまを抜くのだよ、みんな抜いてしまふのだよ、――ネイドや――構はないで……いけない。いけない。あゝ。やつと先生がいらしつた。

第三景

前景の人々。醫師。

ラウラ　〔醫師を出迎へながら〕いらつしやいまし、先生――これであなたも納得がおいきになつたでせう。

醫師　それは暴行が行はれたといふことはよく納得いたしました。しかしここに問題は、果たして暴行が憤怒の激發か、發狂の發作か、いづれの解釋になるかといふことです。

牧師　しかし發作そのものについてはべつとして、彼が固定觀念を持つてゐたといふことはお認めになるのですね。

醫師　牧師さん、どうもあなたも固定觀念に捉はれておいでのやうですが。

牧師　それは最高の存在に對してのわたしとしての確定意見は……。

醫師　まあその意見は措いときませう。――奥さん――そこであなたが御主人を牢屋へ入れるか氣違病院へ入れるか、それはあなた次第できまることですぞ。一體大尉の所業に對してあなたはどうお考へですか。

ラウラ　たゞいまのところ、それは何ともお答へいたしかねます。

醫師　ではあなたは、一家の利益のためにどうするのが一番都合がいゝかといふ、たしかな意見はお持ちにならないのですね、牧師さん、あなたはいかゞですか。

牧師　さあどちらの場合にしましても、いづれ一騒ぎでせうね……ですからさう手輕にはいへますまい。

ラウラ　でもあの人が暴行を働いた科で科料に處せられる位のことでしたら、何度でも暴行をすることが出來るわけですね。

醫師　しかし牢に行つたところで、また出て來ればわけなく復讐することは出來ます。すると親族會議で決定するのですね。

ラウラと牧師　〔小聲で相談する〕

間、

牧師　どうか神さまのお蔭で、どこまでも正義が通りますやうに。

ラウラ　ちよつと先生に伺ひます。あなたはまだあの――病人について、おつしやつては下さいませんでしたね。

醫師　遠慮なくわたしの意見をいはせていただきます、どうも御主人を病人ではあるが犯罪者とは見たくないのです。發狂であるかないかとにかく、御病人にその謀殺行爲を繰り返させないやうにするには、十分用心をしていただきたいのです。ばあやはどこへ行きました。

ラウラ　何かあの。

醫師　わたしが御病人とお話をしてゐる中に、命令を與へたら早速、狹窄衣をあの人に着せて貰ひたいのです。しかし早すぎると困ります。わたしはその――服はあちらに持つて來てあります。

〔廊下へ出て、大きな包みを持つて戻つて來る〕どうぞばあやをお呼び下さい。

ラウラ　〔呼鈴を鳴す〕

牧師　「恐しきことかな、生きたる神の手に落つるは。」

乳母　〔出て來る〕

醫師　〔狹窄衣を取り出す〕これです。〔皆々どよめく〕君、いゝかね。わたしが暴行の發作をおさへる

ために必要と見た時に、大尉の後からこの服をそつと持て來て貰ひたいのですよ、どらんのとほり途方もない長い袖がついてゐます。これは運動をさゝないやうにするためです。そして背中でボタンがかゝるやうになつてゐます。それからこのとほり皮の紐が二本びじようにつゞいてある、これをあとで、椅子の背中なりソファーへなりしつかりと具合よく結へつけるのです。君、やつてくれますか。

乳母　いゝえ先生、そんなことは出來ません、とても出來ません。

ラウラ　先生、なぜそれを御自分でおやりにならないのですか。

醫師　それは御病人がわたしを信任しておいでにならないからです。奥さん、あなたがこれには一番いゝのですが、しかしどうもあなたをも信用なさらないといけませんから。

ラウラ　〔防禦するやうな身振をする〕

醫師　あるひは牧師さん、あなたでしたら……。

牧師　どうもそれは願下げにいたしたい。

第四景

前景の人々。ネイド。

ラウラ　お前さつきの手紙はもう屆けてくれて。

ネイド　屆けました。

醫師　すると君がネイド君だね。君には事情が分かつてゐるし、大尉が精神病に罹られたことも知つてゐる。ここで一つ君も手傳つて、病人の番をして貰はなければならないよ。

ネイド　何か大尉殿のためにお役に立つことが出來ますなら、必らずいたします。それは大尉殿も御承知のことであります。

醫師　では君にこの服を着せてもらひたいのだ……。

乳母　いゝえ、この人なぞに手をふれて貰つてはなりません。ネイドさんなどにあの方をいぢらせることはなりません。それではいつそわたしが、どくやんはり、それは〳〵やんはりといたして見ませう。たゞネイドさんには外に立つてゐてもらつて、餘儀ない場合に手傳つてもらひませう。えゝ、それはぜひしてもらひませう。

タペストリー張りの扉が叩く音。

醫師　御主人だ。服はその肩掛にくるんで椅子の上にお置きなさい。そしてみなさん、しばらくあちらへ行つていらつしやい。わたしと牧師さんとで、あの人のお相手はしますから、何しろ戸がもう何分とはもちませんからね——さああちらへ。

乳母　〔左手へ出て行く〕やれ〳〵エス様、お助け下さいまし。

ラウラ　〔算筒をしめる。さて左手へ出て行く〕

ネイド　〔後景へ出て行く〕

第五景

タルストリー張りの扉にはげしく物のぶつかる音。それで錠はこはれ、椅子は床の上にころげる。大尉二抱への本を脇に抱へ鋸をシャツの袖でおさへて持つてゐる。髪は逆立つて、きよと〳〵した、氣違じみた樣子。

醫師と牧師。

騎兵大尉　〔本を卓の上に置く〕これだけ殘らずに出てゐる。どの本にも書いてある。このとほりわたしはどうもしてやしない。こゝにオヂッセーの第一歌百十五節にかうある。（テレマクスがアテーネにいふところだ）「わが母はげに、彼が」これはオヂセーのことをいつてゐるのだ。「我が父なるをいふ。我自らはそれを知ることなし。人は己自らにつきて、そも〳〵何人が己を生みしかを知るものあらざればなり。」しかもこの疑をテレマクスは女の中の有德の女たるペネローペにかけてゐるのだ。これはまあいゝさ。どうだ。ここには豫言者エゼキルの言葉がある。「愚なるものはいふ、見よこゝに我が父のあるをと。されど何物のまたより彼が生れ出でしかを誰か知り得ん。」とこれは實に明快だ。ここに何がある。メルスクェーコフのロシヤ文學史だ。「ロシヤ國最大の詩人

アレキサンデル・プーシキンは彼が決鬪に於て胸にうけたる彈丸に斃れしといふよりも、寧ろ彼の妻の不貞の噂によりて斃れしなり。臨終の床の上より彼は彼女の穢れなきことを誓ひたりき。」驢馬め。驢馬め。どうすればこの男はそんなことが誓へたものだらう。——こんどは自分の本を讀むからとにかくあなた聞いて下さい。——おやこれは〳〵ヨーナス君、君が來てゐたのか。それに先生、これは當前だが。君は聞いたことがありますか、あるイギリスの婦人がどうもアイルランド人は自分の細君の顏に向つて石油ランプを投げる癖があつて困るとこぼすから、わたしがその返事を何といつたか聞きましたか。——やれ〳〵何といふ細君連だと、わたしはいつたのです。——細君連とはと、その婦人がぶつ〳〵いつたので——さう勿論ですと、わたしは答へた、それは夫として、自分の細君を愛しもし崇拜もしきつてゐた夫として、火のついたランプをつかんでその細君の顏に投げつけるといふそこまでやるには、まあそれだけで大抵わかりさうなものだ……。

牧師　何が分かるのだね。

騎兵大尉　何もわからん。人間はけして何かが分かるといふことはない、信ずるだけさ、ねえさうだらう、ヨーナス君。信ぜよ、さらば救はれん。救はれんか……なあに分かつてゐるさ、人間は信仰によつて救はれなくなるばかりだ。その位分かつてゐる。

醫師　大尉。

騎兵大尉　まあ。靜かに。わたしはあなたと話をしたくはないのです。わたしはあなたに、あちらの奥でしやべつてゐることを電話で通じて貰ひたくはないのです。あちらの奥でね。お分かりでせうね。――時にヨーナス君。君は自分の子供の父親であるといふことを信ずるかい。わたしは覺えてゐるが、君の所に一人家庭教師がゐたね、きれいな目をしてゐて隨分世間の噂にのぼつた男であつた。

牧師　おいアドルフ君。氣をつけて貰はうよ。

騎兵大尉　假髪の下をさはつて見給へ、瘤が二つ出來てゐやしないかね。どうもきつとあの男は蒼くなるだらうよ。うん〳〵、世間はたゞしやべるだけさ、だがまあ實によくしやべるものだよ。しかしとにかくわれ〳〵はみな笑ふべき賤民だよ。われ〳〵女房持はね。さうでせう、先生。一體あなたの閨房はどんな風でした。あなたの家には中尉は置いてなかつたのですか。まあお待ちなさい、わたしがいゝことををしへて上げます。〔醫師の耳に何か囁く〕ほら、どらんなさい、あの男も蒼くなつた。まあ腹を立てるにはあたらない。女はもう死んでお墓に入つてゐるのだ。出來てしまつたものはいま更どう變へるわけにも行かない。わたしはとにかくその男を知つてゐたのだ。で、その男はいま――先生、わたしの顏を見て下さい。――いや、まともにわたしの目を見て下さい――龍騎兵の少佐ですよ。神に誓つてわたしは、あの男がやはり姦夫であると信じてゐる。

醫師　〔困つて〕大尉、何かほかのことを話しては頂けませんか。

騎兵大尉　ほらね。あの男はわたしが姦夫の話をすると、すぐ何かほかのことに話をしたがるのだ。

牧師　君知つてるかい、君は精神病なのだよ。

騎兵大尉　あゝよく知つてゐるよ。だが僕も君たちのその光榮あるお頭（つむり）を長い間自由に扱へるものだつたら、さつそくに君たちを押しこめてくれるだらうよ。僕は氣が違つてゐる、だがどうして僕はさうなつたのだ。それは君たちには何の關係のないことだ、いや誰にも關係のないことだ。君たちはいまほかの話をしたいといふのだね。〔草の上の寫眞帖を取上げる〕やれ〳〵これがわたしの子だ。わたしの子だ。といふがわれ〳〵はそれを實は知り得ないのではないか。それを知るにはどうすればいゝか知つてゐるか。最初まづ社會上の體面を作るために結婚をする、それからすぐと別れてしまふ。そしていゝ人同志になる。それから子供を養ふ。するとにかく子供がお互の養子であるといふことははつきりする。しかしこれは正しいことか。だがそんなことがいま更わたしに何の助けになる。全體わたしから永遠といふ考を奪ひ去つてしまつたあとで、いま更何がわたしの助けにならう。それをあてに生き得るものが何一つなくて科學も哲學も何の用ぞだ。わたしには名譽といふものがなくなつて見れば、生命も何の用ぞだ。わたしは自分の右の腕を、半分の腦髓を、半分の脊髓を、ほかの幹につぎ木した。それは二つが合はさつて一つのより立派な木に成

長するだらうと思つたからだ。そこへ誰か小刀を持つてやつて來て纖目のところで絶ちきつてしまつた。それで僕はたゞの半分の木になつたが、向ふの木はわたしの腕とわたしの半分の腦髓でずんずん成長して行く、その代りわたしの方はずん〳〵萎びて枯れて行く。それといふのがわたしが分けてやつた方は身分の一番いゝところだつたからだ。かうなればわたしは死にたい。まあ何でも君たちのいゝやうに僕をしてくれ給へ。僕はもうないものだ。

醫師牧師に囁く。二人は左手の居間へと出て行く。すぐそのあとへベルタがやつて來る。

第六景

騎兵大尉。ベルタ。あとから乳母。

騎兵大尉 〔べた〳〵になつて卓によつかゝつてゐる〕

ベルタ 〔彼の方へ行く〕パパ、御病氣なの。

騎兵大尉 〔むつとした顔で見上げる〕わたしが。

ベルタ あなた御自分のなすつたことを覺えてゐて。ランプをママに投げつけたことを覺えてゐて。

騎兵大尉 わたしが。

ベルタ えゝ、ぶつけたわ。ママが怪我でもしたらどうするおつもり。

騎兵大尉 さうすればどうなるといふのだ。

ベルタ そんなことをおつしやるなら、あたたはわたしのおとうさまではないわ。

騎兵大尉 何だと、わたしはお前のおとうさまではない。どうしてそれを知つてゐるのだ、誰がお前にそんなことをいつたのだ。すると一體誰がお前のおとうさまなのだ。誰だ。

ベルタ えゝ、とにかくあなたではないわ。

騎兵大尉 きまつてわたしぢやないといふ。誰だ。お前はうまくふツこまれて來たらしいな。誰がお前にふツこんだのだ。わたしは現在自分の子供がやつて來て、面と向つてあなたはわたしのおとうさまではないといふやうな目にあひとほさなければならないのだ。だがお前、そんなことをいふのが、却つてお前のおかあさまを侮辱することになるのを知らないか。それがそのとほりなら、それこそおかあさまに傷がつくのだといふことが、お前はわからないのだな。

ベルタ ママの悪口をけしていつてはいけないわ、よう。

騎兵大尉 いや、お前たちは一緒になつて、わたしに向つて來るのだな。それは始終お前たちの出す奥の手なのだ。

ベルタ パパ。

騎兵大尉 もうそんな言葉を使ふな。

ベルタ パパ、パパ。

騎兵大尉　〔娘をひきよせる〕ベルタや、可哀い、いゝ子や、お前はやはりわたしの子供だよ、さうだとも、さうだとも。ほかの何であるものか、さうにきまつてゐる。ほかの考をしたのは、あれはほんの風と一緒に來たり行つたりする病的な考だ、ペストや熱病と同じものだ。わたしをよくごらん、わたしは自分の魂をお前の目の中に見るのだからね。――お前は二つの魂を持つてゐる。一つの魂でわたしを愛して、もう一つでわたしを憎んでゐる。しかしお前はたゞわたしを愛するだけでいい。お前はたゞ一つだけの魂を持たなくてはならない。でないとけしてお前には平和は得られない。それはわたしも同じことだ。お前はたゞ一つわたしの考から生れた考だけを持たなくてはならない。そんなことわたしいやだわ。わたしは自分でわたしのもつ意志だけを持たなくてはならない。

ベルタ

騎兵大尉　それはならないぞ。お前いゝか、わたしは人喰人だ、お前をたべてやりたいのだ。お前のおかあさんはわたしをたべようと思つたが出來なかつたのだ。わたしは、子供をたべなければ自分が子供にたべられるといふ豫言をされたために子供をたべたサツルンの神だ。たべるかたべられるかだ。それが問題だ。わたしがお前をたべなければ、お前はわたしをたべる。お前はもう既にわたしに向つて牙を見せてゐる。だがこはがることはない、いゝ子や、わたしはお前にひどいことをするのではない。〔武具かけのところへ行つて、一挺のピストルを取る〕

ベルタ　〔にげ出さうとする〕助けてよ、ママ、助けてよ、殺される。

乳母　〔出て來る〕まあ旦那さま、何ですね。

騎兵大尉　〔ピストルを調べる〕貴樣たまをぬいてしまつたのか。

乳母　へえ、たまをぬいたのはわたしですが、まあここへおかけあそばして、お靜かにしていらつしやいまし、さうするとばあやがまた入れて上げますからね。〔騎兵大尉の腕をおさへて椅子の上にかけさせる、大尉は氣のぬけたやうにうつとり腰をかけたまゝである。そこで乳母は狹窄衣を取り出して椅子のうしろに立つ〕

ベルタ、こつそり左手の方にすりぬけて出る。

乳母　アドルフさま、まだ覺えていらつしやいますか、あなたがばあやの可哀い、いゝお子さんでおありだつた時分のことを。ばあやは毎晩あなたさまを小夜着にくるんでは、どうぞ神さま、このお子さまをお守り下さいましと願つたものでしたよ。それから覺えておいでになりますか、ばあやが毎夜のやうに起きてお乳を上げたことをね。覺えておいでになりますか、ばあやが蠟燭をつけては、あなたさまがいやな夢をごらんになつてお休みになれなくなつた時なぞは、面白いお伽ばなしをきつとして上げたのですよ。まだ覺えておいでになりますか。

騎兵大尉　マルグレットや、もつと話しておくれ。お前の聲は心持のよい眠のやうにわたしの頭を靜

めてくれる。もつと話しておくれ。

乳母　え、〳〵それは、でもあなたさまも聞いて下さらないではいけません。覺えておいでになりますか、あなたさまは一度大きな料理刀を持ち出して船を刻まうとなされたことがございました、それでわたしが入つて來てあなたさまをだまして、料理刀を取り上げたことがございました。あなたさまは物分かりの惡いお子でしてね、そのためせつかく親切にして上げてもそれをお信じにならないものだから、ついだまして取るやうな事になつたのですよ。まあ蛇ですね、ばあやに下さい、さうしないと嚙みつきますよと申しました。するとさつそくあなたさまは刀をはふり出しておしまひになつたでせう。〔騎兵大尉の手からピストルを取上げる〕それからあなたさまがどうしてもお召物を換へようとなさらない時には、ばあやはいろ〳〵と心配をして、さあおぼつちやま、おぼつちやま、金のおべゝを着せて上げますからね、王子さまのやうになつて行くのですよと申しました。それからばあやはほんの青い荒毛の小さいちやん〳〵を持つて來て、それをお胸にあてゝ、さあ早く兩方のお手を入れて見せうねと申しました。それからかう申します、さあおとなしくしていらつしやいよ、ばあやが背中のおボタンをかけてしまひますからね。〔大尉に狹窄衣を着せてしまふ〕そこでばあやが申します、さあ立つて部屋の中を歩いてごらんあそばせ、どんな具合に行つたか見て上げますからね……〔大尉をソファーへつれて行く〕さてばあやは申します、さあこれでお休みにな

らなくてはなりませんよとね。

騎兵大尉　何を貴樣いふのだ。着物を着たら寢てゐろといふのは。——畜生。貴樣何をしたのだ。〔着物をぬがうとする〕やいこの横着女郎め。まさか貴樣にこれほどの才覺があらうとは思はなかつた。〔ソファーの上に横になる〕つかまへられて、しばりつけられて、だまされて、それで死ぬことも得せないのだ。

乳母　アドルフさま、勘忍して下さいまし、どうぞ勘忍して下さいまし。でもお子さまを殺させまいと思つたものですから。

騎兵大尉　なぜ子供を殺させなかつたのだ。生は地獄だ、死は天國だ。子供は天國のものなのだぞ。

乳母　死のあとに何が來るか、御承知ですか。

騎兵大尉　うん、それこそたゞ一つ人間の知つてゐることだ。ところが生については一向に知らないのだ。あゝ、それをはじめから知つてゐたならなあ。

乳母　アドルフさま。どうぞあなたさまのその頑固なお心をへり下つて、神さまのお慈悲をお願ひ下さいまし、まだおそいことはございませんからね。それは十字架にかけられたどろぼうにすら、おそいといふことはなかつたのですよ。救ひ主さまが、けふ汝は我とともに樂園にあるべしとおつしやつたではありませんか。

騎兵大尉　貴様はもう死骸に向つて泣きたてるのだな、この古鴉め。

乳母　〔かくしから讃美歌集を出す〕

騎兵大尉　〔呼ぶ〕ネイド。ネイドはゐないか。

ネイド　〔出て來る〕

騎兵大尉　この女をつまみ出してしまへ。こいつは讃美歌集でわたしを死ぬほど苦しめるつもりだらう。こいつを窓からでも、煙突からでも、どこでもいゝところからはふり出してしまへ。

ネイド　〔乳母をながめる〕かしこまりましたが、どうもわたしには出來ません。全く出來ません。それは野郎なら六人束にかゝつて來てもよろしいが、女一人はどうも。

騎兵大尉　貴様、女一人を片づけられないのか。うん。

ネイド　それは片づけますが、女となるとどうもまた別でしてね。女に手は出せません。

騎兵大尉　どうも別だと。この女はわたしに手をかけたのではないか。

ネイド　へい、でもいけません。まあ牧師さまを撲れとおいひつけになるのとそつくり同じことです。何しろお宗旨のやうに體にしみこんでゐるのです。とてもいけません。

第七景

前景の人々。ラウラ。

ラウラ、ネイドに行けと目で知らせる。

騎兵大尉　オムファーレ。オムファーレ。（ギリシヤ神話に、リヂヤ女王、ヘルクレスを女裝させ女奴隷として、眼を離らせた）ヘルクレスがお前の着物を織つてゐるのに、お前は今更棒なぞをおもちやにしてゐるのだね。

ラウラ　〔ソファーの傍へよる〕あなた。わたしの顏をごらんなさい。わたしのことを敵だと思つてゐるの。

騎兵大尉　あゝさう思つてゐる。お前たちのこらずわたしの敵だと思つてゐる。わたしの母は、わたしを生むには苦しまなければならないといふので、わたしを生みたがらなかつたわたしの母は、同時にわたしから最初の生命の種子から養分を奪ひとつて、半分片羽にしてくれたわたしの敵だつた。わたしの姉はわたしに教へて自分に從はせようとしたのだから、やはりわたしの敵だつた。わたしが抱いてやつた最初の女はわたしが與へてやつた愛の返禮に十年の病氣をくれたのだからやはりわたしの敵だつた。わたしの娘はわたしとお前の中に立つてどちらを選ぶかといふ時に、やはりわたしの敵になつてしまつた。さてお前は、わたしの妻たるお前こそは、不倶戴天の仇敵なのだ。だからわたしが息がたえてぶつたほれるまでは、飽くまでわたしを御へて放さうとはしないのだ。

ラウラ　あなたがわたしにかづけておつしやるやうなことは考へたこともなければしようと思つた覺えもありません。それは無論あなたを何かしら邪魔なものにして、どこかへやつてしまひたいと

いふやうなぼんやりした心持が起つたことはあるかも知れません――でもそんな風にわたしのやり方にあるもくろみが見えるといふのですと、あるひは自分では分からないながら、いまいつた心持が表に現れたのかも知れません。わたしはけして出來てしまつた事を振り返つて考へたことはありません、まああなたが御自分でおしきになつたレールの上をどこまでも辷つて行つたといふところです。ですからよしんばわたしがさうでないにしても、やはり神さまの前にも自分の良心の前にも飽くまで疚しいとは思ひません。あなたのおいでになるといふことは、わたしにとつては心を壓す重石のやうなものでした、それは重く〳〵胸を壓して來るので、重みにたへなくなつて振り落さうとするまでになつたのです。ですからどこまでも惡氣はないので、それが知らずにあなたを痛めつけることになつたのでせうから、どうぞ勘忍して下さいまし。

騎兵大尉　大分人聞きがよささうだね。だがそんなことが何の役に立つのだ。では誰が惡いのだ。或は精神的な結婚に罪があるのか。昔、男は一人の女と結婚をしたものだ。いまでは一人の職業婦人と組合になるか、友人關係を結ぶのだ。さてその組合の女を姙娠させ友達を凌辱するといふわけだ――それでどこに愛があるか。健全な性に基づく愛がどこにあるか。それで愛は死んで滅びてしまつたのだ。さてこの連帶責任のない株主に拂ひ出された株式から成り立つた愛がどんな子孫を生むだらう。破綻が出來た時株主は誰なのだ。この精神的な子供の肉體的な父親は誰なのだ。

ラウラ　ところであなたの疑といふのは、飽くまで根も葉もないことなのです。

騎兵大尉　だからよけい恐しいのだ。せめて寄りどころがあれば何かつかむところがある、嚼りつくところがある。それがいまではたゞの影坊師で、藪の中にかくれてちよい〳〵首を出しては笑ふだけなのだ。いまではまるで空氣を相手に戰つてゐるやうなものだ。たゞの空だまで模擬戰をやるやうなものだ。生きるか死ぬかの現實なら、それに反抗する張合もあるし、實行に向つて生命をも精神をも鼓舞したらう、ところがいまは……考へたことは煙になつて、腦髓は空を掴んで火を發するまでになつてゐる。頭に枕をかつてくれ。そして何か上にかけて貰ひたい、寒くなつた。恐しく寒いのだ。

ラウラ　〔自分の肩掛をとつて、大尉の上にひろげる〕

乳母　〔枕をとりに出て行く〕

ラウラ　あなた、手をお出しなさい。

騎兵大尉　手だと。それはお前が背中へ縛りつけてしまつたではないか。オムファーレ。オムファーレ。だがお前の柔かい肩掛がわたしの口にあたる。それは生溫かく、やんわりと、お前の腕にさはるやうだ。お前が若い時分の髪の毛のやうにワニルラの匂がする。ラウラ、お前がまだ若かつた時分、二人でよく白樺の林を散歩したつけね、さくら草が一ぱい咲いてゐて、鶯の歌にわたしたちの

愛の囁きを合せたものだつた。愉快だつたな、愉快だつたな。生活はどんなに楽しかつたらう。それがどんなにいやなものになつてしまつたのだらう。さうならうとはお前も思はなかつた、わたしもそれは思はなかつた、が、やはりそれはさうなつたのだ。一體この人生を支配するものは誰なのだ。

ラウラ　神さまお一人が支配なさるのよ……。

騎兵大尉　するとそれは戰の神だな。さもなければ、いまでは女の神さまなのさ。上にのつてゐる猫をどけてくれ。どけてくれ。

乳母　〔枕を持つて來る、肩掛をどける〕

騎兵大尉　わたしの軍服をくれ。あれをわたしにかけてくれ。

乳母　〔衣服掛にかけた軍服を取つて大尉にかけてやる〕

騎兵大尉　やれ〳〵この堅い獅子の皮は、それをお前はわたしから取つて行かうとしたのだ。オムファーレ。オムファーレ。やいこの野狐め、平和の友を看板にして、武裝解除を迫るのだな、目をさませ、ヘルクレス、女がお前さんの棒をとつて行つてしまうぞ。お前はわたしたちの鎧をもぬがせようとした、それを飾物に思はせようとした、どうしてこれは鐵だつたのだぞ、飾物にいまこそなつてゐるけれど。昔は鍛冶屋が軍服をこしらへたものだ、ところがいまではお針の女がそれを縫ふのだ。オムファーレ。オムファーレ。ぶこつな強者が、猫なで聲の弱者に負けたのだ。ちよつ、用心しろ、この女惡魔め、貴樣の同族を呪つてくれたい。〔起き上がつて唾を吐きかけようとして、ソファーに引き止められる〕おい、マルグレット貴樣は何といふ枕をくれたのだ、實に堅くて、その上實に冷たい、さあそこへ來て、わたしの傍の椅子にかけてくれ。さうだ。さうだ。わたしの頭をお前の膝にのせさせてくれ。さうだ。——これは暖いぞ。體をずつとかゞめてくれ、お前の胸にさはれるやうにな。——あゝ、女の胸におつついて眠るのはいゝ心持だ。それは母親の胸でも、好いた女の胸でもいゝが、やはり一番いゝのは母親の胸だつた。

ラウラ　あなたの子供をごらんなさりたくはないの。えゝ。

騎兵大尉　わたしの子供だと。男に子供なんといふものはない。女だけに子供があるのだ。だからわたしたちが子供なしで死ねば、子供の將來は母親のものになるのだ——あゝ、子供を可哀がつて下さる神さま。

乳母　おや、旦那さまが神さまを祈つておいでだ。

騎兵大尉　いや、わたしはお前によく寢つかしてくれといつて祈つてゐるのだ、わたしは疲れてゐる。實に疲れてゐるのだからな。お休み、マルグレットや、どうか女の中でもお前だけには、神さまの惠みがかゝるやうに。〔起き上がらうとしたが、一聲叫んで乳母の膝に倒れる〕

第八景

ラウラ、左手へ行き、醫師を呼び入れる。醫師は牧師と一緒に入つて來る。

ラウラ　先生、手おくれになりません中に助けていたゞきたうございます。あのとほりもう息をいたしません。

醫師　〔病人の脈を調べる〕腦卒中を起されたのだ。

牧師　もういけないのですか。

醫師　いや、まだ息を吹きかへすでせう。たゞしどういふ風になつて吹きかへすかわかりません。

牧師　まづ死、それから裁判……。

醫師　裁判なぞはいりません。告訴なぞの用もないのです。あなたとしては、神が人間の運命を司ることを信じてゐられるあなたとしては、むしろ神にこの事件を告げられるべきでせう。

乳母　あゝ牧師さま、旦那さまは御臨終に神さまをお祈りなさいました。

牧師　〔ラウラに〕ほんたうかい。

ラウラ　ほんたうです。

醫師　それがほんたうだとしますと、わたしはこの病氣の原因と同樣に一向に判斷がつかなくなります。とすればわたしの技術もおしまひですね。まあ牧師さん、差當りあなたの方のおつとめをしていたゞきたい。

ラウラ　先生、臨終の床に臨んでおつしやることはそれだけですか。

醫師　それだけです、それ以上をわたしは知りません。もつとそれ以上に知つておいでの方はおつしやるがいゝ。

ベルタ　〔右手からはいつて來る、母親の傍へ駈けよる〕ママ、ママ。

ラウラ　あゝわたしの子、わたし一人の子。

牧師　アーメン。

なかま同士

四幕喜劇（一八八七年）

人物

アクセル　畫家
ベルタ　その妻。女流畫家
アベル　女の友達
ウィルメル　文士
スタルク　陸軍中尉
スタルク夫人
エステルマルク　醫師
ハル夫人　その別れた妻
二人のハル嬢　ハル夫人がほかの夫に依つて生んだ娘たち

全四幕の舞臺

パリーに於ける或畫室、平地の上の建物、いくつかの玻璃扉で庭へ通ふ。
後景に大きな窓、表廊下への扉。壁に習作、織物、武具、衣裳、石膏の細工物など。右方の扉は主人の居間に、左方の扉は細君の居間に通ふ。畫室のまん中、やゝ左手に寄つてモデルの立つ臺。右手に附屬具のついた畫架。寢椅子。大きな切込爐には透明な白雲母の蓋があり、それを通して中の火が見える。天井に吊燈。

第一幕

第一景

アクセルと醫師。

アクセル　〔腰を掛けて畫をかいてゐる〕で、君もパリーへやつて來たのだね。

醫師　何しろ地球の中心點といふやうなわけで、何がなしに集まつてくるところだからね。ところで君は結婚したのだつけね。うまく行つてるかい。

アクセル　あゝ、あゝ。そりや君大いにうまく行つてるさ。――あたり前だ……

醫師　どうして當り前だ……

アクセル　まあさ、君もやもめといふもんで、一度は結婚したわけだね。一體君は結婚してどんな風だつたい。

醫師　非常によかつたよ……女のためにはな。

アクセル　しかし君のためには。

醫師　いやはやさ。だが君、融和することも必要だよ。吾々はいつも行けるところまでは融和して行くのだね。

アクセル　何だね、その融和して行くといふのは。

醫師　卽ちこちらが屈從するといふことさ。

アクセル　君が。

醫師　さうさ、君は僕のやうな人間にさういふことは考へられんといふのかい。

アクセル　あゝ、考へられなかつたね――すると君、君は婦人を信じ切ることはないのだね。

醫師　あゝ、ないとも。そんなことをするものか。だが愛しはするよ。

アクセル　君流にね。

醫師　僕流に――勿論さ。ぢやあ君流に行くと、どうだね。

アクセル　僕等は君、仲間同士でやつて行くのだよ。友情は戀愛よりもずつと高尙だし、永續もするものなのだ。

醫師　ふん。――するとベルタさんもやはり畫をかくのだね。上手かい。

アクセル　うん、うん。

醫師　あの人とは、これで昔隨分仲好しだつたものさ。その代り始終何かと喧嘩をしたつけ――おや、お客さまだ。しいッ。カルル君が細君をつれてやつて來たのだ。

アクセル　〔立ち上がる〕ところでベルタは內になんぞゐやしない、Sacristi.

第二景

前景の人々。中尉カルル・スタルクとスタルク夫人はいつて來る。

アクセル　〔兩人を迎へて〕やあ、よく來ましたね。ここにゐると世界の果から果の人に逢へますね、奧さん、どきげんよう、あなたは御旅行の後だといふに大變元氣のやうですな。

スタルク夫人　ありがたう存じます。わたしどもはまつたく愉快な旅行をいたしましたわ。それはさうと、ベルタさんはどちらへ。

カルル　さうだ。ほんにベルタさんが見えん。

アクセル　妻はアトリエに行つてゐます。しかしもうぢきに歸つて來ますよ。まあお掛け下さい。

醫師　〔客に挨拶する〕

カルル　ぢやあ君ちよつと失禮。じつはほんの通りがかりに、どんな樣子だか拜見に上がつたといふわけさ。しかし五月一日の土曜には御招待を頂いてゐるね。

アクセル　あゝさうです。ぢやあ御案內が屆きましたか。

スタルク夫人　えゝ。もうハムブルクにゐる時分に頂戴いたしましたのですよ。あの、ベルタさんはこのごろ何をしておいでです。

アクセル　さやう、畫をかいてゐますよ、わたしと同じやうに。只今もあれのところへモデルの來

るのを待つてゐる次第です。まあそんなわけで――あなた方をしひてお引止め申すこともできないのです。正直なお話をすればね。

カルル　君、わたし達がきまりを悪がると思ふのかね。

スタルク夫人　でもそのモデルといひますのは、まさか――着物を脱ぐのではないでせう。

アクセル　むろん脱ぎますとも。

カルル　男がね。チョッ、馬鹿な。――わたしは妻などにそんなことは断じて許さん。たつた一人、裸の男と置くなんといふことは。

アクセル　カルル君、それは偏見といふものですよ。

カルル　ほう、ぢやあ君は。

スタルク夫人　まあ、いやですわねえ。

醫師　さやうさ。それはわたしも同感だ。

アクセル　わたしだつてそれを全然自分の趣味に適つたものとは思はないが、しかし自分もやはり女のモデルを使つてゐる以上はね……

スタルク夫人　でもそれは別のことですもの――

アクセル　別のこと。

スタルク夫人　えゝ、別のことですとも。夫婦が同じ爲事をやつてゐるからと言つて、何から何まで同じやうに爲るには當りません。

扉を叩く音。

アクセル　來ました。

スタルク夫人　ぢやあお暇しませうよ。ではさやうなら、何れまた。ベルタさんにどうかよろしくおつしやつて下さいまし。

アクセル　ぢやあ失禮します、だいぶお厭のやうだから。ではまた。

カルル及び醫師　さやうならアクセル君。

カルル　〔アクセルに〕君、せめてそばで立會つたらどうだね。

アクセル　いや。どうしてそんな。

カルル　〔頭を搖りながら出て行く〕チョッ。

第三景

アクセル一人畫をかく。扉を叩く音。

アクセル　おはいり。

モデルの男　〔入つて來る〕

なかま同士

アクセル　あゝ來たね。奥さんはまだ歸つてゐないよ。

モデルの男　でももうかれこれ十二時でございます。また外へ參らなくてはなりません。

アクセル　さうだらうとも。うん、困つたな。だが、ふん、あいつまたアトリエで何かに引ッかかつてゐるのだな。料金はいくらだね。

モデルの男　いつもの通り五フラン頂きます。

アクセル　〔金を拂ふ〕それ。まあとにかく待つて見てくれないか。

モデルの男　えゝお金を拂つてさへ頂けば。

アクセル　あゝ、どうか暫くの間掛けてゐておくれ。

モデルの男　〔衝立いうしろに行く〕

第四景

アクセル一人かきながら口笛を吹く。程なくベルタ。

アクセル　あゝお前、やつと歸つて來たね。

ベルタ　やつとですつて。

アクセル　さうさ、モデルが待つてゐるよ。

ベルタ　〔驚いて〕えゝ。また來たんですか。

アクセル　だつてお前が十一時頃に來いと言つたのぢやないか。

ベルタ　わたしが、いゝえ。あの男はそんなことを言つてゐて。

アクセル　あゝ、わたしもきのふお前がさう言ひ付けてゐたことは聞いて知つてゐる。

ベルタ　さうだつたかも知れないわね。けれど先生が仲々歸して下さらなかつたのですもの。だつて何しろおしまひのお稽古でせう、みんなそは〳〵落ち着きやしないのよ。おこつちやいやですよ、あなた。

アクセル　おこる。どうして。だがね、もう二度まで重なつたし、そのたんびにたゞ五フラン取られるのだから。

ベルタ　でも先生がお引き留めになるものをどうして。なぜまたそんなに小言をおつしやるのよ。もう決して小言なんか……

アクセル　わたしは小言を言つたかい。

ベルタ　だつて。あなたそんなことを言つて……

アクセル　さうだよ、さうだよ、わたしは小言を言ひましたね。勘忍おし……勘忍おし、お前のせゐだなんて思つたのはわるかつたよ。

ベルタ　そんならいゝわ。――けれど一體あの男にどのお金を拂つてやつて。

アクセル　あゝ、それはね、ガガに貸した二十フランを返して貰つたから。

ベルタ　〔小遣帳を取り出す〕あゝさう、あれを返して貰つたの。ぢやあ付けておきませうね。物のきまりだから。それは勿論何であらうと、あなたの好きに使つていゝお金ですよ、けれどあなたはわたしに、上手に經濟を繰り廻さなければいけないとおつしやるから、そらね……〔書く〕「十五フラン收入、五フラン支出、モデル代。」ね。

アクセル　おい、違ふよ、二十フランの收入だよ。

ベルタ　えゝ、でもここには十五フランしきやないわ。

アクセル　あゝ、でも二十フランの收入だつたのだからね。

ベルタ　さう、でもこの卓の上には十五フランだけしきやない。それをさうぢやないと言へて。

アクセル　どうして、どうして、そんなことは言へないさ。いかにも卓の上には十五フラン載つてゐるよ。卓の上には——

ベルタ　ぢやあ何だつてぐづぐづいふの。

アクセル　わたしが何を……。——それはさうとあの男が待つてゐるぜ。

ベルタ　あゝさうだつけ。ぢやあ支度をして頂戴な、ね、いゝ子だから。

アクセル　〔モデル臺の用意をする。衝立のうしろに聲をかける〕君、着物は脱いだかい。

モデルの男　〔衝立の陰で〕只今。

ベルタ　〔扉を閉めて、爐に焚木を入れる〕さあ。これであなたにもあちらへ行つて頂かなくちやならないのよ。

アクセル　〔躊躇しながら〕ベルタ。

ベルタ　え。

アクセル　お前どうしても裸體のモデルが必要なのかい。

ベルタ　勿論必要だわ。

アクセル　ふん。さうかい。

ベルタ　わたし達は今宿題で競爭の眞最中なんでせう。

アクセル　なるほど。だがとにかく、結構なことではないな。〔左の扉から出て行く〕

ベルタ　〔繪筆とパレットを取り上げる、衝立のうしろへ聲をかける〕元のまゝ。

モデルの男　出來てをりますよ。

ベルタ　ぢやあ來て下さい。

間。

ベルタ　來て下さい。

なかま同士

扉を叩く音。

ベルタ　どなた。わたし今モデルを使つてゐるところですよ。

ウィルメル　〔外で〕ウィルメルですよ。サロンのしらせをもつて來たんですよ。

ベルタ　サロンの――〔モデルに〕着物を着て下さい。また來てもらひませう。――あなた、ガガさんがね、サロンのしらせをもつて來たのですよ。

アクセル　〔出て來る〕

モデルの男は次景の對話の間そつと出て行く。

第五景

前景の人々。ウィルメル。

ウィルメル　やあ、ごきげんよう。あしたから審査が始まりますよ――。そらベルタさん、繪筆を持つて來ました。〔かくしから小さい包を取り出す〕

ベルタ　まあガガさん、ありがたう。いくらして。隨分高かつたでせう。

ウィルメル　なあに、大したことではないのです。

ベルタ　ぢやあもうあしたから審査が始まるんですね。ねえ、あなた。

アクセル　あゝ、ね。

ベルタ　あなた大變親切な方になつて下さらなくつて。大變。

アクセル　それはお前、いつだつてお前には親切にして上げるよ。

ベルタ　まあほんと。ぢやあね、あなた、あのルーベイを御存じでせう。

アクセル　あゝ、あの男にはウィーンで會つてね、それから友達といふやうな形になつてゐますよ。

ベルタ　あなた。あの方がこんど審査員におなんなすつたこと御存じですね。

アクセル　それがどうしたい。

ベルタ　えゝ、きつとおこんなさるわ。わたし知つてゐるわ。

アクセル　それほど知つてゐるのか。ぢやあおこらせないやうにするがいいさ。

ベルタ　〔あまえるやうに〕ねえ、あなた、細君のために犧牲になつては下さらない。おいや。

アクセル　お情にすがりに行くのかい。いけない、それはごめんだ。

ベルタ　あなたの靈はどうせはいつてゐるのでせう、だからあなたのためではないのよ、あなたの細君のためにさ。

アクセル　その上せがむ事はよしておくれ。

ベルタ　わたしあなたに物をせがみなんかしなかつたわ。

アクセル　それはわたしにやれることなら構はないさ。たゞ……

ベルタ　御自分の男たる面目を犠牲にしない限りね。

アクセル　まあ、なんとでもいふさ。

ベルタ　でもわたしなら、あなたを助けるためには自分の女たる面目を犠牲にしますわ。

アクセル　お前たちに何の面目があるかい。

ベルタ　あなた。

アクセル　ごめん、ごめん。

ベルタ　あなたきつとわたしに嫉妬を起していらつしやるのね。きつとわたしがサロンに入ることを望んでいらつしやらないのね。

アクセル　ベルタ、お前が入つてくれゝば、わたしはこれほど嬉しいことはないのだ、ほんたうだよ。

ベルタ　でもあたたはわたしが入つて、あなたが落ちても嬉しいと思つて。

アクセル　さあどんな氣がするものかな。〔左の脇腹に手を置く〕　きつとそれは不愉快な感じのするものだらうな。きつと。第一、わたしはお前よりずつと畫がうまいのだし、それから——

ベルタ　〔一足二足部屋の中をあるく〕つい、「お前は女なのだから」と言つておしまひなさいな。

アクセル　うん、さういふわけもあるだらう。不思議だねえ、竈の蔭にゐると思ふと、いつかまるで闖入者のやうにやつて來て、わたし達の大汗流して得たものを掠奪して行く。ベルタ、こんなことを言つてすまないね、けれどこんな考が自然にわいて來るのだからしやうがない。

ベルタ　まあ、あなたも世間の男の人達と同じことなんですねえ。

アクセル　世間の男と同じだ。さうありたいものさ。

ベルタ　それにこの頃あなたはいやにえらくかまへてゐるのね。先にはこんなことはなかつたわ。

アクセル　それはわたしがえらいからさ。わたし達がこれまで爲なかつたことを何かやれ。

ベルタ　何ですつて。何をおつしやるの。あなた恥かしくはありませんか。

ウィルメル　まあ、まあ、止したまへ。ねえ、君達どうしたのだい。ベルタさん、まあ落ちついて下さい。

ベルタに目付で知らせる、その意味を相手はとかうとする、

ベルタ　〔折れて〕あなた、また仲好しになりませうね、そしてちよいとの間靜かにしてわたしの言ふことを聞いて頂戴。あなたはあなたの家で——えゝ、あなたの家でですよ——わたしの今居る境涯が愉快なものだと思ひますか。あなたはわたしを養つてゐて下さるし、わたしをユリアン先生のところへお稽古にやつて下さるし、それで御自分では一向勉强をする工夫もなさらずにゐる。そりやわたしだつて、あなたがかうしてつまらない製圖なんかにあたら體も才能も一しよに廢らせて行つて、ゆつくり氣のむいた時間に、畫をかくこともなさらないといふことは、見て知つて

ゐるのですよ。わたしのためには一時間五フランといふお金を出してモデルを雇つて下さるのに御自分にはモデル一つ使へないのぢやありませんか。あなたは御自分がどれほど善良でどれほど立派で、どれほど自分といふものを犠牲的にしていらつしやるか知らずにいらつしやるやうに、あなたがさうしてわたしのために苦勞しておいでになるのを見て、どれほど蔭でわたしが煩悶してゐるかといふことも御存じないのですよ。まあ、あなたにはわたしのやうな境遇がどんな氣持のものだかお分かりにならないのよ。あなたのためにはわたしは何でせう。何の資格でわたしはあなたの家に居るのでせう。あゝわたし、それを考へると恥かしくなるのですよ。

アクセル　それは何の言草だ。お前はわたしの妻ではないか。

ベルタ　えゝでも……

アクセル　でも何だい。

ベルタ　でもあなたはわたしを養つてゐて下さるでせう。

アクセル　ぢやあさういふことをしてはならないものなのかい。

ベルタ　えゝ、昔は、昔の夫婦關係では、さういふものでしたわ、けれどもわたし達はさうしたくないのです。わたしたちは仲間同士でありたいと思ふのですよ。

アクセル　何をくだらない。ぢやあ夫は妻を養つてはならないのか。

ベルタ　わたしはいやですわ。だからアクセルさん、あなたも加勢して下さるのですよ。わたしも今の境涯ではあなたと同等ではないわ。けれどあなたが一度、思ひ切つて一度身を屈してさへ下さればさうなれるのですよ。審査員の誰彼の所へひとのために宜しく執り成しを頼みに行くのはあなた一人ではないのですもの。これが御自分のことだとすると話が別ですわ、けれどわたしのことですものね。わたしのことですもの。さあわたしはほんたうに一生懸命のお願なのですよ。わたしを低い境涯からあなたの境涯にまで引き上げて下さい。わたしどんなにうれしいでせう。さうなればわたしもう二度とあなたに、わたしの境涯を考へてくれといつていちめはしませんからね、決して二度とは、ね、あなた。

アクセル　さうせがまないでおくれ、わたしの氣の弱い人間だといふことはお前も知つてゐるだらう。

ベルタ　〔夫を抱く〕でもわたしはせがむわ、わたしの願を叶へて下さるまでいつまでもせがむわ。まああなた、そんなにえらさうにしないで、やさしくして頂戴よ。そらね。〔接吻する〕

アクセル　〔ウィルメルに〕どうだいガガ君、女といふ奴は、たまらない暴君ぢやないか。

ウィルメル　〔困つたやうに〕さうだよ、殊に下手に出てくるとね。

ベルタ　まあ御覽なさい、何ていゝお天氣になつたでせう。あなた、行くんでせうね、さうだわ。

ぢやああの黒の上着を着ていらつしやいよ、そしてお昼には内へ歸つて來て、それからみんなで一緒に食事にしませう。

アクセル　一體今時分がルーベイの應接時間だといふことをどこから聞いて來たのだい。

ベルタ　あなた、その位のことを知らないと思つていらつしやるの。

アクセル　ベルタ、お前は全く惡者だなあ。

ベルタ　〔衣類棚から黒の上着を取り出す〕さあ男らしくするんですよ、それでないと男がだめになりますよ。ほら。上着を着るんですよ。さう。

アクセル　しかしどうも弱つたなあ。一體わたしはあの男に何と言へばいゝのだ。

ベルタ　ふん。途中で何とか考へ付くでせうよ。さうね、例へばあの、あの、あなたの細君が――いゝえ――あなたよ、あなたが洗禮式に出ようと思つて……

アクセル　チョッ、下らない。

ベルタ　ね、それから言ふの、あなたからあの人に勳章を差し上げたいつて。

アクセル　ばかな、とんでもないことをいふ。

ベルタ　ぢやあ何とでも好きなことをおつしやいよ。さあいらつしやい。髪を縮らして、立派な男にしてあげるわ。あなた、あの人の奥さんを御存じですか。

アクセル　まるつきり知らない。

ベルタ　〔髪を額で分ける〕ぢやああなた、奥さんに面會なさらなくてはなりませんよ。あの奥さんは大變な勢力家なんですよ、けれど女には好くない人なのですからね。

アクセル　お前一體わたしの髪をどうしようといふのだ。

ベルタ　最新流行のスタイルに髪を縮らしてあげるわ。

アクセル　いや、しかしそいつはごめんだな。

ベルタ　そら。これでいゝ子になつたわ。まあわたしのいふ通りにするよ。〔彼女は鏡筒の前へ行き小箱を出して、その中からロシアのアンネン勳章を出し、これをアクセルの鈕の穴へかけようとする〕

アクセル　いけない。いけない、そんな事をされてたまるものか。わたしは勳章なぞは着けないよ。

ベルタ　だつてあなたはこの勳章を貰つておいたのでせう。

アクセル　さうさ、返すことはできなかつたけれどわたしは決してこれをつけるつもりはないのだ。

ベルタ　あなたは何か政黨のやうなものに屬してゐて、その政黨は自分勝手に、勳章を付けようといふ個人の自由を壓制するといふわけなの。

アクセル　いんや、そんなことはない。しかしわたし達の仲間はお互に勳章などを上着の上に着けないことを自慢にしてゐるのだから。

ベルタ　でも賞牌は貰つたのね。

アクセル　よし貰つても上着の上になんか着けないよ。

ベルタ　ガガさん、あなたどう思つて。

ウィルメル　全體勳章といふ奴は、目じるしを付けて歩きまはるわけで、餘り嬉しいものぢやありませんね。だからひとがつけたからつて、まねをするには及ばない、わたしにすればまあいやですね、けれども他人のつけてゐるものを取らせるにもあたりませんよ。

アクセル　さう、だが仲間のもつとえらいしごとをした奴がまるで勳章なしに歩いてゐると、こちらは付けてゐた勳章も引ッ込ましたくなるからね。

ベルタ　でもあなた、外套の下なら見えないから、誰にも分かりやしないし、目じるしにもならないわけでせう。

ウィルメル　こりやベルタさんのいふとほりだ。君上着の下に勳章をかけて行き給へ、さうすりや上ぢやあないからいゝだらう。

アクセル　エズイット教徒め。一度指を出したが最後すぐ腕ぐるみ頂戴とくる。

第六景

前景の人々。アベル〔來る。毛皮の外套と毛皮の帽子〕

ベルタ　あら、アベルさんだ、あなた來て喧嘩の仲裁をして頂戴よ。

アベル　ベルタさん、どきげんよう。アクセルさん、どきげんよう。ガガさん、いかゞ。一體どうしたつていふわけなの。

ベルタ　うちの人がね、勳章を着けるのは、お仲間の方に悪いからと言つて、着けないのですよ。

アベル　勿論お仲間は奥さんより重いのですよ。それはほかのいろ〳〵のことゝ同樣の自然律ですわ。〔卓の上に坐り、煙草を出して紙卷を卷く〕

ベルタ・〔勳章の綬をアクセルの鈕の穴につけ、星章をまた小箱の中に入れる〕　この人は誰にも迷惑をかけずにわたしのためになつてくれられるのですよ。けれどこの人きつとわたしを困らせたいと思つてゐるのだわ。

アクセル　よせ、ベルタ、だが君等はわたしを發狂させるぞ。わたしはこの勳章を着けるのを罪惡だとは言はない、またそれをしないと言つて誓言したわけでもないのだ。しかしわたしの考では、そんなものをつけずに自分の道ぐらゐ行きえないのは卑怯だと思ふのだ。

ベルタ　男らしくない、勿論だわ。でもこんどばかりは全くあなたの行く道ではない、わたしの道を行くのですよ。

アベル　アクセルさん、あなたは、あなたのために生涯を捧げてゐる細君の代理ぐらゐつとめる義

務があるのですよ。

アクセル　お前たちのいふことは間違つてゐるとは思ふが、その返事を考へるひまも氣力ももち合せない、といふことが既に返事なのだからな。まるでわたしがかうしてしごとに埋れて坐つてゐる上を、お前達が來て網をぶつかけるやうなものだ。わたしのからだは網に引ツかけられてゐるやうな氣がする、しかし無理に歩き出さうとすれば網に足を取られるばかりだ。まあ待つがいゝ、その中この兩手を自由にして、一思ひにメスを揮つて、お前たちの絲を斷ち切る時がくるから。——だがわたしたちは何の話をしてゐたのだつけ。まあとにかく訪問はしてみよう。ねえ、ぢやあ手袋と外套を出してもらはう。行つてくるよ、ベルタ。ぢやあしばらく——待てよ、一體ルーベイの家はどこだね。

ウィルメル、アベル及びベルタ　〔同時に〕ルー・デ。マルチール六十五番地。

アクセル　ぢやあぢき近所だ。

ベルタ　すぐ角だわ。あなた、ありがたう、行つて下すつて。ねえ、あなた、この犧牲はあなたにはそんなに辛くつて。

アクセル　わたしは今のところ、お前のおしやべりでくたびれきつてゐるといふ外に何の感じもない。却つて外へ出る方が愉快なのだ。ぢやあ行つてくるよ。

第七景

ウィルメル、アベル、ベルタ。

アベル　アクセルさんはお氣の毒ね、ほんたうにお氣の毒ね。あなた方まだ、アクセルさんの書が審査にはねられたことを、御存じないのですか。

ベルタ　そしてわたしは。

アベル　あなたのことははつきり分かりません。それは、あなたが御自分の娘時代の名をフランス語の發音で書いたでせう、だからOの組にならなくては順が廻つて來ないんですよ。

ベルタ　ぢやあわたしの方はまだ脈があるんだわ。

アベル　あなたの方はさう、けどアクセルさんはとてもだめよ。

ウィルメル　さあ、これからが見ものだ。

ベルタ　一體あなたはあの人のはねられたといふことを、どこから聞いていらしつたの。

アベル　ふん、わたしは落選者の一人に逢ひましてね、その男が知つてゐたのですよ。で、じつはじまつてゐなければいゝがと、びく〳〵ものでやつて來たのですよ。けれどあの人はまるでこのしらせを受けとつてゐないやうでしたね。

ベルタ　えゝ、どうもまるで知らないのでせうよ。けれどアベルさん、アクセルはきつと今頃、ル

ーベイ夫人に逢つてゐるでせうが、御主人には逢はないでせうね。

アベル　御主人になんか逢つたつて何になるでせう、あの人はマダムが女流畫家保護同盟で勢力を振ふことに對しても、何にもいひ得ないのではありませんか。

ベルタ　で、とにかくわたしはねられないのね――まだなのね。

アベル　えゝ、今申し上げたとほりよ。それにアクセルさんの訪問の結果があらはれるでせうよ。あの人はロシアの勳章を持つてゐるし、何に依らずロシア物と言へば、この節パリーで大もてなんだから。けれどどちらにしてもアクセルさんはお氣の毒ですわ。

ベルタ　氣の毒ですつて。なぜ。誰も彼もサロンの壁にかけてもらふ席はないのですよ。サロンからはねられる女は幾人だかしれないのだから、たまには一人ぐらゐ男がはねられてもいゝのよ。けれど今わたしの畫が入つたとしてごらんなさい、世間はきつとかういひます。あの人がわたしの畫をかいてやつたのだ。あの人がわたしを教へたのだ、學校へ通はせたのだとかういひます。けれどわたし承知しやしない、そんなことはほんたうではないのだから。

ウィルメル　さあ、いよ〳〵變つた一幕を拜見するか。

ベルタ　いゝえ、大違ひ。まあかりにわたしの畫がはねられたなかつたとして、極々當り前のことが起るだけでせうよ。けれどやはりその瞬間はおそろしいわ。何だかさうなるともうアクセルとわたしの間は、これまでのやうには行かなくなりさうに思ひますよ。

アベル　でもあなた方が同じ地位に立つといふことはきつといゝことですよ。

ウィルメル　まああなたの境遇はずつとはつきりしたものになりますね。そして自分の畫を賣つて、自分で自分の身始末ができるやうになると、その境遇はずつと愉快なものになりますね。

ベルタ　さうなるべきですよ。ほんたうに見ものでせうよ。ほんたうに見ものでせうよ。

第八景

前景の人々。女中〔綠色の手紙を持つて來て、また出で行く〕

ベルタ　アクセルに宛てゝ綠色の手紙が。あゝとう〳〵來た。あの人ははねられたのですよ。でもほんたうに困つたわねえ。もつともわたしまでがしくじつた時には、これが却つて慰めにはなるけれど。

アベル　でもうまく行つた時には。

ベルタ　〔默つてゐる〕

アベル　あなたお答はなさらないの。

ベルタ　えゝ、わたしそれにお答はしないわ。

アベル　その時には平均が破れるでせう、あなたはあの人に勝つたのですもの。

ベルタ　勝つた。細君が夫に勝つた、夫に。あゝ。

ウィルメル　とにかく進んで模範を示す時が來てゐます。

アベル　あなたけふ朝飯にいらしつて。上等でしたか。

ベルタ　えゝ、えゝ。

ウィルメル　時に、アベルさん、あなたはいつ僕の本の批評を書いて下さいますか。

アベル　今やつてゐる最中ですよ。

ウィルメル　どうです、いゝやうですか。

アベル　大變結構ですわ。――それはさうとベルタ、あなたはいつどういふ風にしてその手紙をあの人にわたすおつもり。

ベルタ　それを今考へてゐる所ですわ。あの人がうまくルーベイ夫人に逢へなくつて、一度で話が運ばないやうだと、今度の打擊をうけたあとでは、あの人ももうその上しようとはしないでせう。

アベル　〔立ち上がる〕でもわたしアクセルさんはあなたに復讐するやうな卑しい人だとは信じませんん。

ベルタ　卑しい。卑しいどころですか。まあ何をいふの。なぜあの人は今わたしの使に行つてくれたのでせう。たゞわたしがあの人の細君だからです。外の人のためにあの人が行くものですか。

アベル　もしあの人が誰か外の人のためにそれをなすつたとしたら、あなたはわらつて見ていらつて。

ベルタ　さやうなら、さああなた方はあの人の歸つてくる前にいらつしやらなければいけないのよ。

アベル　どうも有難う。さやうなら、ベルタさん。

ベルタ　さう、今の中、ほんたうに行つて頂戴。さやうなら。

第九景

前景の人々、女中〔ハル夫人を取り次ぐ〕

ベルタ　どういふ人だらう。

アベル及びウィルメル　ベルタさん、さやうなら。〔兩人出て行く〕

第十景

ベルタ。ハル夫人〔飾り立ててはゐるがだらしない服裝、賣春婦らしい樣子で入つて來る〕

ハル夫人　失禮でございますが、どうぞお見知り置きを願ひます。あなたはたしかオルンド家の方で、アルベルクの奥さんでいらつしやいませうね。

ベルタ　はあ、さやうでございます。どうぞお掛け下さいまし。

ハル夫人　わたしはハルと申しますよ、やあれやれ、くたびれた、澤山梯子段を上がらされたので、

あゝ、くたびれた。氣絶でもしさうですよ。

ベルタ　何かわたしに御用でございますか。

ハル夫人　奥さん、あなたはお醫者の、エステルマルクといふ人を御存じでございませうね。

ベルタ　はあ、前からお友達でございます。

ハル夫人　前からのお友達、なるほどれ。まあ奥さん、きいて下さいよ、わたしは昔あの人と結婚したのですが、分かれてしまつたのでございますよ。まあ、あなた、わたしは離緣になつた女なのでございますよ。

ベルタ　まあ、そんな話はついぞ伺つたことはございませんでしたよ。

ハル夫人　えゝ、さういふ話はしないものでございますよ。

ベルタ　あの方はいつでも奥さんに死にわかれたやもめだとはおつしやつてですけれど。

ハル夫人　えゝ、あなたもその頃若い娘さんでしたからね、あの人もさういふことは、はつきりさせにくかつたものでせうよ。

ベルタ　で、わたしいつも、ドクトル・エステルマルクは立派なお方だと信じてゐました。

ハル夫人　はあ、おつしやるとほりですよ。それはまつたく立派な紳士でございましたとも。

ベルタ　でもなぜさういふことをお話しになるのです。

ハル夫人　まあお待ちなさいよ、奥さん、まあ待つて下さいよ、お話しますがね。あなたは同盟の會員でいらつしやるでせう。ねえ。

ベルタ　はあ、さやうでございます。

ハル夫人　ほらね。まあお待ちなさいよ。

ベルタ　お子さんはおありですか。

ハル夫人　二人ありますよ、オルンドさん、娘が二人ね。

ベルタ　するといくらか話がちがつて來ますね。それなのに、あの人はあなたをお棄てなすつたのですか。

ハル夫人　まあ待つて下さいよ。ほんの申しわけばかり、それは家賃にも足りない位の扶持を毎年送つてはくれました。それが今では娘たちも成長しましたし、世の中へも出さなくてはならないといふ時分に、どうでせう、手紙をよこしましてね、破産をしたから金はもう半分しか送れないと言つて來たのでございますよ。まあ善く出來てるぢやありませんか。しかもちやうど娘たちが成長して世の中へ出ようといふ矢先にね。

ベルタ　さういふことではわたし共も聞きずてにはなりませんね。あの人は二三日中にはこゝへ參ります。そりや奥さん、あなたの方に十分道理はあるのだから、法律はきつとあの人に支拂を強

制するでせうよ。あの人だつて強制されたつてしかたがないわ、さうですとも、子供を生ませておきながら、その子供をお氣の毒な、棄てられた細君と一所に放り出してしまうなんて。まあ、今にどんな目に逢ふかしれやしない。あなたのお宿を伺つておきませう。

ハル夫人　〔名刺を出す〕あのアルベルグの奥さま、お腹立ちになつては困りますが、わたし折り入つてほんのつまらないお願ひがあるのでございますが。

ベルタ　あなたはもう親船に乘つた氣でいらつしやいよ。わたし今書記の所へ手紙を書いてあげますから……

ハル夫人　まあ〳〵とんでもない、どこまで御厄介をかけますことやら、ところでその書記さんの御返事がまゐりますまで、わたしはあの可哀さうな子供たちをつれて路頭にまよはねばなりません。どうぞオルンドの奥さま、わたしに少々許りお金を貸して下さいまし、たつた二十フランでよろしうございます。

ベルタ　いゝえ、奥さん、わたし自分にはちつともお金がないのですよ。主人が心配してくれますだけでもつて、それで大抵滿足しなければならないのですよ。若い癖にお扶持をうけてゐるのは辛いことですよ、けれどもまだ當分外にしかたがないのですからね。

ハル夫人　まあ、アルベルクの奥さま、お願ひでございます、どうかさうおつしやらずに。でないとわたしは助かりません。後生ですから助けて下さい。

ベルタ　そんなにひどく困つてゐるのですか。

ハル夫人　それをまた疑つていらつしやいますか。

ベルタ　ぢやあお金を上げませう。〔算筒の方へ行く〕二十、三十、六十、八十と。二十不足になるわ。何につかつたのだらう。ふん。朝飯だ。〔家計簿に記入する〕二十フラン、繪具。二十フラン、雜費。——さあ。

ハル夫人　ありがたうございます、奥さま。有がたうございます、オルンドの奥さま。

ベルタ　さあ、それではけふはわたし暇がないのですからね。ぢやあさやうなら、もうわたしにまかせておくがいゝのよ。

ハル夫人　〔あやふやに〕まあちよいと。

ベルタ　いゝえ、もう歸つて下さい。

ハル夫人　ちよいと待つて下さいよ。だがわたし何といふつもりだつたらう。——まあどうでもいい——。〔出て行く〕

第十一景

ベルタ〔一人。間もなく〕アクセル。

なかま同士

ベルタ〔夫の歸つて來た足音を聞き、綠色の手紙をかくしに入れる〕

ベルタ　おや、もう濟んで。逢へて、奥さんか――御主人に。

アクセル　主人には逢はない、細君に逢つて來た。その方がよほど都合が善かつた。ベルタ、お目出度う。お前の靈はとうにはいつてゐるぜ。

ベルタ　あら。まあ何ですつて。そしてあなたのは。

アクセル　まだ分からない、だがどうせこんども通るには極つてゐるさ。

ベルタ　きつとさうかしら。

アクセル　勿論さ……

ベルタ　あらわたしの靈は取られたのだ、嬉しいわ。嬉しいわ。でもわたしにお祝ひを言つて頂戴よ。

アクセル　もうそれは言つたぢやないか。わたしはたつた今お目出度うと言つた筈だぜ。とにかく熊を射落すまで毛皮を賣つてはならないのだ。サロンにはいるなんてことも實は下らないことさ。偶然だもの。言はゞ名前の頭文字次第で極るやうなものだからね。お前は名前をフランス流に書いたので、Oの組になつてゐる、ところで審査はMから始めるといふものだから、大變都合よく行つたのだ。

ベルタ　ぢやあ、あなた、わたしがはいつたのは名前がOで始まつてゐるからだとおつしやるの。

アクセル　まさかそれだけだとは言はないがね。

ベルタ　ぢやあ若しあなたがはねられるとしたら、あなたの名前がAで始まつてゐるからだと、さういふわけなのね。

アクセル　強ちそればかりとはいはないが、幾分かそんなこともあらうといふものだ。

ベルタ　さあ、それでわたしわかりました。あなたは世間の人が考へてゐるやうに立派な人ではないのですね。あなたはやきもちやきなのね。

アクセル　どういふわけでわたしはやきもちをやかなければならないのだ。實際わたしはまだ自分がどうなつてゐるか、まるで知らないのだ。

ベルタ　でもあなたがそれを知つたら。

アクセル　何だと。

ベルタ　〔手紙を突き出す〕

アクセル　〔左の脇腹の所をおさへて椅子にべつたり坐る〕何だ。〔氣を取り直す〕それはわたしの待ち設けない打擊だ。こりや全く情ない。

ベルタ　さあ、今こそわたしはあなたを助けて上げることができるのですよ。

アクセル　ベルタ、お前は嬉しさうだな。あゝ、わたしの腹の中にはお前に對する大きな憎みがわ

き立つて來るやうだ。

ベルタ　そりやあわたしは成功したのだから、嬉しさうに見えもしませうよ。でも人といふものは、お互の幸福を喜ぶことの出來ないやうな人と一緒になつてゐると、ついその人の不幸にも同情するのが厭になるものですよ。

アクセル　わたしはなぜだか知らないが、かうしてゐるとわたし達は敵同士にならなければならないものゝやうに思はれて來るのだ。どちらが勝つか敗けるかの戰鬪がお互の間に破裂したのだから、わたし達はもう友達にはなつてゐられないのだ。

ベルタ　あなたは優勝者が戰鬪に勝つたのが分かつたのに、あなたの正義心はそれに屈することが出來ないのね。

アクセル　お前は優勝者なぞではありはしないのだ。

ベルタ　でも審査員はそれを發見したのでせうよ。

アクセル　審査員が。だがお前はわたしより拙い畫をかいたといふことは知つてゐるはずだ。

ベルタ　でもきつとさうでせうか。

アクセル　勿論極つた話だ。だがお前はわたしより數等都合のいゝ境遇でしごとをしたといふだけだ。お前には職業上の爲事といふものがない。お前はアトリエに通つた、モデルも使つた、そしてお前は女なのだ。

ベルタ　それはそのとほりよ、こんどはわたしがあなたに扶養されてゐることを非難なさるのでせう。

アクセル　さうさ、わたし達の間だけでは。だがお前が出かけて行つてそれを話さない限り、世間は知らないことなのだ。

ベルタ　あゝ、世間はもう知つてゐますよ。でもなぜあなたのお仲間が、男のお仲間が、ろくでもない作を出して、それがはいつたといふ場合に煩悶なさらないでせう、伺ひたいものね。

アクセル　そのわけはわたしも考へて見よう。さうだ、おい、わたし達はこれまでお前達女に對しては、單なる感情を離れて、批判を以てのぞむといふことがなかつた。從つてお互の境遇に對して考察したことはなかつたのだ。さあ、ところで今こそわたしはしみ〴〵感じて來たことだが、わたし達は決して仲間ではない。仲間としてお前達が何の頼りにもならぬといふことをわたしは痛感してゐる。仲間といふ以上、大なり小なり信義のある競爭者であるのに、わたし達は始めつから敵同士なのだ。わたし達が鎬を削つてゐる最中に、お前達は藪の蔭にねころんでゐる。そしてわたし達が食卓を用意した時分には、お前達はもとからこの家の人のやうな顏をしてぬくぬくと坐り込むのだ。

ペルタ　つう、下らない。わたし達はついその戰の仲間にはいることを許されたでせうか。

アクセル　お前達はいつでもそれを敢へてし得たのだ、けれどもそれをしようとしなかつた。若しくはし得なかつたのだ。例へばお前の侵入して來たわたし達畫家の領分で言つても、お前達がそこへはいるまでに技術の方はとうに發達するだけ發達して、わたし達の手で完成せられてしまつてゐるのだ。そして今頃お前達は何百年かゝつた爲事を、アトリエから一時間十フランで買つてゐる、しかも、わたし達がしごとで得た金で買つてゐるのだ。

ペルタ　アクセルさん、かうなるとあなたは爪の垢ほども品のいゝところがなくなつたわ。

アクセル　いつわたしが品をよくしてゐた。さうだ、わたしがお前に古靴のやうに踏みにじられてゐた時には……けれども今はお前がわたしに勝つたとすると、もうわたしもお品を作つてはゐられない。おい、こんどの不幸はすでにわたし達の經濟的の地位を變へたのだよ。わたしはもう畫をかかうとは思ふまい、わたしは生涯の夢想を棄てゝ、ほんたうに製圖師になつてしまはうよ。

ペルタ　そんな必要はありませんわ。わたしは自分の畫が賣れるやうになれば、自然自分のくらしは立てますもの。

アクセル　ところで全體――わたし達の結んだ夫婦關係といふものはどういふものなのだ。夫婦關係といふものは、共同の利益の上に共礎を置かなければならないはずだのに、わたし達の關係は反對の上に成り立つてゐる。

ペルタ　そんなことはあなた一人でくよ〳〵考へていらつしやるがいゝわ。わたしは今からお晝を食べに出かけて來なくてはなりませんから。あなた一緒にいらつしやるか。

アクセル　いや、わたしは一人でくよ〳〵物を考へてゐるよ。

ペルタ　そしてわたしはこん度のお祝ひに、大勢人を集めなくてはならない。――ほんたうなんですよ、わたし達は今夜、このあなたのお内で會をしようと思ふの。いけないこと。あなたがふさぎこんでいらつしやるところだから。

アクセル　あまり愉快ぢやないよ、だが結構なことには違ひない。まあ來て貰ふさ。

ペルタ　〔外出の支度をする〕　でもあなた内にいらつしやらなくてはだめよ、でないと、あなた卑怯に見えますよ。

アクセル　わたしは内にをりますよ。御安心なさい。――だが出かける前に金を少し置いていつておくれ。

ペルタ　金箱は空だわ。

アクセル　空だつて。

ペルタ　えゝ、お金もおしまひになつたのだわ。

アクセル　お前、わたしに十フラン貸してくれないか。

ベルタ　〔財布を取り出す〕十フラン。えゝ。いゝわ。そのくらゐならわたしだつて持つてゐる。さあこれ。一緒にいらつしやらなくつて。なぜ。人が變に思ふかも知れないわ。

アクセル　征服せられた獅子が凱旋の馬車の前で踊を躍るのかい。まあ、いやだね。わたしも晩の芝居でする役を研究するには少し時間が入用だ。

ベルタ　ぢやあ行つて來ますわ。

アクセル　うん、行つておいで。ベルタ。わたしはお前にお願があるがねえ。

ベルタ　何なの。

アクセル　酔ツ拂つて内へ歸つて來るなよ。けふはとり分けいつもよりわたしには辛抱がならないのだから——

ベルタ　わたしがどんなにして歸つて來ようとも、あなたのかまつたことぢやないわ。

アクセル　だがお前もわたしの姓を名乘つてゐる以上、お前に對しては親類のやうな、連帶責任を感ずるからねえ。それに殊さら酔ツ拂つた細君なんといふものは、嬉しいものぢやないからな。

ベルタ　なぜ酔ツ拂つた男よりもいやなんです。

アクセル　さう、なぜだらう。きつとお前達には容子を變へずにゐることなぞは出來ないからだ。

ベルタ　さやうなら、おしやべりやさん。ぢやああなた、一緒にいらつしやらないのね。〔出て行く〕

アクセル　〔立ち上がり、上着を脱いでほかのと着替へようとする〕いやだ。

第二幕

前幕と同じ飾り付。部屋の中央に大卓、これを圍んで椅子數脚。卓の上には筆墨紙、司會者用の槌などが置いてある。

第一景

アクセル〔坐つて畫をかく〕。アベル〔その傍の椅子に倚つて煙草をふかしてゐる〕

アクセル　で、あれは食事をしまつて、今はカフェーで飲んでゐるのですね。よほど飲んだやうですか。

アベル　えゝもう。ベルタさんはあんまりはしやぎすぎて不機嫌になつたのですよ。

アクセル　ねえ、アベルさん、一言わたしに言つて下さい。あなたはわたしの友達ですか、さうぢやないのですか。

アベル　さあねえ、わたし存じませんわ。

アクセル　わたしはあなたを信任していゝでせうか。

アベル　いゝえ、そんなことはいけませんよ。

アクセル　なぜいけないんです。

アベル　なぜだかそんな風に思はれますもの。

アクセル　アベルさん、あなたは男子のやうな理解力を持つてゐられるから、あなたとなら理解のある話もできよう。ねえ、一體婦人であるといふことはどんな感じのするものでせうね。實際それはよほど厭なものでせうか。

アベル　〔冗談のやうに〕えゝ無論ですわ、まるで黑ん坊に生れて來たやうな氣がしますわ。

アクセル　どうも妙だな。ねえアベルさん——御承知でせうが、わたしは正義公道といふものに對しては劇しい熱情をもつてゐるのです。

アベル　えゝあなたは熱狂家ね——それがためにあなたは何かぐうまく行かないのよ。

アクセル　ところがあなたはまた感情がないから——なにかぐうまく行つてゐるんでせう。

アベル　全くね。

アクセル　アベルさん、あなたは實際一度も男子を愛する必要を感じたことはありませんか。

アベル　まあ馬鹿な。

アクセル　嘗てさういふ男に出逢つたこともありませんか。

アベル　えゝ。男といふものは少ないものですわ。

アクセル　へえ、ぢやあわたしは男ぢやありませんか。

アベル　あなたが――えゝ。

アクセル　でもわたしはそのつもりでゐますが。

アベル　あなたが男ですつて。女のために働いて、女のやうなみなりをして歩いてゐるあなたが。

アクセル　わたしが女のやうなみなりをしてゐるといふのは。

アベル　さうでせう、ベルタさんは却つて髪を斷つて立襟の服で歩いてゐるのに、あなたは髪をちぢらして、領を拔いていらつしやるぢやありませんか。お氣をお注けなさい、あの人は今にあなたのズボンをとらせますよ。

アクセル　何を、くだらない。

アベル　それにあなたが御自分の家での境涯は何といふことでせう。あなたは奥さんにお金を貰ひ、奥さんに監督されてゐるではありませんか。えゝ、あなたは男ぢやありやしない。尤もそれだからまたあの人も、困り切つてゐた時に、あなたを相手に選んだのです。

アクセル　あなたはベルタを憎んでゐますね。何かあれに對して不快なことがあるのですか。

アベル　存じませんわ。けれどもわたしもやつぱり正義に對する熱情なんてものを持ち合せてゐる仲間かもしれない。

アクセル　どうです、あなたは女の大役といふもののあることを信じませんか。

アベル　時々は考へることもあるし、考へないこともあるでせう。時々はわたしもやはり昔からの事が一ばん善かつたかとも思ひますよ。母親になればわたし達もまだ名譽も尊敬もうける身分になれますわ。それだけで市民といふ義務も盡せるし、家の中では獨裁權が揮へるし、子供の教育だつて、さうけしてはづかしいしごとではないのですもの。――アクセルさん、コニャックを一杯頂戴な。隨分おしやべりをしてしまつた。

アクセル　〔コニャックを與へる〕なぜ飲むんです。

アベル　存じませんわ。どうもむしやくしやするのですよ。

アクセル　で、一體どうすべきだといふのです。

アベル　夫は妻を支配しなければなりません。

アクセル　そしてもしあなたがさういふ男を見付け出したとしたら。

アベル　その時にはわたしはその男を――愛するといふことになるでせうよ――でもまあ一體あれだけのさわぎをして、むだときまればどうするでせう。

アクセル　なあに、どんなことにでも、やはりそれがための運動は起るものですよ。

アベル　えゝ、前だ後だと隨分たくさんの運動が行はれますのね。多數をさへ占めれば、馬鹿のためにさへ運動は成立するんですから。

アクセル　それがさうなら、忌々しい何の役にも立たないことに空騒ぎをしたといふものです、なぜといつて、もう今ではそれがため殆ど生活が不愉快になりましたもの。

アベル　わたし達はあなた方の頭をかきまはすために騒いでゐるのですよ。それだけですわ。――ところで、アクセルさん、ベルタさんが商賣をするやうになつたから、あなたもこれからは境遇がらくになるでせうよ。

アクセル　商賣をした。それは畫を賣つたのですか。

アベル　あなた御存じないの。林檎の樹をかいた小さい畫をね。

アクセル　いゝや、そんな話はぷつりともしませんでした。いつです、それは。

アベル　をととひよ。あなた、それを御存じないの。まあ、ではあの人はそのお金であなたを驚かすつもりなんですよ。

アクセル　わたしをですつて。あの女は自分で財布尻を握つてゐるのですよ。

アベル　さう。ぢやあきつと――しいツ、歸つていらしつたわ。

ベルタ、入つて來る。

第二景

前景の人々、ベルタ。

ベルタ　〔はいつてくる。アベルに〕おや、今晩は。あなた、ここにいらしつたの。なぜさきに行つてしまつたの。

アベル　退屈になつたのですもの。

ベルタ　えゝ、さうでせう、他人と一緒に樂しむといふことは愉快なものではありませんからね。

アベル　まあそんな。

ベルタ　あなた、お内に坐り込んで大變御勉强ですのね。

アクセル　あゝ、坐り込んで繪具をなすつてゐますよ。

ベルタ　どれ、わたしが見てあげませう。綺麗にかけたわ。けど左の腕が長すぎるわ。

アクセル　さう思ふかい。

ベルタ　思ふかつて。それに違ひないわ。ちよつと貸してごらんなさい。……〔夫の手から畫筆を取り上げる〕

アクセル　いけない、よせ。あつかましい。

ベルタ　何をそんなにおつしやるの。

アクセル　〔立腹する〕恥をしれといふに。〔立ち上がつて〕お前、わたしに畫を敎へるつもりか。

ベルタ　なぜいけないの。

アクセル　お前がわたしに教はることはできても、わたしがお前から習ふことは何もないのだ。

ベルタ　主人といふものは細君を隨分無遠慮に取扱ふものなのねえ、だが尊敬といふことを知らなくては……

アクセル　おや、ベルタ、お前もやつぱり時勢おくれの女だな。男と女が同權にならねばならないといふ時に、一體どういふ特別な尊敬を夫は妻に對して負はねばならないのだい。

ベルタ　ぢやあそれだからあなたは、夫が妻に對して亂暴を働くのが正當だとおつしやるの。

アベル　さうよ、妻が夫に對してあつかましいまねをした時には。

アクセル　嗔嘩は止しなさい、女ども。

アベル　何て言葉をおつかひになるの。

アクセル　おや、女どもといふのが不都合な言葉になつたとは知らなかつた。それとも女といはれることが恥づかしいのかしらん。――おい、ベルタ。これからはわたし達の家政にも變化が起るだらうと思ふから、家事の一通を心得て置きたいのだ。どうか家計簿を見せてもらひたい。

ベルタ　あなたの靴がはねられた、それが高尚な復讐なんですね。

アクセル　復讐とは何だ。家計簿とわたしがサロンで失敗したことに何の關係があるのだ。算筍の鍵をよこせ。

ベルタ　〔かくしを搜る〕お待ちなさいよ。――ふん。――だが不思議だねえ、今しがた在つたと思つたのに。

アクセル　探して見ろ。

ベルタ　あなた、命令するやうな調子でいふのね。それが氣に入らないわ。

アクセル　鍵を搜しなさい。

ベルタ　〔部屋の中を探し廻る〕まるでわけが分からないわ――どこかへ行つてしまつたのよ。わたしには見付からない。きつとなくしてしまつたのだよ。

アクセル　たしかにそこに無いのかい。

ベルタ　たしかにないわ。

アクセル　〔呼鈴を押す〕

間。

第三景

前景の人々。女中〔あらはれる〕

アクセル　錠前屋を呼んでおいでなさい。

女中　錠前屋でございますつて。

アクセル　錠前屋だよ。錠を開けてもらふのだ。

女中　〔ベルタに一瞥を投げる〕はい、只今。〔出て行く〕

第四景

前景の人々。〔女中を缺く〕

アクセル　〔上着を着かへる。勳章の綬をとつて卓に投げ付ける〕どめんなさい、奥さん。

ベルタ　〔しとやかに〕どう致しまして。お出掛ですか。

アクセル　あゝ。出掛けます。

ベルタ　會にはゐて下さらないの。

アクセル　さやう、どらんのとほりさ。

ベルタ　さう、でも皆さんに失禮だとお思ひはなさらなくつて。

アクセル　御免蒙らうよ。わたしはお前達の馬鹿話を謹聽してゐるよりか、もつと大事な用事がある。

ベルタ　〔不安に〕どこへあなたは行かうといふの。

アクセル　それに就いては、わたしはお前に何の責任をも負ふ必要はないのだ。わたしもまたお前がどこへ出掛けようと、決して聞きたゞしたゞはしないのだ。

ベルタ　でもあしたの晩、謝肉祭のお客に人を呼んであることをお忘れにはならないでせうね。

アクセル　お客か。それに違ひない。あしたの晩か。ふん。

ベルタ　今更もう斷るわけには行かないわ。エステルマルクさんもカルルさんもけふ見えたから、來てもらふやうに賴んで置きました。

アクセル　なほさら結構。

ベルタ　だから早く歸つていらつしやいよ、あなたの衣裳の着試しをして見るのだから。

アクセル　わたしの衣裳。はゝあ、なるほど。わたしも女の役を演じなくつてはならないのだね。

第五景

前景の人々と女中。

女中　〔かへつて來る〕あの、錠前屋は只今ちよつと手放せない用があるさうで、一二時間の中には參るさうでございます。

アクセル　手放せない。——さうか。さうしてゐる間には鍵がひとりでに出て來るわ。とにかくわたしはすぐ出て來なくてはならない。ぢやあ行つてくる。

ベルタ　〔おだやかに〕ぢやあ行つていらつしやい。遲くならないうちに歸つていらつしやいね。

アベル　〔アクセルに目禮する〕

なかま同士

アクセル　どうなるか自分でも分からない。ちやあ行つて來る。

第六景

アベルとベルタ。

アベル　あなたんところの旦那様はなんて氣むづかしい人なの。

ベルタ　なんて恥知らずでせう。わたし、こんな風では、あの人をもうわたしの足もとに匂ひつくばはさせるまでに小ツぴどく、抑へ付けてやらうといふ道樂氣がおこらないものでもないわ。

アベル　えゝ、あの人サロンでつツかへされてもまだ十分性がつかないらしいのねえ。「喧嘩は止しなさい、女ども。」なんて、まるツきり舊式だわ。ねえベルタさん、あなたは一體あのお馬鹿さんを愛したことがあつたの。

ベルタ　愛した。えゝそりやあ好きでしたわ、かはいらしい人だつたのですもの。けれどあの人は馬鹿よ、そして――あの人に一人前の男らしくふるまはれると憎らしくなるわ。考へてもごらんなさい、世間ではもうあの人がわたしの畫の代作をしたなんて噂を立てゝゐるのですよ。

アベル　そんな噂がぱつとするやうだつたら、一番辯明しなくてはなりませんね。

ベルタ　でもどうしたらいゝか分からないんですもの。

アベル　わたし智慧を搾つて見るわ。さうね、かうつと――あゝさうだ。あしたの晩もしあの人の畫が戻されて歸つて來たらね、ちやうどお客の集つたところへ持つて來させるのよ。

ベルタ　いゝえ、それでは何だかわたしが勝利を見せつけるやうになるわ。あんまり殘酷だわ。

アベル　だめねえ、わたしならやるのだけれど。さもなきやガガさんを使ふの、そんならまだいゝでせう。アクセルさんの名であの畫をとりに遣るの、どうせあの畫だつて一度はこの家へ來るのでせう、あの畫がはねられたといふことは秘密ではないのだから。

ベルタ　えゝ、でもね……

アベル　何がさ。あの人がいゝ加減な噂をまいて歩くのだから、あなたもそれに應戰する權利は十分あるわ。

ベルタ　わたしもそれはさうしたいのだけれど、わたし自分でこの事件に關係するのは厭ですわ。わたしはそんなことから綺麗に離れてゐて、わたしの無實なあかしを立てたいと思ふの。

アベル　でもそれはあなた自分でしなくてはだめよ。わたしが一切引きうけるから。

ベルタ　何と思つて、さつきあの人は家計簿をよこせといつたんでせう。これまであの人がそんなことを言つたことはないのよ。何かそこには企みが秘んでゐるのね。

アベル　それは分かつてゐるわ。あの人はあなたが畫でとつた三百フランのお金を收入の部につけておいたかどうか見たいと思つたのでせう。

ベルタ　何の畫を。

アベル　ルーベイ夫人に賣つた畫さ。

ベルタ　どこからあなた、そんなことを聞いていらしつて。

アベル　そんなことは誰でも知つてゐるわ。

ベルタ　そしてアクセルも。

アベル　えゝ、わたしそれをつい何の氣なしに言つてしまひました。あの人は知つてゐるんだらうと思つたから。それをすぐあの人に話さないなんて、ひどくまづいやり方だつたわね。

ベルタ　わたしが畫を賣つたといふことをあの人は何とか思ふでせうか。

アベル　えゝ〳〵それはきつとね。むろんでせう。

ベルタ　さう、でももうこの以上にあの人の機嫌を損ねるやうなこともないでせうよ、なぜといつてあの人はもうわたしがサロンにはいつたといふことで十分苦しまされたあとだから。

アベル　やかましく言ひ立てれば、あの人はあなたの收入に對して何の權利もないわけよ。あなたがたは結婚の際の契約があるのだから。だからあなたは見本にやつて見るだけにしても、あの人を抑へ付ける丈の理由は何から何まで備はつてゐるわけよ。今夜あの人がお說法を持ち出して來ても、あなたはしつかりしていらつしやいよ。

ベルタ　えゝ、わたしはあの人をどう取り扱はなければならないかよく知つてゐますわ。けれどまだ外のことがある。あのエステルマルクの事件はどうしたらいゝでせうね。

アベル　エステルマルク、あゝあれこそ、どこまでもわたしの向ふにまはるものです。あの男はわたしに任せて下さい。あの男とわたしとは、お互昔の勘定を濟まさなくちやならないのだから。まあ安心していらつしやい。あの人のことはわたし達だけで片がつきますよ。理窟はわたし達の方にあるのだから。

ベルタ　ではどうするつもり。

アベル　わたし達はいはゆる原被兩造の對決をやつて見るつもりです。

ベルタ　それはどういふことなの。

アベル　ハル夫人を娘と一緒に呼んでごらんなさい。そのあとであの人がどんな顏をするか見るやうだわ。

ベルタ　いゝえ、わたしの内で騷動は眞ッぴらよ。

アベル　なぜいけないの。あなたはかういふ立派な勝利を冗談にしてしまはうといふの。戰爭となれば敵を殺さなければならないわ。怪我をさせるだけではだめよ。今は戰爭なんですよ。だから。

ベルタ　えゝ、でも十八年も別れてゐた父親と妻子でせう。

アベル　それを會はせるのよ。

ベルタ　アベルさん、あなたは恐い人ねえ。

アベル　わたしあなたより少し強いだけよ。結婚してあなたは氣が弱くなつたに違ひない。一體あなたはあたり前の夫婦らしくやつて來たの。

ベルタ　何を馬鹿をいふの。

アベル　あなたはアクセルさんを怒らせたし、あの人を足で踏み付けたわ。けれどあの人はまだあなたの踵を衝くこともできるのよ、かういふ風に。

ベルタ　あなた、あの人がまだ何かやりえるだらうと思つて。

アベル　あの人も歸つて來たら、きつと一騒ぎ持ち上げるでせうよ。

ベルタ　あゝ、わたしもうあの人を逐ひ出してしまはう。

アベル　まあそれができたらね。何しろ鍵がどうしたとかつて馬鹿々々しいわ。餘り馬鹿々々しいわ。

ベルタ　あれは馬鹿々々しかつたかも知れないわね。けれどあの人は外へ出て風に當つて來れば、それでもういい子になるのよ。あの人の氣ごころはわたしよく知つてゐる。

第七景

前景の人々。小間使〔包をかゝへてはいつてくる〕

女中　旦那様のお召を使が持つて參りました。

ベルタ　おや、さう。こちらへおよこし。立派だこと。

女中　けれどこれは奥さまにちやうどおよろしうございますね。女の服でございますよ。

ベルタ　いゝえ、それでいゝのだよ。これは旦那様のだよ。

女中　まあ、さう致しますと、旦那様もやはりスカートを召すやうになりますね。〔出て行く〕

ベルタ　〔卓の傍に行きかける〕　なぜいけないのさ、わたし達だつてスカートを着けてゐるぢやないか。もう行つとくれ。〔包を開き、イスパニヤ風の婦人服を取り出す〕

アベル　でもうまく思ひ付いたわね。まあ、あのお馬鹿さんに復讐するにはもつて來いだわ。

第八景

前景の人々。ウイルメル〔包をかゝへた一人の男なつれて出て來る〕

ウィルメル　〔黒の燕尾服に白い領、鈕の穴に花を挿す。半ズボン、赤いネクタイ、襞の入つたカフス〕今晩は。おや、あなた方ばかりですか。――さあ、これが蠟燭、これが壜だ。シャルトルーズ（酒の名）に苦蓬（にがよもぎ）が二つ。煙草も二箱、それからまだいろ〳〵あります。

ベルタ　ガガさん、あなたは氣の利いた若い衆だわ。

ウィルメル　それからこれが受取ですよ。

ベルタ　受取。あなた、また立替へて下すつたの。

ウィルメル　えゝ、それはいづれ勘定しませうよ。それよりか早くして下さい、老人連がやつて來ますよ。

ベルタ　蠟燭の方の始末はわたしがしますから、あなた後生、堰の口を抜いて下さいな。

ウィルメル　よろしいとも。

ベルタ卓の所で蠟燭を入れた箱をあける。ウィルメルそのそばで、堰の上包の紙をはがす〕

ベルタ　だいぶ家庭的だわね。ガガさん、あなたは立派な旦那様になれさうだわ。

ウィルメル　〔腕をベルタの頸にかけ、項に接吻する〕

ベルタ　〔くるりと身をかはして耳打をくはせる〕何を失禮な眞似をするの。百姓小僧、恥を知らないにも程があるぢやありませんか。

アベル　ガガさん、さういふものがお望みなら、まだいくらでも上げるものがありますよ。

ウィルメル　〔激怒して〕百姓小僧だと。あなたはわたしが何だといふことを知らないのか。わたしが有名な文學者であるといふことを知らないのか。

ベルタ　何ですつて。ろくでもない三文文士のくせに。

ウィルメル　わたしが虐げられた女性のために書いてゐた時分には、三文文士でもなかつたね。

ベルタ　あなたはわたし達のおしやべりすることをそのまゝ書く、それつきりのことぢやないか。

ウィルメル　まあ、さうやつて脅かすつもりなのかい、お前さんを陷れようと思へば出來るはずだ。

ベルタ　氣を注けなさい、ベルタ。わたしはお前さんを陷れようと思へば出來るはずだ。つまみ上げて、一思ひに芋刺にしてやりたいわ。

アベル　ベルタさん、考へて物をおつしやいよ。

ウィルメル　さうさ、わたしは君達の小狗だつた、君達の裾にじやれてゐた小狗だつた。だが小狗は咬むこともできるぞ。

ベルタ　お前さんのその齒を見せてもらひたい。

ウィルメル　よし、その齒にさはらしてやるぞ。

ベルタ　さう。ぢやあさはらしておくれ。さあさはらしておくれ。

アベル　でもまあ落ち着いて頂戴、今に後悔してもおつゝかないことになるから。

ウィルメル　〔ベルタに〕夫のある女のくせに、若い獨身者から贈物をもらつてゐたといつたら、世間は何といふか。

ベルタ　贈物だつて。お前さん、棒が飛ぶのよ。

ウィルメル　二年ごしお前さんはわたしから贈物をうけてゐたらう。

ベルタ　贈物だつて。しよつちゆうわたしのスカートにぶら下がつてゐたごろつき野郎のくせに。なんのお前さん一人位片づけてしまへないと思つてゐるの。

ウィルメル　〔肩ゑ聳かす〕まあ、やれるものならね。

ベルタ　あなたは婦人の名譽に傷をつけようとなさるの。

ウィルメル　名譽だ。ふん。とにかくお前さんがわたしほどの男に亭主にいひつける日用品を買ひにやらせただけでも名譽に違ひない。

ベルタ　畜生、わたしの内から出てくれ。

ウィルメル　わたしの内だと。仲間同士なら錢勘定なぞをやかましく言ふのぢやないが、敵同士となりや一厘だつて勘辨はしないぞ。お前さん、金を拂ふ用意をしておくがいゝぜ――ばいため、覺えてゐるがいゝ。〔出て行く〕

第九景

ベルタ。アベル。

アベル　ベルタさん、あなたはとんだ馬鹿なまねをするわね。友達を敵に廻すなんて危險ですわ。

ベルタ　まあ、成るやうに成らせるがいゝわ。あの男はよくもわたしに、接吻しようとした。あの男はよくもわたしに、女だといふことを思ひ出させた。

アベル　ねえ、わたし思ふわ、それは同時に男といふものを思ひ出させるものではないかしら。あなたは火いたづらをしたのだわ。

ベルタ　火いたづらを。ぢやあ男と女が仲間になつて共同の生活を營めば、きつと火を出すにきまつたものかしら。

アベル　えゝ、それは兩性といふものゝある限り、いつだつてそこに火の手はあがるものなんでせうよ。

ベルタ　さうね、けれどもさういふことはもう止さなければならないのよ。

アベル　えゝ――よさなければね――まあ、やつてごらんなさい。

第十景

前景の人々。女中。

女中　〔來る。笑をかみころしてゐる〕あの外に――女の――女の方がいらつしやいました――リヒャルト――リヒャルト――ワールストリョームさんとかおつしやつて。

ベルタ　〔扉口に行く〕あゝリヒャルトが來た。

アベル　さあ、それでは開會としませうね。――そこで、いよ〳〵あなたのもつれた糸をほどく段

になりましたわ。

ペルタ　うまくほどけるか、断ちきつてしまうか。

アベル　さもなければこんぐらかつたまゝでおくか。」

第三幕

前幕と同じ飾り付。吊りランプには明りが點つてゐる。畫室の窓の外には月光。切込煖爐に火がある。

第一景

ペルタと女中。ペルタはレース編みの朝着を着て、イスパニヤ風の女服を縫つてゐる。女中頸飾の襞をつけてゐる。

ペルタ　かうしてじつと坐つて主人の歸りを待つてゐるといふのは、隨分辛いものだねえ。

女中　でも奥様、それは旦那様がじつと内に坐つて、奥様のお歸りを待つていらつしやるはうがよつぽどお辛うございませうよ。旦那様が今ごろお一人で外に出ていらつしやるのは、今夜が始めてゞございますもの。……

ペルタ　ちよいとお前、旦那様は内に一人でいらつしやるときには、一體何をしておいでだい。

女中　坐つて板ツきれへ繪具を塗つていらつしやいます。

ペルタ　板ツきれへ。

女中　えゝ、旦那様は畫をかいた板ツきれを澤山持つていらつしやいますよ。

ペルタ　ふん。イーダや、ちよつと聞くがね。旦那様はお前に向つて何かうるさいことをなさりや

しないかい。

女中　いゝえ、けして。えゝ、それはもうお堅くつていらつしやいますもの。

ベルタ　きつとだらうね。

女中　きつとですとも。

ベルタ　一體、何時だね。

女中　もうかれこれ十二時半すぎたでございませう。

ベルタ　さうかい。ぢやあ、お前お休みよ。

女中　でも奥様はこんないろ〳〵取りちらした中に一人いらしつて、こはくはございませんか。

ベルタ　こはくはないかつて——しいツ、門が開いたやうだ。さあ、いゝから行つてお休み。

女中　では奥さま、お休みなさいまし。〔出て行く〕

第二景

ベルタ　〔一人爲事をやめて、ソファーの上によりかゝり、朝着の襞を直す。それからまた立ち上がり、ラムプの心を半分絞くして、再びソファーの上に横になつて寢る振をする〕

間。やがてアクセル、はいつて來る。

アクセル　誰かゐるかい。——おや、ベルタ、お前ここに居たのかい。

ベルタ　〔默つてゐる〕

アクセル　〔妻の傍に寄る〕

ベルタ　〔優しく〕まあ、あなたでしたの。お歸んなさいまし。わたし、今ちよつと横になつてとろとろとしたのよ、さうしたらいやな夢を見てねえ……

アクセル　嘘をお言ひでない、わたしは庭の窓からお前が椅子に横になるところを見てゐたのだ。

ベルタ　〔飛び上がる〕

アクセル　〔靜かに〕寢間着姿で誘惑の場を出すのは止して貰はう。お芝居をするのは止めて貰はう。まじめになつて聞いて貰ひたいことがあるのだ。〔部屋のまん中の椅子に掛ける〕

ベルタ　その聞いて貰ひたい事つて何です。

アクセル　山ほどある。だが、結論から先へ言つておく。わたし達はこのくつゝき合ひのやうな夫婦關係を叩きこはしてしまはなきやなるまいよ。

ベルタ　何ですつて。〔仰向にソファーに倒れる〕あゝ、いやだ、死んでしまひたい。

アクセル　ヒステリーはごめんだよ、でないと頭から水をぶつかけるぜ。

ベルタ　わたしが天下晴れての戰であなたに勝つたその復讐にそんなことをするのね。

アクセル　さういふことはこゝには何の關係もないことだ。

ベルタ　あなたはわたしをまるで愛してはゐなかつたのね。

アクセル　どうして、わたしはお前を愛してゐないどころぢやない、わたしに取つてはそれがお前と結婚した唯一の動機なのぢやないか。けれどもお前はなぜわたしと結婚したのだらう。何でもない、お前は工合の悪い時だつたからだ、萎黄病にかゝつてゐた時だからだ。

ベルタ　こんな話をしてゐるところを誰も聞いてゐないからまだしも爲合せだわ。

アクセル　どうして、誰かに聞かれたつて何が不爲合せなものか。わたしはお前を仲間同士として取扱ひ、無限の信任をお前に與へてゐた。それがためには可なりな犠牲を拂つてゐたことはお前も知つてゐるだらう——それはさうと錠前屋は來たかい。

ベルタ　いゝえ、來なかつたわ。

アクセル　もうそれも必要はない。わたしはお前の小遣帳を見てしまつたから。

ベルタ　ぢやああなたはわたしの帳面の中を嗅ぎ廻つたわけなのね。

アクセル　家計簿といふものは共同なものだ。お前は支出を間違へてつけてゐるし、收入でつけおとしたものがある。

ベルタ　さうかも知れませんよ、何しろわたし達は學校で簿記を習ひませんでしたからね。

アクセル　わたし達だつてさうさ。それに教育といふ點ではお前の方がわたしより數等立派な教育をうけてゐるのだ。お前はセミナリーにも入つたが、わたしは小學校をやつただけだ。

ベルタ　でも本で教はらないことが——

アクセル　そりやあ、母親が教へるのさ。だが不思議だね、母親は娘に正直な女になるやうに教へる事は出來ないのだ。

ベルタ　正直な女に。でも統計上大抵の罪人は男の人達の中から出るやうだわね。

アクセル　大抵罰を受けるものは、といふ方がいゝ。だが百人のうち九十九人まで、男の罪人は裁判官に向つて Où est la femme? (ウー・エ・ラ・ファンム 女はどこに) ときくことができるのだ。——けれどまあ——お前の話に戻らう。ところでお前はこれまで始終わたしに嘘をつきとほしてゐて、とう〳〵しまひに詐欺をはたらいた。例へていふと、マルゲリーで二十フランの朝飯をしたのに、二十フランの繪具とついてゐる。

ベルタ　それは違つてゐるわ、あれは十二フランしきやかゝらなかつたわ。

アクセル　それ見ろ、もう八フラン懐にくすねてゐるのだ。——次にお前の靈を賣つた代の三百フランがつけてない。

ベルタ　『婦人獨力にて得たるものは、また單獨にこれを處理し得』とわたし達の法律に書いてあるのだわ。

アクセル　さういふのがパラドックスといふのではないか。偏執狂といふのではないか。

ベルタ　いゝえ、さうではないわ。

アクセル　よし、もうわたし達は小さなことをぐづ〳〵言ふのは止さう、お前はお前自身の收入を處理する、それからお負けにわたし自身の收入をも、無責任なやり方で處理して來た。ところでお前は――仲間同士の間でゐながら――わたしに畫を賣つたことを話すべきだとは思はなかつたかい。

ベルタ　それはあなたに關係したことではないわ。

アクセル　わたしに關係したことぢやない。さあ、それであとはいよ〳〵離婚の要求をもち出す用件だけになつた。

ベルタ　離婚の要求ですつて。あなた、わたしが離婚された女の恥を背負つて歩きまはれるものと考へてゐるの。あなたはわたしが行李一つで出される女中か何ぞのやうに、手輕にこの家を追ひ出せるものと思つてゐるの。

アクセル　わたしはやらうと思へばお前を往來へ叩き出すこともできるのだ、けれども人情のあるやり方をとつて、不和合といふことに離婚の理由を求めようと考へてゐる。

ベルタ　そんなことをおつしやるところを見ると、あなたは今まで一度もわたしを愛してゐた事なんぞはなかつたのね。

アクセル　ぢやあどうしてわたしがお前に向つて結婚を求めたと思つた、答へて見ろ。

ベルタ　あなたはわたしが必らずあなたを愛するのだらうと思つたからです。

アクセル　あゝ神聖にして圓滿具足、渴仰すべき愚昧よ――わたしはお前を相手に詐欺訴訟を起せば起せるのだぞ、お前はあのウィルメルに借金をして、わたしの會計をめちや〳〵にしてしまつたのぢやないか。

ベルタ　あゝ、あんな人でなしが居たんだわ。

アクセル　わたしは今、あいつにお前が借りた三百五十フランを拂つて、緣を斷つてやつた。だがわたし達は金のことでこせ〳〵爭ひたくはない。わたし達はもつといやな事件の始末をつけなければならないのだ。お前はあの惡黨に家内の雜用の幾分を拂はせた。そしてわたしの面目を立派に潰してくれた。お前、その金を何に使つたのだ。

ベルタ　あなたの言ふ事はみんな嘘ですよ。

アクセル　お前はそれを窓から捨てたのかい。

ベルタ　いゝえ、わたしはそれをちやあんと貯めておきました。そんなことはあなたには出來ないでせう、内のむだ使ひ屋さん。